

綠陰泉響



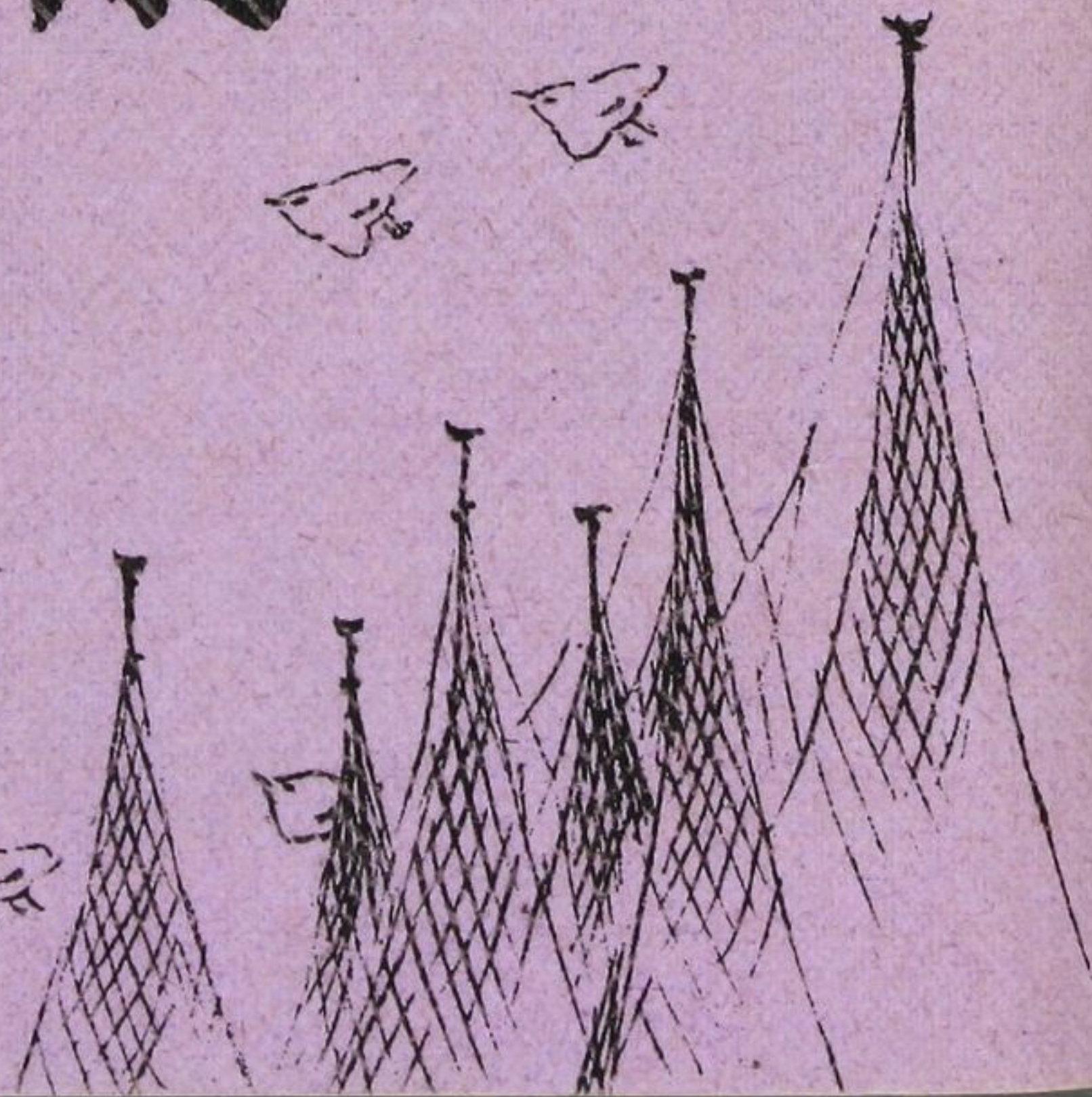
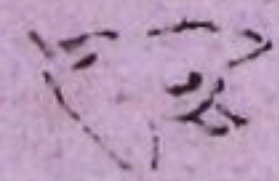
濱風
忘扇
英詩評釋
蝶醉
蜂狂







濱風忘扇



題言

學子ぶる學業時は學び、持ぬべき時にわ
持ふ。是れど真個の勉強とて、秩序ある
學生の執るべた方針とや言はまし。
若夫れ、*山* *火* *燭* *燄* *吐* *ん* *ど* *る* *時* *に* *際* *ふ* *し*、
致し汲ことして、勉學に耽るは、所謂懶
惰者れ、苟も働きて、餘り、或心を盡た
にあらふ。然れば平生、都門に在りて、業

既即塵に汚さるる書生を去て、水村山郭
山郭よまを掃を洗ふべく、常に水村山郭
よまを人とは異なり、其心を修養しして、大に
為まを所ある也。し。本書収むる所、海
島路何れと、驟雨ありて、倒れ山ありの間に
暑を避くる人の好伴侶たるのみならず、止む
哉得むしして、下宿屋の楼上、執事共せざる
をばざる先生かといふも、臥しては書を
讀まば、涼風は必ず、膝下より生じて、

身の飄々として、塵芥よまをを興えん。
實にこれはまは仙凡の境遇に在るを論
せず、消夏の好材料として、一日片時と
缺くば、うらむを存し、ありといふべし哉。

明治三十三年七月

笑而不答、橋の南窓、北下に

耕る者、人考る者



目次

濱風忘扇

一 次 目

江の島	過去の江の島	江の島紀行	片瀬海水浴	龍口寺	腰越村	鶴沼海水浴	大磯海水浴	國府津海水浴
.....
一	二二	一六	一八	二〇	二三	二三	二五	二八



酒匂海水浴……………二九

小田原海水浴……………二九

鎌倉海水浴……………三〇

鎌倉観……………三九

鎌倉紀行……………四〇

鶴岡八幡宮……………四二

海水浴の社會主義……………四五

餘綾の潮風……………四六

樓に登り海にのどむ……………六六

夏の熱海……………七二

熱海遊記……………七八

沼津海水浴……………八八

我入道海水浴……………八八

興津海水浴……………八九

水戸大洗海水浴……………八九

稻毛海水浴……………九〇

北條海水浴……………九一

三崎海水浴……………九三

朝の海邊……………九三

萬里一葉の孤帆……………九四

泉州堺海水浴……………九八

家族的海水浴……………一〇四

海水浴の効用……………一〇七

海水浴の通則……………一〇八

綠陰泉響

目次

初夏野望	一一一
驟雨	一一二
喜ばしき夏の雨	一一三
さんざ時雨か	一一五
天時占候	一一七
さみだれ	一一九
梅雨	一二九
放螢記	一二二
螢	一二三
車窓見螢	一二四
水邊見螢	一二五

目次

螢の名所	一三〇
郭公	一三二
聞子規	一三四
山路	一三七
夏かげ深き遠山の	一三八
水邊納涼	一三八
蓮の花	一三九
蓮の美	一四〇
函嶺紀行	一四一
過去の函嶺	一五九
現在の函嶺	一六七
過去の富士登山	一七九

蝶醉蜂狂

現今の富士登山……………一八六

富嶽と學生……………一九二

富嶽絶頂の景……………一九四

佐野瀑園……………一九七

日光山の紀行……………一九八

過去の日光街道……………二〇九

日光山紀勝……………二一四

掃よせ集……………二二三

惜花……………一

蜀魂に與ふ……………六

目次終

雲雀に與ふ……………一六

鼠に與ふ……………二八

鶯に與ふ……………三九

春の旅路……………四五

戀とは何ぞや……………四八

濱風忘扇

第壹部

江の島



遠く之を望めは恰も金龜の跽起し來るが如しと、故に金龜山與願寺と號す、昔十二の鵜來つて此嶋に徘徊す、故に鵜來嶋うきじま亦鵜島うじまとも云ふ、今其由來をたづぬれば、欽明天皇の御宇壬甲四月、晝夜間斷をく揺り動かしたる大地震の決果なりと云ひ、或は亦開化天皇六年四月、江頭の南方、一夜鳴動して碧空に注ぎ、黒雲環瓏洋々たる百灘天地を別たす、數千の鬼神海上に群り、火を水に放ち、風を波に發し、雲をれこし、雷をひきひ、潮をさぐり、岩をけづり、一島を一夜のう

ちに作り、忽焉鬼神として消へ失せたりと、後ち天はれ波しづまり、翠金紫紅の雲くだり、美音雅樂碧空に聞え、即ち今の繪の島浮き出でたりと、吾人は其孰れか信なるや今之を研究するの要なし、只其風景の描けどもならずして天工の妙、吾人の眼を悦ばせ心を慰めしむるの外、何物も吾人に價あるかしと念ふのみ、

此地東は七里ヶ濱由井ヶ濱等を経て鎌倉の海濱に面し、西は鵠沼大磯小田原の海濱一帯、白沙青松烟霞に包まれ、大山雨降より函根山嶽を経て富嶽を望み、視線の盡くる所熱海伊豆の山脈海に流るゝを見る、南は即ち蒼海幾千里水天髣髴たるの所、遙かに豆州の大島を眺めて太平洋に連なる、全島周圍凡そ十八町、龍蟠虎噬の巖石相寄り相待て成る、石磴岩本院の邊より起り、斜めに天を指して登る所三道あり、正面正道は幾百千の石段を踏み超へて社前に到り、左は此等

の石段を避けて、樹木森々天を覆ひ、日光の洩れざる陰路を通りて、金龜樓旅館の前に出づ、左は小學校舎を右に見て、交通遮斷の如き枯木の柵を潜り、奥の院入口に到る、之れ即ち島民の通行する所、江の島「通」の人よ誇る間道たり、蓋し江の島初參の者は必ず左の山腹蝦蟆石を見て正面の石段を登り、社頭の蘇鐵、グラント將軍手植の松を見物し、絶頂の山路左り外人の妾宅宮田りさの門前を過ぎ、少しく下りて見晴しの茶屋に出で、一先づ爰に休息して眼下に渺茫たる大海を見くだし、亦下りて昔地震の爲に全島二分したりと云ふ咽喉道のどみちに出で、試に其左側を偷窺せよ、絶壁千仞、中間雜草覆ひ茂り、怒濤轟々其根を撃つ、壯觀此處に比する所ありし、去て奥の院に到り其天井を見よ、酒井抱一か筆になれる八方睨めの龜あり、其前かみは龜の甲石こいしあり、龜の甲に酷似す、之より稍下りて左側嶄巖の絶頂に松あり、

其邊に掛茶屋あり富士見亭と云ふ、双眼鏡を貸與す、試に取て以て之を見よ、潮烟に包まれたる大磯の海濱も、碧海岐立せる烏帽子巖も、一望の下手もこに取るが如く見ゆ、名物榮螺のつぼ焼を賣り、亦龍穴に到るの道險なるが故に草履を貸す、少しく降りて右側高き所、一松樹の下、哀れある碑石あり、其近傍の崖ぶちを稱して兒ヶ淵ちんと云ふ、爰には最も名高き悲哀あるLove story(情話)ありて存す、傳説によれば昔建長寺廣徳庵に沙門自休藏主なる者あり、參詞の途次瀟灑たる美少年に逢ふ、花の像かたち、吉野山、峰の櫻か、秋の月、雲間を出る風情にて、其名を白菊とちん呼べる稚兒ちんなりけり、自休意馬躍りて狂し、情火燃えて其身を焦す。

佛の道も黒染の

闇とちりしは白菊の

花のすがたに露のみの

散りてもなごかたしからん

噫、酷ちり、爾沙門の身を以て、何故に此蕾の花を散したるや、白菊其身の潔白を立てん爲め、一夜雨を侵して江の嶋に到り、

白菊と信夫の里の人とは

思ひ入江の島とこたへよ

うきことを思ひ入江の島がけに

すつる命は波の下草

どの二首に万斛の涙を澆き、懸崖千仞の絶頭に立ち、意を決し狂瀾怒濤に其身を投す、噫之れ何人たる慘事ぞや、自休追跡之を聞き、骨鳴り、肉動き、せき來る涙とめ難く、即ち一詩を賦し、一首を詠し、彼があとを追ふて深潭に投し、岩礁に頭腦を碎く

懸崖嶮處捨三生涯

十有餘霜在刹那

花質紅顔碎ニ岩石ニ 娥眉翠黛接ニ塵所ニ
衣襟只濕フ千行ノ涙 扇子空ク留ム二首ノ歌
相對無レ言愁思切ナリ 草鐘爲レ誰ガ促ニ歸家ナ

白菊の花の情の深き海に

共に入江の島ぞうれしき

俳人四時庵一句を發し云ふ

むかし〜散るや櫻のちごが淵

兒か淵、

散りてゆく、此世は夢の、

かりまくら、

ふみまよひぬる、ちぎりかりけり

(作者不明)

兒が淵より途漸く下りて、所謂まなした粗岩マナシタに到る、砥の如き大石眠りて水面に泛ぶ、此邊採鮑の漁師あり、客を呼び錢を乞ふて鮑を採る、價に従つて大小あり、蓋し海底に籠を隠し、鮑を其内に藏す、狡檜惡むべしと雖も、亦之れ遊山の一興なり、棧橋を渡り龍窟リウキツに到る、炎熱金を鎔く夏の日と雖も、爰に來れば洞内より涼風吹き來りて、心身共に爽快たり、即ち燈を求めて進む、燈影朦朧、歩を運ム四十餘間、洞究りて両岐に分る、一は胎藏界、一は金剛界あり、石あり、日運上人趺坐の跡なりと云ふ、亦無熱池あり、水、氷よりも冷なり、試に指を染むれば、全身凍痺するが如く覺ゆ、洞漸く蹙まり、匍伏するも入る能はず、傳へ言ふ之れ富士の火山口に通すと、

島の入口兩側に旅館十有餘軒あり、惠美須屋、岩本院、さぬきや最

も大なり、其うち岩本院最も古く、金龜棲最も新し、殊に岩本院は慶安二年四月朱印あつて、其客殿には朝鮮人螺山の筆になれる、岩本院ある三大文字の大額面ありしが、今猶存しあるや疑はし、當時御開帳は毎年三月七日に始まり、同院の寶物を展覽せしめたり、今其目錄を見るに

- (1) 刀八毘門金像 (弘法大師作)
- (2) 馬の玉
- (3) 九穴の貝
- (4) 二岐竹
- (5) 阿彌陀畫像 (弘法大師作)
- (6) 蛇角二本
- (7) 北條氏康證文 (一通)
- (8) 江の嶋縁起 (五卷)
- (9) 太田道灌軍配圖

今日の岩本院即ち富士見樓あるものは、全く俗化し來りて普通の旅人宿となり下りたるが、さすがに昔の俵げ存し居るにや、何處とも

かく高尚ある所あり、嘗て、兩陛下の御駐在あらせられたることあり、其建物の一室の如きは間毎に千金を投したるとか、外國の貴賓にして此地に遊びたるもの、必ず爰に休息し、或は投宿せらるることあり、殊にボアソナード氏の如きは自ら資を投じて、海岸に一軒の客室を建築せられたり、今は岩本院の所有に屬して普通の客室とある、岩本院の客筋は官吏紳商多く、惠美須屋には中等商人職人の上等客筋多く、さぬきやには學生普通交り客多く、金龜樓には外國人多し、其客筋の異れると同時に亦各々其眺望を異にす、金龜樓は蒼茫たる遠景に富み、惠美須屋は片瀬、腰越 七里ヶ濱より鎌倉の海岸を望み、さぬきやは大山雨降の山脈より久毛沼附近の風景に富み、岩本院は函根及び豆州の山脈より富嶽時々の變態手に取るが如く見ゆ、故に亦富士見樓の名あり、

江の嶋の名産は貝細工あり、三十七種類の貝を以て、種々雑多の細工をなす、彼等は人を見て其價を異にすれば注意すべし、彼等の商賣は支那人的殊に縁日の植木屋に類す、買彼らさる様注意を要す、江の島産出の貝は大凡左の如し

もみじ貝、すみ貝、すゞめ貝、かうばし貝、銀貝、菊貝、千鳥貝、どこ貝、ひげ貝、よめのこし貝、かぶと貝、扇貝、梅貝、青貝、櫻貝、はたて貝、い貝、ほら貝、紫貝、鍾馗貝、とび貝、いも貝、ふじ貝、琉球さんご、みの貝、波のこ貝、いちご貝、うちはやぎ海杉、ふり袖貝、磯ご貝、松貝、うづら貝、八奇貝、させる貝、蛇貝、にし貝、

所詮江の島は學生の避暑地にあらず、之れ單に遊覽地あるのみ、避暑海水に浴せんとするものは、宜しく片瀬、腰越、久毛沼、其他鎌

倉等に行く可し、而して時々散策を試むるの地とすべし、即ち詩人賦して云ふ

驚波濺絶辟 老樹影參差
畫島眞如畫 遊人歸去遲

*

*

*

*

*

夏衣そでが袖にも吹きぬいて

富士の裾までまくる濱風

雪

磨

過去の江の島

(甲申日記に據る)

片瀬村、左右ひろき畑なり、(如何に其變遷の甚だしきを見よ)ここを経て元の浦に出れば(今の洲鼻ならんか)真砂地清らにして、今日は汐干なれば徒歩にて江の島に至る汐干よりして左は鎌倉三浦を見渡し大島も見ゆ、右は大磯小磯のあたりを望む、富士は雪の内より出でて雲にうびへ、遠山翠辟の如く波に連ちり、根箱は嶋のあなたに見えたり、烟霞滄海の景趣たぐふ方なく眺められぬ、島は老死なすの薬なん求めつべく、堯恵が蓬萊洞(今日の龍穴)と云ひしもむべなりと思はる、嶋に至れば、先づ銅の鳥居に金龜山と云ふ額打たり、茶屋町(今の両側旅館のある所なり)を上りて下の坊に至る、真言宗あり、酒肴出してもてをしければ、暫しこゝにとゞまる、

又坂を登りて下の宮に詣づ金龜山の額あり、土御門帝の御時良眞和尚の入宋して持來りしと云ふ、石の碑も土中に半ば埋れて立てり、篆額は大日本國江島靈迹建寺之記と見ゆたれと其外の文字は詳からず、上の宮に至れば天女祠と云ふ額を打つ、岩本院のあづかれる本宮の額は大辨財天と書たり、内陣には後宇多帝の震筆よて、江島大明神と書かせ賜ひける額をかゝぐ、神輿は四月己日に此宮にうつし、十月己日に渚の窟に鎮座させしむとなん、此十二日には其式をなすと僧の云へり、内陣に入りてぬかつけば、社僧神酒あたへ御幣さづけぬ、すさにも神酒與ふ、ささの上下の宮もこの如し

みるなはず大海原のいと廣き恵を仰ぐ江の嶋の神

内陣の外にかけたる對聯に曰く

人皇八十四代順徳院御宇建保四丙子年正月十五日己日大海忽變成

道路誠幾希有之神變也已已祭始焉
又山門にかけたるは

自開化帝六載己丑四月湧出至安永己亥千九百三十一年

南の渚に下りて濱傳波をふんで、洞窟に入る奥に宮あり、無熱池弘法の護摩壇、日蓮の跌座石かとあり、窟の前にある平なる石を魚板なまいた石と云ふ、立歸りて濱邊にて眺望して、暫しあるに、漁父の巖上に釣を垂れたるも面白し、坂を登りて兒か淵を下し見る、こは昔し建長寺の廣徳庵にありける、自休藏主か思をかけし白菊と云ふ童か、二首の歌を詠じて身を沈めしに、自休慕ひ來りて又詩一律を賦しける所と云ふ、此處に此島の事誦じたる詩歌彫り付たる石の碑どもあり、

歸さは元來し汐干、汐みちてとく行きたるすさは、海を隔てと群れ

居たり、此所も又臺越し肩車にて渡りぬ、(今日の如き棧橋なければ人の肩かし行きたるものこ)

江の島記(元和二年丙辰紀行)

藤澤より馬に跨り、海濱ちかき所にて、漁父の舟をかり、江の島に渡りて見れば、あかたの海の岸の下に、大なる岩窟あり、たい松をともして、ふかく入るほどに、百歩あまりにてやみぬ、昔し龍神棲のみける所となんいひ傳ふる、この島の辨才天女は世にかくれなき事なり

借問島中人、不知此孰神、蜿々遺蹤在、君其問水濱、江島從來神女居、風霧鬢鬢駕雲輿遊人若有登仙意、水宿應傳柳毅書、

神世いかに今むつましみわだつみの

八重のしほぢに言傳ことづてやらん

江の島紀行

相の州、勝地に乏しからず、而して其特に奇を以て著はるる者を江の島と爲す、江嶋は鎌倉之西南隅に在り、片瀬村と僅に一綫の路を隔つ、退潮之候は、歩して而して達す可し、蓋し一小島耳、己卯之歳、片瀬村に寓し、頗る其奇を窮むるを得たり、其地たるや、東は即ち七里濱と、由井濱と、稻村崎を隔て、灣環相連あり、白沙青松、緑波と相映し、東南は即ち三浦岬、海中に斗出して、嵐光、掬す可し、岬以南は、積水天を涵し、浩蕩、涯無く、所謂相模洋也、洋心に一大島有り、隠々として見る可し、是れを豆之大島と爲す、西北は即ち連山環列し、蒼翠、滴たらんと欲し、芙蓉峰、天際に巖立して、秀色、人を射る、而して函嶺雨降の両山、其左右に對峙し、屹然と

して競秀す、其下は即ち海水一大灣を成し、波濤洶湧して、恍として素練を洗ふが如し、即ち洶綾磯也、北端に一川有り、林際に掩映す、平流澹如、紆餘して海に入る、是れを片瀬川と爲す、而して江島は正に其口に當る、周圍一里、戸口百數、分つて東西と爲し、西部は則ち茶樓酒肆、軒を連ね屋を駢べ、頗ぶる鬧熱を極む、東部は則ち漁家蟹戸、斷續隱見して、雞犬相聞え、幽致愛す可し、嶋中に三祠有り、邊津宮と曰ひ中津宮と曰ひ、奥津宮と曰ふ、結構皆偉あり、南して阪を下る數十歩、潮流、渦を成す、是れを兒淵と爲す、其東は則ち巨巖凸凹して、行歩孔だ艱、名づけて俎巖と曰ふ、其上は巖巖側立し、勢、傾倒せんと欲す、其下は狂瀾、雪を噴き、飛沫、烟を生じ、驚く可く喜ぶ可し、路窮まる處、棧を架して人を通ず、巨洞有り、暗黒にして咫尺を辨せず、燭を執て以て入る、一字有り、

是れを天女の廟と爲す、其背後に龍池穴有り、潮水其中に浸灌し、風濤穩あるを待ち、而して舟楫之力を假るに非れば窺ふ能はずと云ふ、予未だ其奇を窮むるに及ばざる也、『今茲春、予、軍籍に歸せしよ以來、拘々焉、常に規律の拊束する所と爲り、復た汗漫之遊を成す能はず、因て當時作る所之文を把て、試に之れを誦すれば、則ち湖山之色、波濤之聲、宛然として耳目に在り、竟に懷に忘るゝ能はざる也、頃者幸に數日の間を得、角巾藜杖、往て烟霞の盟を尋んとす、未だ知らず、波上の鷗、能く我を容るや否や、

片瀬海水浴

昔は瞿麥なでしかの名所にして、唐土からこしが原と云ひし一部邊、片瀬川の邊に、海濱に沿ひて、波の音、松風たかき一村落は、今日の片瀬村あり、東海列車藤澤驛に下り一里餘、規定車賃拾七錢を拂へば、洲鼻の立

場迄挽き寄す、停車場より八九丁よして、片瀬川の上流山本橋に到る、此所より川船ありて流を下り海に出づ、一人の船賃十錢の上を出です、蘆葦垂柳陰暗き所、川えびのはね飛ぶを見る亦一興たり、歩行するものは橋を渡り直ちに右に折れ、河邊に沿ひ正面綠草打ちびける夏山を望み、右に松繁き所大なる砂山を見て、三四丁行けば即ち江の嶋正路に出づ、之れ村民の往き通ふ間道なり、此れより濱邊迄は拾餘町なりとす、

旅館の重なるものは柏屋なりしが四五年前、其母家なる建物の焼失せし爲め、裏手ある別室のみ、客室に充つ、一日の宿料五十錢より七十五錢迄とす、其他は皆村民の一室を借り受け「一週亦は一ヶ月幾許と取極めて下宿す、毎年八月一日頃より九月十日頃迄、學習院の海水浴場となる、故に村民の重なる家屋と寺院とは、此等學生の宿所と

なり、事務所となり、酒保とある東京附近に於て最も便利にして、學生に適したるの地は、片瀬、腰越、鵜沼の三ヶ所となす、大磯の如きは繁華にして遙かに便利なりと雖も、之れ貴族的にして物價總て高値なるのみならず、沿客の多數は婦人俳優、紳商、貴族的人物多く、殊に其濱海の浴場の如きは、壯なり、大かりとの風致あり、之れ我輩の學生に不適當とす理由なり、

散策の地としては江の島あり、龍口寺あり、腰越あり、或は夕飯後海濱に出で、幾百千の燈火、江の嶋高樓中に點々輝くを見、或は太平洋より吹き送る濱風に、袖を吹き飛出して詩を吟ずるも可かり、或は親友相携へて冷へたき沙上に轉まびつ、未來を談ずるも亦一興味たり、

龍口寺

弘安年間日蓮の高弟日法の創立に係る、寺内に土牢つちくらあり、日蓮を幽囚したる所、亦敷草石あり、上人難に遇ひ無辜の刃を受けんとしたる石なりと云ふ、背後山を負ひ、古松老杉翠色深き所、寺院建つ、號して祖師堂と云ふ、堂の西小邱あり、之れ七面山となりとす、高さ僅に數仞然れども、眺望極めて佳絶あり、邱上に古松多く翁鬱として林を成す、西は即箱根雨降の山脉、其左右を巒巒圍繞し、重峰複嶺、淡濃殊態、雲烟吞吐し、奇變百出、殆ど端倪す可からず、近く望めば則ち海水灣を成し、澄明透徹、玻瓈鏡を開く如く、漁舸數百、其間に碁布す、一巖、形帽に似たる有り、名を烏帽子巖と曰ふ、其西岸は大磯驛なり、屋宇隱々として辨す可し、蓋し古の所謂絢綾の磯あり、南數町を隔て一島あり、老樹蒼蒼、翠色滴んとし、沙路彎環して、自ら一地峽を成す、峽頭人家數十戸、高き憑て樓を構

如、碧瓦紛壁、畫の如し、即ち畫嶋あり、其南は則ち水天一碧、淼茫無邊、所謂相模洋なり、邱下に小川有り、林影倒涵す、是れ片瀨川あり、川之東は即ち片瀨村草舎軒を駢べ、雖犬相聞ゆ、邱之東を腰越村と爲す、蓋し古の驛址也、昔者源延尉之平虜を鎌倉に護送するや、柘原景時の讒誣する所と爲り、遂に此驛に入る事を得ず、乃ち僕辨慶に命じ、書を爲りて以て冤を訴ふ、其書尙ほ存すと云ふ、信乎、

腰越村

今は寂漠たる一漁村たりと雖も、往時鎌倉に入るの要路たりき、義經平家を平け、凱歌を歌ふて將に鎌倉に入らんとするに際し、梶原景時なる者の讒に依り、其入城を拒まれ、千歳の恨を飲んで、此所に止まり満願寺を其旅宿に充て、臣、僧の辨慶をして所謂腰越狀ある

ものを作らしむ、句々凜烈血を染め、無情の金石をも泣かしむべき大文字たりしと云ふ、辨疏を草するとき採むで硯滴に充てたる池水あり、硯の池と云ふ、池畔に巨石あり、辨慶腰掛石ありと傳ふ、今猶存す、夏期村内稍見るべきの家屋は、大概海水浴客の下宿所とある、殊に學生避暑の地として最もプラクテカルの所なりとす、片瀨村と村つゞきあり、

鵜沼海水浴

藤澤停車場より十五六町車賃十五錢以上を要す、砂地あれば荷物を携帯せざる外、歩行するを却て便利ありとす、亦江の島片瀨等より散策を試んとするには、片瀨川の河口、蘆葦繁茂する沼地を通り、波打寄する磯邊を傳い、地引(引あみ)を見ながら、海濱なる葭葦張の掛茶屋に到る、旅館としては鵜沼館、侍潮館、東樓、三升樓等、皆

四五年前に新築したるものとす、之より西五六町松林繁き所に明治館なる俱樂部あり、最も宏大なる建物ありとす、此地海水は遠淺ありと雖も、潮流の形勢に依り、時々「ウタリ」あるもの生しをて、勝手を知らざる浴客には甚だ危険あり、亦満潮に至れば最少なる一種の「クラゲ」波に浮ひ來りて、身体を刺し、激痛を覺へて皮膚腫れぬがることあれば注意すべし、最も公平なる觀察を下せば、此地は最良なる海水浴場とは言ひ難かるべし、蓋し其風景の點に於て片瀬に劣らず、殊に江島側面の岩礁屹立して、波濤碎け時らね雪を降らすなど、亦筆力の及ぶ所にあらず、或は水天髣髴の間、豆州の島嶼を眺め、或は波靜かある時にあつては、白帆點々天に連り雲と共に消え行くを見、或は函根山脈連綿波濤の如く起伏する望むを、亦都人士が避暑すべき一勝區たるを失はず、

第二部

大磯 (其附近)

新橋停車場を發して二時間 賃錢三等六十一錢にして、貴族的海水浴場大磯驛に到る、此地南面は渺茫たる太平洋に連りて、豆相の遠景一幅の畫と縮まる、北は高麗山、千疊敷山、泡多羅山等連錦起伏す、海濱は即ち古歌に詠したる小ゆるぎの磯あり、打寄する激浪砂石を洗ひて最も清らかり、海水浴館としては禱龍館、松井館招仙閣、長生館、群鶴樓、甲喜樓等、亦舊東海道筋にして街中にある普通の旅館は角屋、宮代屋、石井、青柳等、其最も大なるものあり、抑も大磯海水浴なるものは、明治九年元の軍醫總監松本順翁が其潮水の良好なるを見て、地方の有志に説き海水浴場を開設せしよ

り以來、年を遂ふて繁盛に赴き、戸數千有餘貴顯紳士の別莊のみにても既に四五十軒の多きに及べり、亦夏期に至れば都人士先を争ふて此地に遊び來るが故に、貸本屋、雜誌新聞店、大弓、玉突、氷屋等、一時又増加して頗る雜沓を極む、驛の東端には虎子石あり、昔曾我十郎祐成、妓、虎が許に通ひたる折、仇民工藤祐經後患を斷たん爲め、人を放ち竊かに箭を放つて之を射らむ、中らず過つて庭上の石にあつ、即ち祐經恙を得たり、故に亦身代石とも云ふ、後富士の狩野に、其敵祐經の首を取り、仁田某と戦ひ、敗れて死するに及び、虎此石を受して措かず、情夫十郎が遺物として愛撫す、故に其名ありと傳ふ、

抱いて見る旅の戯れの虎子石

延臺寺の舊跡ある一堂宇内に存す、石の高さ二尺一寸幅尺有餘、石

黒くして蒼色を帯び鑿痕を存す、

心なき身にも衷れは知らけり

鳴立澤の秋の夕ぐれ

と詠じて人生を看破したる、脱俗の高僧西行法師、其杖に倚り笠を傾け、詆徊去り能はざらしめたる古跡鳴立澤は、驛の西丘陵一帶老松の眠り居るが如き所にあり、其近傍には西行堂、虎子堂等あり、各其木像を安置す、其傍にある休憩所鳴立庵にては、客の望により西行の筆跡及び其杖等の古物を一覽せしむ、

水寺鳥驚秋似夢、 驛門柳瘦月如眉、

高緇名妓各千古、 西上人碑虎女祠、

鷓立澤

澤畔孤吟鷓影懸、 西行遺跡暮籠煙、

無心未必陰秋水、
消盡官情已幾年、
松の木立波こそ岩の景色まで

實に見所は大磯の濱

國府津海水浴

南、海に面し北、山を負ひ眺望また沼岸の浴場に劣らず、十餘年の昔には漁家軒を並べたる一寒村たりしが、東海列車開通して停車場設置せられたる以來箱根、熱海、小田原に赴く旅客は、必ず此地にて下車する事となりて俄かに其地の繁昌を増し、大に舊觀を改むるに至れり、此地海水浴旅店は、蔦屋別荘及び國府津館等にして、皆近年の新築に係り、其の海岸を以て直ちに冷水浴場に充つ亦別に内風呂の備へあり、一日の宿泊料凡四十五錢以上、七十五錢にして又其

座敷は一週間乃至一ヶ月の約束を以て浴客に貸渡す事あり、背後の山には近年多くの密柑を培養し終に此地の名産となる、國府津密柑なるもの即ち之れあり、此地より箱根湯本に通ふ電氣鐵道あり、汽車の着後十分間を隔てて發車す、

酒勾海水浴

國府津驛より西大凡廿五町酒勾川の河口、海に沼ひて白砂青松、七千餘坪を圍ひこんで、十五六軒の別荘を建て、夏期浴客に貸渡す、之れ即ち松濤園とちん呼べる別天地あり、椽先庭せんさまの砂地には、名も知れぬ色々の夏草の咲きたるをぞ殊に芽出たし、

小田原海水浴

函根熱海等の温泉場に到る要路として、市街亦繁榮なり大久保大藏大輔が舊城市にして戸數二千有余、驛内に郡役所、警察署、郵便電信

局電氣鐵道會社等あり、舊城内には二宮尊徳翁を祭れる報徳神社、舊城主大久保氏の靈を祭れる大久保神社、其北には小峰梅林あり、驛の西端に松原神社あり、海濱ある海水浴旅館は鷗盟館と稱し、今は箱根塔の澤環翠樓の支店なりと云ふ、後に森林を負ひ前に大海を見晴し、頗る廣寛にして數十組の客を容るゝに足る、虎屋の外郎、漬物、鹽辛等は此地の名物なり、海水浴場としては、此近傍沼海の劣等あるものとす、其他平塚茅ヶ崎等の海水浴ありと雖も大同小異にして別に記する程もなければ畧し置くなり、

第三部

鎌倉海水浴

海水浴場としての鎌倉は、片瀬、大磯等に劣る數等なりと雖も、兎

に角鎌倉山の星月夜と唄はれて、豪華極りかかりし古覇府のことにしあれば、名詞靈刹固より多く、散策を試むべき名所古跡亦多ければ、夏季遊客を誘引する論なしと雖も、其遊客の重なるものは、所謂「通り一遍の客」にして長く滞在するも至て稀なり、海水浴旅館としては海濱院なる外國人見當のものあり、一日滞在して五圓以上を要するこなれば、學生諸氏にとりてはとても思ひ付かざるべし、海は遠淺なりと雖も、何故にや毎年溺死者を生ずることなれば、海に「ケチ」の附きたると同時に、浴客にも「オジケ」づきたれば今年の夏は如何あらむか、今其重要なる勝地を擧ぐれば

鶴ヶ岡八幡宮を中心として、鎌倉の宮、頼朝屋敷跡、荏柄天神社、壽福寺、芙蓉寺、淨妙寺、建長寺、長壽寺、禪興寺、圓覺寺、妙本寺、光明寺、大佛、觀音、星月夜の井戸等、殆ど牧擧するに遑あら

すと雖も、些少たりとも是等の名詞靈利の歴史を説かざれば、鎌倉なるものをして讀者諸君に紹介するの價值なければ、最も簡短に之を説くことゝかしぬ。

鎌倉及び其附近を遊覽せんとするものは、必ず土曜日或は日曜の両日を撰ぶべし、何と云へば此両日に發賣する往復切符あるものは、普通賃錢の二割引にして、三日間其効力を有し、殊に藤澤鎌倉共に共通にして、鎌倉に下車し翌日藤澤より乗込むも、藤澤に下車して江の嶋、片瀬、腰越、七里ヶ濱、稻村ヶ崎等を経て、長谷の觀音大佛、星月夜の井戸等を見、鎌倉停車場に到り、或は茲に一宿して翌日鎌倉全体を見物し、乗車するも、切符の効力は少しも變らされば、巡遊に取りては最も便利なる方法ありとす、我輩は此最も便利なる方法に據り、特に讀者諸君に報道せんが爲め實地に徴したる一日の行樂をば紹介せん

とす、

明治卅三年六月三日午前六時半家を出て新橋より藤澤行往復切符を求む、三等七十錢、二等一圓十四錢ありと、即ち平日藤澤行往復三等賃錢と大差なきを以て、二等切符を撰び、七時二十五分大垣行列車に乗り込み、八時五十分大船に着す、鎌倉行は此所にて乗換ふるものとす、九時五分藤澤に着す、食に飢へたるが如き乞食車夫共は、日曜にて込みの賃錢、むしり取らんとて群り來る……江の島へいくらだ、五十錢くだされ……高い……決して高くはありませぬ……少しく行きて他の車夫に問ふ洲鼻までいくらだ(洲鼻は江の嶋のてまい車は此所迄しか行かぬ)三十錢くだされ(車夫は洲鼻までやれとへ言は土地の勝手は知つた者と思ふ故に非常なことも言はぬ)高い十五錢にせよ、参りませう……斯の如くに車代に相違あれば。少しく歩みて片瀬歸の車に乗るべし、警察署より取極められたる規則の車賃は江

の嶋即ち洲鼻迄十七錢あり、此れより以上の賃錢を貪れば、彼等は其鑑札を取り上げらるゝあり、然れども本年中には藤澤停車場より江の島を経て鎌倉停車場に巡遊電氣鐵道布設せらるべければ、此等の悪車夫共の運命も最早長くはあらぬことあるべし、山本橋を渡りて正面、新緑朝露に濕りて、緑彌々濃き所、大なる白色ペンキ塗の廣告建札を見る、近頃煙草屋旅人宿の大なる廣告の、最も人の注意を惹く可き、自然の風致ある所には、遠慮もなく建て列ねられたるは、我輩の最も癪に障る所あり、彼等は自然の美を戮殺したる大罪人あり、彼等は造物主が吾人に贈りたる自然の寶物を却奪したる強盗あり、今にして彼等の横行を制止するに非らずんば、彼等は日本全國の風景を蠶食し了らん、九時三十分頃江の島に到る、何時來ても眺めみあきぬ山の色、海の景、即我輩は此景色ようたれて恍忽世

の罪惡は洗滌されて仙人！、十二時前片瀬柏屋に到りて中食す、一時半頃、腰越村を過ぎ七里ヶ濱に出づ、昔古河公方成氏の両上松と武を鬪したる古戰場たり、或漫遊案内には此邊をば形容して曰く、沙平らにして砥の如し、松は緑に砂白しと、我輩の見たる所にては左は砂山よして尾花銀色の芽をふき居れども、緑ある松なく、右は太平洋より寄せ來る激浪送卷き來れども、砂は平からず亦余り白くもあらず、砂一面に昆布の如きものを乾し、其乾きたるものに火を點し燃し居れば、煙は路を覆ひ砂は其灰に交りて眞黒なり、路三分一位來りたる所に一軒の茶屋あり、名物團子を賣る、行くこと數町にして行逢川あり、日蓮上人遭難のとき、此所に於て双方の使者逢合せし所ありと云ふ、亦上人が其袈裟を掛けたる一本の松ありと聞きしか、其松らしきものは更に見當らず、只砂の上に朝顔の點々小

松の下に咲き誇れるを見るのみかりき、
稻村ヶ崎近傍に至る、左側の麓に外國人の別荘あり、莊觀美麗なる
建物あり、其門の傍に紅がらにて赤く塗りたる茶屋あり、立看板を
立てるれば演説會でもあると思ひ見たるに、「飢へ、渴く、者は幸福
あり」とありたり、即ち知る基督教の福音は、期の如き寂寞ある海
邊迄も擴り居れを、亦數町行きたる海濱に數軒の別荘あり、綠樹陰
暗き所、早や蟬日暮の聲喧しく、湓流滑々聲ある所に此等の別荘は
建築せらる、此れより一村落實りて坂に登る二三町、其坂上に到れ
ば涼風一陣樹木森々天を覆ひたる坂路より吹き上る、亦其陰路より
由比ヶ濱長谷の家人をに見くだしつゝ、急足長谷に下る、旅館三橋
の前をは左に折れ、長谷觀音に詣づ、五六ヶ所の石段を上りて、觀
音堂の前に出づ、一個の大なる銅製天水桶に、肉太の金字にて海光

山と記入しありたり、即ち阪東第四の禮所にして、十一面觀世音を
安置す、風景亦佳絶なり、去つて大佛を見る、長谷觀音の北、御輿
嶽の麓にあり、像は唐銅の蘆遮那佛にして長さ三丈五尺、膝の廣さ
五間半、袖口より指先まで二尺七寸餘、掌中に二三人を立たしむる
こと易く、奈良の大佛と共に日本の二大銅像となりとす、建長四年
の鑄造にかゝる、胎内に入る、一錢の見料を取らる、去つて鶴ヶ岡
八幡宮に到る、途中顔色憔悴したる婦人四五人に遇ふ、多分肺病患
者からんか、須磨、明石、舞子の海濱の如く、鎌倉にも亦肺病患者
澤山あり、巡遊者の注意を促す、
八幡宮は國幣中社にして應神天皇、神功皇后、大仲媛の神を祭る、傳
へ聞く、康平六年伊豫守頼義の建立する所にして、永保元年陸奥守義
家之を修復すと、其後頼朝之を小林の郷に、再建し、建久二年更に今

の地に遷宮して、大に寶殿を造營したりと云ふ、正面に神樂殿、右に仁徳天皇を祀れる若宮、頼朝公を祭れる白旗の宮あり、昔し靜御前頼朝の命に依り一曲の舞を奏したりしは此の若宮の社殿なりとぞ、又石階の西側に銀杏の大樹あり、承久元年當宮の別當、公曉が實朝を斬殺したるは、即ち此處なりと言ふ、石階を登れば直ちに本社の拜殿に達す、本殿は堅九間、横三間にして拜殿は四間に二間なり

たさくこる鎌倉山のはとくきす

千陰

かれもむかしや忍び音に啼く

瀛車の時間迫りたれば他の古跡を尋ぬるに違なく、午后四時三十九分新橋直行の列車に投して歸る、

鎌倉の山を超えるは乗る駒の

契冲

星月夜ころしるべなりけれ

鎌倉觀

源長保

つとめて八幡宮に詣づ、鶴か岡の松風千とせの聲をならして、柳原の柳、年ふりても變はらぬ緑の色、いともく信心さまに銘し、貴さこゝろ覺は侍れ、山上の宮は、いぬる壬午の年睦月に回祿しければ、石階のもとの若宮に鎮坐せり、本宮三社若宮四社を祀る、あすは祭なればとて、もり砂なとしきてあり、

陰高き神の恵も鶴が岡

年舊る松の色に見分けり
郭公たが爲からぬ夏も來ぬ

鳴て聞かせよ鎌倉の里

公曉の隠れたりと云ふ銀杏樹、又は轉輪藏多室塔鐘樓など見めぐりぬ、垣の東ある鳥合か原、頼朝卿の屋敷跡、あるは同じ卿の墓、法花堂、荏柄の天神、衣はり山などは先きの年見ければ、こゝにて遠望して、元の赤橋を渡り、雪の下二の鳥居の左より村に出て、日蓮の法を説き初めしと云ふ、ひきが谷の妙本寺を左に見、松葉か谷安國寺の前を過て、名越の切通しにかゝる、此山の峠より富士をば西北に望む、小坪村の廣尾坂を下る

鎌倉紀行

晨紀し、鶴岡八幡祠を觀る、平直方、下野介を以て此に家居し、其女を源頼義に配す、頼義の勳を東北に立つる、岩清水八幡を此に祀る、二位、府を開くに及び、遂に巨社と爲る、門に金剛の像を安ず、側に放魚池有り、小嶼に天女の祠を安ず、石梁穹隆、赤橋と曰ふ、五層塔有り、宋版の一切經を藏す、一偃柳蟠虬の如し、靜子舞を演せし處、銀杏樹、老幹乳を垂る、公曉右府を刺せし處、祠は中央に位す、飛薨危欄、莊麗を窮極す、右に白旗柳營の二祠有り、一は二位を祀り、一は右府を祀る、鎌倉六百年の霸跡而して此祠當時之觀を改めず、人をして低徊懷古せしむ、右折して建長寺に至る、北條時頼、元僧、蘭溪を待つ所、門に巨福の二字を額にす、筆勢飛舞す、傳へて趙松雪の書と爲す、樓に十六羅漢の像を安ず、今其八軀を失ふ、太宰徳夫の湘中記に云ふ、樓門の榜額過大、之を樓下に

懸ゝるも、猶ほ屋宇のごとく然りと。今復た存せず。長壽寺、建長と相對す、足利高氏の廟有り、其前を管領の第址と爲す、管領は足利基氏の官衙、氏滿關東公方と稱するに及び、遂に以て兩上杉氏を呼ぶ、其西北を東慶尼寺と爲す、北條時宗の妻秋田氏が創する所なり、圓覺寺、莊嚴、建長に亞ぐ門に瑞鹿山の三字を榜す、後光嚴帝の宸翰なり、開山堂、宋の僧佛光の像を安ず、

鶴岡八幡宮

一宏履、雲霄に聳起するを觀る、是を鶴岡八幡宮となす、是日流鏑馬の儀を修む、觀る者堵の如し、詞門の外を雪の下と云ふ、市街整列す、里餘にして海濱に出づ、天將に雨ふらんとし、陰風怒號し、激浪層起す、右顧すれば樹色森然、稻村ヶ崎と爲す、新田左中將投劍の處、汀に沿ふて而して西す、

先づ鶴岡の祠よりして而して始む、祠は山椒に據る、古は大藏山と曰ひ、後に大臣山と改む、相傳ふ、藤原鎌足、鎌を是山に埋む、因て鎌倉と稱すと、所謂大臣山亦鎌足を指す乎、康平年中、源賴義、祠を建て、治承五年に二位再造し、始めて大社と爲ると云ふ、祠より油井濱に至る、直道半里、左右行松を列ね、以て鎌倉の地を中分す、西を長谷坂下と曰ふ、稻村ヶ崎に至て而して盡く、東を大町小町と曰ふ、松葉谷に至て而して窮る、油井濱其正南に當り、遙に伊豆諸嶋を囑る、二位身を流竄の餘に起して天下を掌握するに至る、未だ嘗て昔日の艱苦を思はずんばわらざる也、祠前に銀杏の樹有り、老幹乳を垂る、公曉身を潜めし處、祠下に若宮靜姫舞を此に奏す、祠右に白旗社有り、二位の木像を安ず、豊關白が背を撫でし者は是れ

也、社の左より、十二院に至る、其一を相承院と曰ふ、藩祖得佛公
祀る焉、僧に乞ふて典拜す、小袋坂を過ぎ、建長寺に至る、五山の
第一と爲す、圓覺寺を第二と爲し、淨智寺を第四と爲す、建長圓覺
の二寺に介まりて、管領の宅趾有り、上杉氏の第せし所、圓覺寺に
巨鐘有り、北條貞時の鑄し所、皇帝萬歲、重臣千秋、風調雨順、國
泰民安、の十六字を雕る、書法頗ふる遒勁なり、明月院に北條時頼
の墓有り、所謂最明寺かる者を見ず、按ずるに上杉憲方明月院と稱
す、知る是れ方に最明寺を廢して明月院を興す也と、長壽寺に足利
高氏の木像及び墓有り、高氏は等持寺に葬る、此れ其義墓歟、左折
して扇谷に出づ、路旁の廢窟を景清牢と曰ふ、平景清の幽せられし
處、一磴道あり、假粧坂と曰ふ、二位平氏の首級を此に閱す、首皆
粉粧を加ふと、左轉して富士谷に抵る、冷泉爲相。大江季光、墓有り、

谷を出でて壽福寺を得、五山の第三たり源右府の墓有り、窟蔓草を
鐫る、極めて古雅、觀る者摺り寫して持ち去る (相房遊賞)

海水浴の社會主義

四季のうちにて我は最もよく夏を愛す、殊に波靜かなる海濱の海水
浴場を好む、何となれば茲には自然は万人平等に支配し居ればかり
學者も船頭も其腦漿に於ては格別の相違を表はし居らざればかり、
富者の肉体も、貧者の肉体も、正に之れ均しければかり、即ち万人
は自然のまゝに居ればかり、即ち吾人は生れ來りたる裡体のまゝか
ればなり、綺羅錦繡も要さきかり、貴族的衣服の却て其苦痛を覺ゆ
ればかり、平民的浴衣の價值表はれ居ればかり、麥藁帽子、へこ帯一
本、博士も學生も、富者も貧者も、差したる區別の表れ居らざればかり

り、華族の息子も漁師の悴も、其焼けたる面貌の少しも區別し能はさればなり、均しく彼等は自然の恩澤に浴し居ればあり、色白きを以て自ら尊ぶ俳優婦女子も、爰には黒銅色と變し居ればなり、故に我は海水浴の最も社會主義あるを愛す

* * * * *
よせて來る波をみるだに涼しさを

夏を忘るゝ舟の上かち

餘綾の潮風

畊雨散人

余は一介の貧書生なり、常に學問を好めども勉強することは至て出來ぬ人あり、去れど全く懶惰あるにもあらず、只實際を申せば多病

にて甚しく精神を勞すること能はざるなり、然し幸にして可厭六ヶしき課業も去六月を以て終り、七月以來嘗てより着手せし事業を取まどめ居たりしが之をも大畧整頓せしかば、いつまでも東京のあつくるしき家に燻りかへつて居るは得策にあらずと思ひ居たりし折から、幸にして學海先生の令息美狹古君の大磯へゆかんとするにあへり、我父之を聞玉ひて余に金圓を與へ、君と同行するを命ず、即ち神戸直行一番列車を以て發程することに決しぬ蓋大磯の浪もて生命の洗濯を爲さんとすればなり、

余が新橋の「ステーション」に行くや、大磯、國府津行き及び大山參りの人多きがゆゑに、下等切符賣場は、非常の混雜にて、巡查と驛夫とが、人民を見計りて、切符を買はせる程なりき、あはれ貧生の身にしあれば、下等瀛車に乗込み、瀛笛の聲共に新橋を後にして發程す時

に卅二年八月十日のあさにてありき、大森を經川崎に行きし頃には、見渡す限り皆青々たる稻田にて葉末にをく露の未だ乾かざる處へ、旭日のかゞやけるなど、得も云はれぬ心地にて、又遙の西の方を眺むれば、模糊たる烟靄の中に中ホンノリと富士山の見ゆるなど、眞に畫がきし如くなり、是より行く先々も大底同様ある景色にて、別段記す程の事もなし、但東京より十四里も來りしと思ふ頃、藤澤と平塚の間に、馬入川といふあり、一名を相摸川といふ、其廣さは隅田川の倍もあるべし、昔時小田原北條氏の家人、福嶋伊賀守此川中に入て、大鱸を殺しといふ事、北條五代記に見えたれども今はかゝる怪物の棲むべくも思はず、

余が大磯に下りし時には、我旅亭の主人ある、茶屋町の油屋三宅孝作迎ひに來居りしかば、此者に荷物をもたせ其家に行きしは、午前九時頃ありけり、其より十時頃に美狭古君と共に海水に入りしが、余は少しくツメタキ様に感じたり、午後にも亦入浴す、

○大磯驛は神奈川縣相摸國中郡（古は餘綾と書し余呂伎と唱へしが、今は由留幾と呼ぶ、何れの頃よりといふ事詳にしがたけれども、淘綾の文字を宛つることは近世の事なりといふ、）の南方海岸に在り、和名抄郷名の部に、伊蘇磯長等の名を載するは蓋し當所の舊名からんか、後區別して大小をもて分ち唱ふることもやゝ舊き事にや、源平盛衰記、平家物語東鑑等にも其名散見せり、延喜（今を去ること九百八十七年）以前より驛路たりといふ、明治維新の後頗る荒涼に屬せしが、松本蘭疇翁此地に海水浴場を開きしより大に繁華を極む、北方には東海道鐵道の線路あり、線路の直ぐ北に小丘ありて別莊多し、此小丘の北には高麗寺山、阿波多羅山あり此邊の高山と

す、東方は花水川、唐土原、長者林等にして、西方は小磯、南方は即ち海あり、此驛を小別して、山王町、神明町、北本町、南本町、茶屋町、臺町、北下町、南下町の八町とす、郡役所、戸長役場、警察署、郵便局、小學校等あり旅亭の大なる者を、青柳、鰯屋、宮代屋、石井、山本、百足屋、禱龍館、太田樓、角半の九軒とす、亦貸坐敷、藝妓屋等あり、家屋は大概こけらぶきにて、瓦家は四五軒にすぎず、住民の過半は商業を事とす、又漁人多し、農業をなす者は甚だ稀あり、陸産は何如ある物か目下田圃にあるは稻、粟、豆等なり、海産は鯛、甘鯛、比目魚、鮪魚、鰹、鯖、鰹、小鰹、鮫、鮑、鮫鰯、烏賊、蝦等ありといふ、

驛の南方は即ち海なり、東方平塚驛濱境より西方東小磯まで、長二十九町半餘あり、此海邊を稱して古餘綾浦と云ふ、古より小餘綾の

磯、巨余呂伎乃濱、或は巨由留木乃磯、餘呂伎能波末、淘綾の浦と呼來りて其名著るく、万葉集を始として、古歌にも往々詠出ありし名所にして、海水浴場のある所は即ち此處あり、海水浴ををし得べき所は、東西三町餘にわたれども、人々の常に入浴する所は、西方照ヶ崎のあたり四十間四方位にて、熱沙をあびる處は此よりも猶廣し、東を眺むれば遙に江、島あり、西には富士、箱根、伊豆の山々歴々としてみえ、濱邊は目の及ぶかぎり白沙にて、所々小高き所に、磯

馴松の面白き枝ふりに生ふる様、恰も畫けるが如し、
 海浴は營養不足に因する羸弱諸病、皮膚の薄弱、貧血病、腺病、胃病、神経系統の衰耗、心思を勞苦する人、依ト昆埴兒、及び歇私的里等に功能ありといふ、又或人は神経官能の疾患、心臟病、肺結核、癌腫、惡腋、肥滿家、痛風、慢性下痢、下腹充血、及加答兒、月經

過多、的帶下、梅毒、陰痿、遺精、腦病、衰耗患者、血行減弱、局處充血、虛弱少年、及び高齢人等には害ありといへり、余は醬者にあらねば孰れに是孰れか非なるか判し難し、但健康者には益健康を與ふるが如し、病者は醫師の指揮に従ふを可とす

十一日、今日も午前後に一度づゝ入浴せしが、入浴する毎に心地よくなり、殊に砂の上へ寐ころぶなどは尤も妙なり、浴客は當今幾百人居るにや、旅舎は皆ふさがり居ゆる、東京或は箱根邊よりわざわざ來りし者も、前以て通知しおかざる人は宿すべき家なく、あちらへまごゝ、こちらへまごゝして、終に空しく歸るもの、日々數十人に下らずといふ、かゝる勢ゆる通例の家といへども、寺院といへども苟も膝を容るに足る所は、大底浴客に占有せらるゝに至る、去れば貨坐敷なども其本業を休みて、浴客の用に供するもの大分ある由

なり、かくありてこそ眞の貸坐敷といはせし、婦人は西洋婦人の衣服ゆきしものを纏ひて、大なる麥藁笠を被ふり、男子は「シャツ」を衣て同し様ある笠を戴けども、中には腰のみまどふもあり、男女もと白き足袋を穿ちて、岩石に足を傷けざる様にす「ジェントルメン」は素より伯爵夫人も華族の令嬢も皆眞黒々に日にやけ、水に這入てはゴロリ水に這入てはゴロリと、磯邊の砂の上にコロガリ居るなり去れば浴客には中等以上上等社會の人多しといへども、誰が誰あるにか能く其人の容貌を見、其人の言語をきくにあらざれば中々分りがたし十二日 今朝四時少しすぎに起きて濱邊にゆけば、をちこちを散歩する人や、海水に入る人頗る多し、西を眺むれば富士箱根も、まだ蚊屋の内にねむり居る如き様にて只薄くみゆ、東をかむれば地平線にムクムクとした綿の如き雲が横はり、其上手に紫の雲たかびく、

やがて五時近くなれば此雲の間から大陽が赤き顔をヒョククリと出し、暫くして其光線が大海の波にうつり黄金の如くきらめく、富士も箱根もアー大陽は起きた、我々もモー寝てはいられぬといふ様な案排にて、霞の蚊屋をはづせば、藐姑峰はこねの眉も芙蓉の顔もハッキリと見ゆ、詩人をして此好景色を見せしめば、何か美妙の名吟も出るからんが、余の如き無風流人には何も浮ばず、

昨今の浴客には婦人多し、殊に妙齡の「レデース」多し、是れ海水浴の彼等に効能ある故あるべし、然らずんば何を苦んで熱砂の上にコロガリ、婦人の最も厭ふ黒色を自ら求むるの理あらんや

○鳴立庵を訪ふ 庵は茶屋町の西端ある鳴立澤に在り、此地南の方海に臨み、老松高く聳え風色甚た幽邃かり、むかし西行法師（名、憲清、藤原氏、秀郷九世孫也、嘗テ仕フ天仁上皇建久九年卒、去ル今ヲ

六百九十年）みちのく行脚の折、此澤邊に杖をとどめ、一鳥立ちて小餘綾の磯へ去るを見、

心なき身にもあはれはゑられけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

と詠みし故、此地を鳴立澤と稱すといふ、去れど舊く其名世に聞えず、文明中（四百十九年以前）に至り准后道興此處にて土人の物語をきき、詠歌ありしこと、廻國雜記にみゆ、曰鳴立澤といふ處に至りぬ、西行法師爰にて心なき身にも哀はしられけりと詠せしより、此處をかくは名づけ侍る由、里人の語りければ哀ゑる人の昔を思出て鳴立澤を泣々ぞとふ、是地名の物にみえたる初といふべし、夫より二百餘年を経、寛文（二百廿七年以前）の初小田原の人、宗雪といふ者、此に幽棲を營み、五知如來の石像を造立し、且鳴立澤と刻せし標石を建て、其古跡たるをしらしめしが、猶識る人稀なり、其

後飛鳥井亞相雅章關東下向の時舊跡を尋ね即詠一首を授與せり。元祿年間東往居士三千風といへる人、此地に隱棲し、彼亞相が眞蹟の詠歌をもて名處の証とし、後又京師に入て西行の古像を得しかば、一字の堂を建て之を安置し、騷人詞客に乞ひて、許多の詠吟を集めしより、其名諸州に聞ゆるに至れり爾後風流の士相續で庵主とちる、今の主人は十一代目にして松頂といへる老人あり、余は老人に乞ひ西行の像をみる、像は西行堂に在り昔者西行高雄山に登りし時、僧文覺其風采を慕ひ、之を彫刻せしものにて、即ち三千風再興を圖るの日、花洛に遊び一老僧より之を得しかりといふ、容貌雄偉尋常畫く處の者と大に異れり、西行堂の前面に虎心堂あり、遊女虎の像を安置す、建久四年五月廿八日（六百九十五年以前）曾我十郎死せし時、十九歳にて高麗寺山の麓なる地藏堂に剃髮せし姿なりといふ、宮經

山延臺寺に虎御石あり十郎虎を訪ひて歸る途次、工藤の家人之を狙撃す、箭此石に中り、十郎恙なきを得たりと、蓋し李廣の故事に據り構造せし者なるべし、此他境内に建つる所の碑類如左

一 鳴立澤記 元祿十三年二月（百八十八年以前）庵主三千風が建てし處にして自製の長歌一首を刻す

一 前川氏辞世之稗 但し「なきもの」と云ふは三千風の作あり

遺言にいふべきこともなかりけり

其なき物やかたみなるらん

なきものといふべきものもなき故に

なき名おほせし石板碑

一 三千風碑

鳴立し澤邊の庵をふきかへて

心あき身のねもひ出にせん

鳴立てなきものを何喚子鳥

一碑二基 一は深艸元政が西行の讃詞を鐫り一は戸田茂睡の建て
ものかり

又庵中に藏する處の文書寶器等を覽る左の如し

一西行眞蹟色紙

つれもかくかり行人の言の葉ぞ

秋よりさきのもみぢ成ける

此は此地に生ずる筆艸を以て記えしなりとぞ贗物に似たり、
海水浴客の來りし以來、筆艸は大底とり盡くされたり

一飛鳥井亞相雅章自筆短冊

やよひの頃鳴立澤に立寄侍りて

あはれさは秋からねどもえられけり

鳴立澤のむかし尋ねて

一松平左近將監乘邑自筆短冊

寶永二年の秋とをりけるとて

今も猶むかしの秋をおもふぞよ

えき立澤の夕ぐれの空

寶永二年は今を去る百八十三なり

一遊女虎の十郎に贈れる文 (印刷物)

又申上候御暇乞から狩衣又此一いろ送り參らせ候めてたく御
ふりに可申承候五月十八日

十郎殿義

虎

此原文曾我谷津村城前寺に藏すといふ同寺の客殿には曾

我兄弟及び虎の木像を安置す

一人丸木像

一西行遊歴之竹杖 一節五尺二寸

信偽は保し難し

或人曰く、古者此地に鳴立澤の名をし、然るに之を鳴立澤といふ、是れ大なる過あり、西行の所謂鳴立澤とは、鳴の立つ澤といふことにて、即ち鳴立とは形容句 (adjective clause) にて、澤といふ普通名詞を (common noun) 節制 (modify) する迄あり、決して鳴立澤といへる固有名詞 (proper noun) なるにあらず、然るに飛鳥井亞相の如きを以て猶之を固有名詞となすは、適其不學を証するに足るのみ、畊生を以て之を見れば是れ大に然らず、縦令上古に其名なきこと、縦令西行は一の立つ澤といふ意にて之を詠せしも、余は少しも之に

關せず唯西行の歌ありし以來は、此地を鳴立澤と稱するを得と斷言するあり、夫れ古人の言語を取て之を地名に附す豈獨り鳴立澤のみからんや、昔者日本武尊東夷を征し還りて碓氷嶺に上り、東南を望見し其妃橘姫を追慕し給ひ嘆じて曰く吾婦者耶と、是より山東の諸國を吾婦國といふにあらずや、(景行紀)曰く日本武尊每三顧弟橘姫之情故ニ登リ碓日嶺ニ而東南望之ヲ三歎曰ク吾婦者耶ト故ニ因テ號シ山東諸國ヲ曰ク吾婦國ト也然らば則ち東國をアヅマといふは、日本武尊以來にして全く尊の言語に基する者なり、鳴立澤も亦然り、西行此地に於て鳴立澤といへり故に、後人爰を鳴立澤と號す、何の不可か之れあらん、夫れ東國をさしてアヅマノクニといふは、我日本人の悉く許す所にあらずや、然るに獨り鳴立澤に對し異論を挾むは何ぞや、十五日高麗園に遊ぶ 園は高麗寺山の麓に在り 大磯驛 東端より

先きは高麗寺村にして、松並木あり平塚へ通ふ道なり、余は此日、夕飯後美狭古君と共に市街を散歩し居たりしが、不圖或家の前にて高麗神社の寫眞を見たりしかば、急に虎女の事を思出し、一遊を試みんと企てたり、並木道をゆくこと一町餘として鐵道あり、此邊に假粧坂ありしが鐵道布設の爲めに毀れたりといふ、少將の居りしは鎌倉の假粧坂なり、猶行くこと五六丁にして日は全く暮れぬ、左方を見渡せば十五六點の燈火隱々として樹間に在り、是れこそ高麗寺の墓場かれともひ少しくゆけば、左方に高麗園といへる標杭ありたり、因て其道をゆけば何やらん路上に太繩の如きものうごめき居たり、よく之をみれば大なる蛇なり、殺さんとする間にはやにげ去たり、園中一艸堂あり遊人のいこふるまにかすよしかれども、余がゆきし時は日暮しを以て戸をとざしたり、みるべき程のものとかか

りしかば、路を轉じて先きにみし燈火の處にゆけば果して墓あり、田舎にては八月中旬をもて、祖先の靈魂を祭るゆる、燈を墓上にかゝぐるありといふ、余はトーマスグレーが作りし有名なる墳上感慨の歌を誦し、乱塔の間、雜艸の中をわけ行けば蟲の音あはれにきこえて、陰曆七月八日の月いともものすこく老松の枝にかゝれり、飯來れば途にて士女の相集り盆踊をさすにあふ、其歌や甚た奇あり高麗寺村といへるは舊き名稱にて、續日本紀に、靈龜二年五月（千百七十二年以前）駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野、七國の高麗人千七百九十九人を以て武藏國に移し、高麗郡を置くことあれば當時高麗人此地の住居せしなるべし、
十七日 海邊に行きて砂礫を拾ふ紅、白、青、黄、黒及び斑文等數種ありて甚た美なり、浴客とて終日海中に在るにあらねば、出ては

海岸を散歩し、入ては「トランプ」の如きものを弄し、夜分は三々伍をなして市街を徘徊す、余の如きは屢、「ステーション」に行き、各種の新聞紙を覽る、且、停車場へ行けば、千種萬類の人民絶えず出入するゆゑ、之を傍觀するも亦羈中の一快事なり

十八日 高麗寺山に遊ぶ、孝作をして嚮導たらしむ、山下に高麗神社あり、元老院議官細川潤次郎君及び前神奈川縣令野村靖君書する所の扁額あり、山上にも高麗神社あり、又左右の峰に白山及び毘沙門を勸請す、右合はせて三高麗社權現と號すといふ、祭神は神皇產靈尊及び應神天皇神功皇后ありといひ、或は神功皇后高麗の神を勸請せしかりともいふ諸説紛々として何れが信なるか分ちがたし、蓋し上古此地に居住せし高麗人、其鎮護の爲めに高麗の神を祭りしなるべし、別當を鷄足山雲上院と號す、古來由緒ある寺にて、徳川氏

の時東叡山に屬し、甚た威權を弄せしなりとぞ、此地に地藏堂あり其地藏は遊女虎が持念佛なりといふ、此に藏する處の古棟札に據れば、此地藏は建久五年九月十一日（六百九十四年以前）彫刻せし者にて腹内には祐成が持念佛たりし同像を安する由あり、堂内に虎が位牌を置く。法名法虎妙惠禪尼嘉祿三年春丁亥二月十三日（六百六十年以前）と記す、虎女は祐成討れし後尼とありて諸山を巡拜し、後當山に入て艸庵を結び、幽居せしといふこと曾我物語にみえたり按するに、此堂は其庵跡からんか、今詳にしがたし、山路は八九町あり、北條早雲の頃（三百九十年以前）此山上に城寨ありきと云ふ、山巔樹木茂生するを以て眺望すること能はず、路を轉じて西方にゆれば一坂路あり、之を下りて又登れば嫩艸氈の如く大木あり、石竹姫百合のこゝかしこにさき乱るゝ様いと優あり、此處に憩ふこと數十

分、又行けば峻坂あり嶄絶峭絶体を屈して漸く下る、上ること亦如
 此、此山を阿波多羅山といひ、俗に千疊敷と稱す、眺望開豁、東は
 花水、馬入、江の島より遠く房州を望み、大山は北の方眼下に在り
 て、富士は西に聳ゆ、但南方他山あるを以て、大磯をみることも能は
 ず花時遊人雜沓醉歌狂舞すといふ、歸途徑を棒莽人を没す、峻嶮
 益甚し、旅亭にかへれば殆んど正午なり、此山嶮を冒して登る程の
 奇觀なし、

樓にのぼり海にのぞむ

近葉菅根集

梅雨の雲も晴れつゝ天づたう、日影かきこきをりにしも、心やらむ
 と高き屋に、のぼりて見れば遠山は、遠くさやけく青海は、白波た
 ちて見え渡る、此面彼面の山風の、袖に通へば浦波の、近く寄せ來
 て涼しさに、長してう日の忘れつゝ、短き秋の心地して、あかず思
 ふに今日の日の、夕べにちれば唐衣、たゞまくをししく思はるゝ

高き臺にたづさはり、のぼりて見れば足柄や、箱根の山の山のへの
 不二の高根の白雪も、消ゆといふなる水無月の、照る日のかげを世
 の中の、人はいゝにかわびぬらむ、れのが友をち夏引の、手引の糸
 の長さ日を、あかぬものとし遊びつ、夜にしければしなが鳥、あは
 の海づら吹く風に、汐けもはれて天のはら、沖つ波間に出る月の、
 さやけき影にたゞむかう、此高き屋は涼しくもあるかな、

橋 常 樹

かみしく里の山遠み、川遠白し江を廣み、海かたつきて沖のへに、
潮干しほみち朝羽ふる、波たちよらし夕はふる、風たちわたり狭
の、筑波の山にたつ雲は、日にけにさらす天の原、不二の高ねにふ
る雪の、時しわかねば梓弓、春秋かねて見かほしみ、あかすはあれ
ど其山の、いやへだたらし其雲の、いよ隠すらし我戀ふる、遠き土
佐路は見ねずもあるかも、

藤原維寧

天つ日のいつはあれども水無月の、ひるめの神のてらしまず、みか
げ畏こみ、地もさけ眞金もとけて、流るらし、まかはあれども此ぬ
しの、高さうてあはいさかどり、海邊を近みしあが鳥、安房の汐瀬
の朝なげに、千重波さよりわたとなる、相摸の灘の夕なげに、千瀉
ふきこしますらは、笛ふきすすみ手弱女は、琴ひきあらし思ふど
ちうたげをすればねばしまに近き梢も笹の葉もまだきに秋のしらべ
するかも、

義敬

時じくに雪のさえせぬ不二のねを、ろがひに見つゝ時となく、波の
花さく安房の海に、たゝに向ば朝されば、朝風さいり夕されば、夕
風通ひ場しらぬ、此の高き屋に思ふどち、涼みしをればかへさ忘れ
ぬ、

都の夕べ

夏山のくまだにもあき武藏野の、都大路を見渡せば、幾千万のこの

家の、限りも知らず遠近の、けしめもわらず夕けむり、にぎはひたちてたちつとく、入江の波の千々のふね、風のまに／＼ゆきかうも只こどもどの臺より、向ひしあればいつしかに、秋やたちぬと夏衣袖すゞしく吹く風に、螢みだれて夕闇に、あかでよるなるればしまの、しばしばかりを筑波山、このもかのもあらはれて、有明の月のいでにける、

筑波の夕照

遠近の青葉加上にめもあやに、

緑のふかささ衣の、

筑波の山の山のべに、

ゆきかう雲のいと早も、

このもかのもに風たちて、

雨のすぐれは夕日かけ

かけるひ渡る葛飾や、

まくの浦わの蛸小舟、

れのがさま／＼漕き渡る、

袖さへ見わたさやかにも、

涼しき折にたづさひて、

此高きやにのぼりけるかも、

海士小舟

見渡せば

雲も晴れつと不二のねの、

夏をもしらぬ白雪の、

しらぬ山をも浦わをも、

ひとみ語りみ心ゆく、

限りきりけり海士小舟、

こぎ隠れゆく夕波に、

ほのくみわた月かげの、

さしづる磯のそなれつ、

むらく立てる松か枝も、

たゝ手もとの庭の面に、

うつし植へたる心地して、

* * * * *

夏の熱海

八月九日函根宿旅館石内に一泊す、

十日未明宿を出づ、旅装は前日の如し、即ち脚絆草鞋かけ浴衣、麥藁

帽子にステッキ一本、心身共に爽快、三島驛路に向て行くと二三町、
左に折れ鞍掛登山の麓に出づ、幾百星霜を経たりと思へる老松古杉、
蔭かすらに纏はれて、霧鬱日光を洩さざる所一荒屋あり、何となく
物すこき心持す、右に折れ登ること數町、滿身汗ひで漸く山頂に到
る、左に白く塗りたる三角形の測量標あり、峰吹く風に浪だちたる
緑草裡には、名も知れぬ草花の點々咲き交じれるあり、山骨露はれ
雑木覆ひ茂る緑の陰には、溪水涓々流れ落つる響あり、下界は皆朝
霧に包まれて何物も認め得ず、只濃霧を破りて一聲二聲、黃鸝の幽
谷に囀づるを聞くのみ、路は平垣にして草彌々短く、幾度か路に
迷ひて漸く十國峠に出づ、十國の遠景眼中にあつまること、恰も一
幅の地圖を擴げたるが如し、函根湖附近の景色函庭を見るが如く、
長蛇の叢間に匍匐するが如きは富士の流れにして、白沙青松遠く海

中に突出するものは三保の松原なり、三島、沼津、小田原、圖府津附近の村落、點簇すること基子の如く、四面山脈起伏すること波濤の如し。此日富岳雲に包まれて見えす、天水一色、雲烟縹渺たる所、江の嶋大磯の海濱を眺め、網代、熱海、眞鶴初島等の妙景眼下に湧出す、行くこと一里餘にして漸く鷄の聲を聞く、一村落なり其名を知らず、路に村童あり熱海行の路を問ふ、溪流あり獨木を架す、渡ることに甚だ危し、更に下ること一里餘、某神社の詞前に出づ、即ち熱海の入口なり、熱氣濛々將に卒倒せんとす、旅館樋口に入る時に十時前、入浴後午飯を喫す、取扱の意に充たさる所あり、憤然宿を去て市中に漂ふ、炎熱彌々加り來りたれば海濱に到りて涼を納る、所詮夏の熱海は夏の小袖あるよと、我れ獨り泣きぬ、居ること三日、函根に歸る、

熱海八景

故成島柳北翁常に此地に遊び、畫伯野村文學氏と共に、所謂熱海八景あるものを案出す、同く

- 梅園の春曉 來嶋の杜鵑 魚見の歸帆
- 横磯の晚涼 錦浦の秋月 初島の漁火
- 温泉寺の松 和田の山雪

近傍散策の名區

○和田山は西南五町餘、和田村にある禿山あり、秋期初葺に名あり
○念佛山は和田山と連続して、海中に突出したる高山あり、其鼻は即ち魚見岬あり、一荒屋あり、常に魚族の往來を見張り、漁夫の便に供すと云ふ、故に其名あり、山脚盡きて山に没する所巨岩あり、兜岩烏帽子岩と云ふ、風景佳絶、筆力の及ぶ所をらじ。

○丸山は水口の西北梅園の入口にあり、北方五六町の所には那須澤の瀑布あり、

○伊豆山は即ち伊豆神社のある所あり、老樹鬱蒼極めて幽寂の境にあり、其隣地に甘録園あり、眺望佳絶、嘗て東京の豪商高島勘六氏巨金を投して遊園とせしなりと、上の宮より幾百段を下りて海濱に到る、即ち走湯温泉にして相模屋江島屋等の宿屋あり、浴室皆小瀧を設け清幽言はんかたなし、温泉は腦病眼病等に功能ありと云ふ、熱海より十八丁、小田原街道の左より昇る、蓋し一遊を試むべきの名區たり、

○上野山は本町の北、野中湯の側に聳つたる高山なり、絶頂の眺望極めて佳し、

○海水浴としては荒宿の濱、及び魚見岬の近傍、彼止場を作り以て海水浴場となす、記するに足らず、

○錦浦は念佛山の麓、魚見岬の直下、曾我濱の附近一帯、巨巖斷續千態万狀をちし、旭日水氣に映して恰も錦を掛くるが如しと、故に錦浦の名ありと云ふ、船を轉して西に折れる所、巖腹に一箇の空洞あり、即ち狗縁いぬぐりと稱す、暫くして一大石間を到る、之れ即ち胎内竇くわいなり、其岩角は霰石にして、其次に来るものは有名なる錦巖あり、黄色の草花緑苔と點綴し、幾多の古松岩皺の間に生え、其岩脚は一大窟をちし、窟内に散在する砂石は日光に映し爛然として人目を眩せしむ、是より西に進みて岩石彌々峻一大絶壁をちる所を觀音窟と云ふ、窟内に觀音の像を安置す、

○雀島は錦の浦より二三町、不動の瀧より西に當り、海中數町の所にあり、雀の群集するを以て其名ありと云ふ、亦一遊の價値ありて

存す、

○網代は熱海より海上二里、陸路二里廿八町餘、人口五万餘の漁村あり、舟路を取れば錦浦より曾我濱を廻り、陸路よりすばれ和田の峠を経て、一杯水の古跡を尋ね、根越の観音堂を見て爰に到る、此地海水浴場として最も學生に適す、

○初島は海路三里熱海の南に當りたる一弧島なり、東西八丁、南北四丁、民家四十有餘、人口二百八十餘、一村擧げて漁業に隨事す、此島は水仙花の各所あり亦桃樹多しと云ふ、

熱海遊記

(其稜萃)

五日、海に遵ふて南折す、根府川道と爲す、一川、海に入る、早川と

曰ふ、此れを過ぐれば即ち石橋山、亂松恠石、巖隙を點綴し、眞田義忠、及び從者文三の墓有り、此間、山谷狹隘、敵を待つのに非ず、當時兵を用ゆるに法無き知る可き也、根府川に抵る、關有り行旅を検す、檠戟森然たり、晝浦に少憩す、海山絶佳、豊公諸將を此に讌す、茶寮の址有り、吉濱に至る詭石人立、怒濤雷吼一澗、門川と曰ふ、相豆二州、是川を以て界と爲す、又温泉有り、八雲抄に、土肥温泉歌有り、其著、己に久し、土肥は郷名、松原寺に一老柏有り、傳へて土肥實平遺愛の樹と爲す、一坂、禮拜と曰ふ、二位が伊豆山社を望拜するの處、伊豆山を経て熱海に達し、湯戸今井氏に館す、堂を登瀛と曰ひ、亭を二樂と曰ひ、樓を一碧と曰ひ、危樓層欄、環するに瀛海を以てし、天水一色、雲烟縹渺、坐して壺蓬の大觀を領す、登瀛之名虚からざる也、

六日、熱海、湯戸若干、今井氏を推して第一と爲す、庭に一叢祠有り、亂石填壓し、周するに木棚を以てす、是れを泉源と爲す、泉眼無數、段々、常に鳴る、而して噴涌毎に、段鳴漸く大煙氣隨つて起り、須臾にして熱泉沸騰し、湯沫衝激、萬竅怒號、百雷震驚す、而して飛沫天に冲する者散して霧雨と爲り、比隣の屋瓦皆濕る、此くの如きと半餉許り、闐然として徐ろに歇む、說者曰く、此間地底、硫黃凝結し、陽火常に燃ゆ、而して暗竅、海水と相通ず、故に潮汐の盈縮する毎に、陽火の蒸す所と爲つて、熱湯を噴出し此異を致すと、然り而して其噴涌、晝夜三次、海潮と其候を異にす、漢土安州の潮泉、一日三溢し、蜀の六時泉、滇中の百刻泉、想ふに皆是類、而して古來其然る所以を論ずる者無し、邑中の湯戸は、每室暗渠を設けて、泉水を引き、中に澡池を設く、冷なれば則ち湯を注ぎ、熱ければ則ち水を注ぐ、只だ浴者の適とする所、泉性微鹹、絶て硫氣無く、善く痼疾を癒す、浴客雜沓、毎戸闐咽、吾輩は泉石の膏盲を途く以外、織恙の治す可き無し、一浴爽然、唯だ滿胸の塵垢、一洗して遺る無きを覺ゆる爾なり、

七日、熱海、人戸二百餘、概ね皆を温泉に資て而して生する者、市街分つて十字と爲す、南海に至て而して盡く、海濱の一泉を瓦湯と曰ふ、湯、砂底に出づ、小丘有り、菅公を祀る、祠背に一泉、平左湯と曰ふ、其傍に大呼すれば則ち湧く、注齋湯も亦然、又勘太、野中の諸湯有り、皆本泉と、其源を異にす、又、水湯と稱する者有り、相距ると跬步、淡鹹其性を異にす、其背に泉神の祠有り、曰ふ、昔時熱湯、海に湧き、鱗族糜爛す、僧萬卷、佛を禱り、之れを今の所に轉ず、泉神、人に馮て曰く、必ず吾を此に祀れと、

此れ熱海の名に因て之れを傳會する者、是日、諸泉を歴觀し、遂に亡友士寬の墓に上る、士寬、本姓は栽松氏、今井氏を冒す、學を大橋訥庵に受く、才學有り、往年余、般若院に寓し、往來唱和す、相見ざると數年、墓木已に拱す、安ぞ黯然たらざるを得ん乎、八日、網代、此を距ると四里、一帆來往す可し、乃ち二君と往て遊ぶ、扁舟、涯に沿ふて而して轉ず、一峰、海に聳ゆ、念佛山と爲す、其下、奇巖簇出す二色と曰く、其色を謂ふ也、兜と曰ひ、帽と曰ひ、棋盤と曰ふ、其似たるを謂ふ也、雀巖と曰ふ、其棲雀多きを謂ふ也、更に行く、一峰秀出す、馬脊峰と曰ふ、其横ざまに亘るを謂ふ也、其下、巖壁呀然として洞を成し、怒浪觸擊し、澎湃、音を爲す、岸に循ふて而して轉ずれば、丹崖斗絶、一窟に大士の石像を安ず、口、太廣からず、之れに入れば豁然、蝙蝠有て

群棲す、其南、一山、曾我嶺と曰ふ、村を曾我濱と曰ふ、漁家田疇、錯落相接す、風稍轉ず、舟子、席を帆にして駛走す、食頃にして網代に達し、藩の官舎を過ぎる、矢目氏歡迎す、藩人漕務を監する者なり、宴を一酒亭に設く、邑姓四五名來り見る、磐翁爲めに書畫を作る、觀る者牆の如し、二君輿して歸る、余は留りて加藤氏に宿す、村人争ひ來つて存問す、因て思ふ、往年家巖に此に侍し、村翁野老、杖屨追陪し、甚だ客居の索寞を覺へざりしを而來東西違養、是歡復た得可からず、之れが爲め、凄然、九日、網代人戸四百、皆捕魚を業とす、山、三面を掩ひ、湊泊に便なり、伊豆の海、大船を泊す可き者、下田及び此港有る耳、午下、矢目氏を辭し、徑、浦淑に遵ふ、人家時に鳳尾蕉牆を出づるを見る、曾我嶺を踰ゆ、清泉有り、曰ふ、源二位、石橋に敗れ、此を

過りしとき渴甚だしく、眉尖刀を以て地を刺せしに、泉水湧出せしかりと、此れ頼義の故事を傳會する者、下午、熱海に抵る、二君曰く、待つと久しく、携へて伊豆山社に遊ぶ社は箱根三島と稱して、三社と曰ふ、鎌倉歴世、奉祀特に崇む、天正之役、北條氏西軍を此に拒ぎ、滿山の堂宇、蕩然兵火、徳川氏、祀田三百石を付するに及び祠、山腹を占め、廊宇森鬱石欄環擁、側に一老栢有り、老幹、皎として玉蚪の如し、稱して神樹と爲す、一巨鐘、鎌倉淨智寺の物たり、北條氏康、取て此に移す、僧清拙の銘有り、末の數行類せず、磐翁曰ふ、恐らくば後人の填補と、一寺、祀を主とる、磐若院と曰ふ、院主愛泉迎へ饗す、將に辭して出でんとす、懇留す、導て山坂を下り、温泉よ之く、泉性和柔、熱海に比して、愈よ清瑩あるを覺ゆ、稱して走湯と曰ふ、遂に宿す、海浪

暴起、通宵眠る能はず、

十日 泉公、生魚を贈る、潑刺として磐に滿つ、炮炙して酒に下す、極めて美、飯後出で歩す、岨石峻聳、四出皆燈道、一亭を萬頃堂と曰ふ、僧徒游浴の爲めにして而して設く、湯泉石隙より迸出し、一水晶簾を成す、毎戸分注、懸つて瀑布と爲り、瀦して浴池と爲る、走湯の名虚ならざる也、伊豆の諸泉、走湯尤も古、而して岨谷隘偪、浴客の盛、負に熱海に讓る、磴道を攀ち、下祠に至る、巨鐘有り、銘辭題して東明寺と曰ふ、泉公曰く、般若院、古時、東明寺と曰ふ、某帝勅額、亦東明寺と曰ふと、左折して澗に沿ふ、小祠有り、役小角の像を安ず、小角修道の處なり、更に磴道を踰ゆ、大島、初島を望む、島色分明、衆皆曰く、雨候ありと、熱海に歸る、果して雨屋後の松濤、擔滴と相和し、蕭然として秋

の如し、

十一日 雨晴る、海山絶佳、館主を呼び、睹る所を指問す、曰く、初島此れを距る三里、大さ一里に盈たず、漁戸四十餘、鰻魚味美水仙長さ五六尺、刈りて田畝に糞す、又土鼠多し、其種子を播く、必ず日間、畝を終はる、然らざれば群喫して畧ぼ盡す、大嶋は此れを距る十八里、其竄流の地たるを以て、内外の往來を禁ず、全島皆山、尤も峻きを三原山と爲す、終歲噴火し、時有て爆發す、滿地皆灰、島人憂虞、猶ほ饑饉のごとく然り、野馬有り、軀矮に蹄堅く險を登ること飛ぶ如く、南洋の七嶋大嶋尤も大にして、尤も蠻風を脱し、近來往々讀書を解する者有りと、余往年網代に在り諸書を參して七嶋小誌を草し、略ぼ梗槩を叙す、

十二日 澡浴、七日を期す、將に明日を以て途に就んとす、磐翁曰

く、興禪寺は藤原藤房の舊迹たり、往て探らざる可からずと、東折して一瀆を渡る、和田川と曰ふ、川上に將軍の館趾有り、大猷公浴泉の時、館せし所山麓に循ふて興禪寺に至る、荒涼特々甚し、寺僧曰く、藤房、迹を韜まして佛に歸し、關山國師の衣鉢を傳ふ、妙心寺の第二世、授翁是れ也、是寺は授翁に創まると、僧雲居が熱海に遊ぶの記を出し示す、雲居は松島瑞巖寺の開祖、書法雄拔、喜ぶ可し、歸路、海濱に出で、街上を逍遙す、伊豆に樟樹多し、斫つて日用の器具を製す、木理陸離、異香馥郁、人の珍とする所たり、又紙を産す、雁皮と曰ふ、山楮皮を以て之れを製す、薄きと蟬翼の如く、光を發して玲瓏たり、乃ち數種を買ふて 贈遺の具に充つ、是日泉沸かず、夜に至て水涸れ、涓滴を留めず、毎月一回此異有り、一晝夜を経れば常に復すと云ふ、

沼津海水浴

沼津停車場を下り南行して港橋を渡り、行くこと十餘町にして牛臥山麓なる海水浴場に到る、浴館を三島館と呼ぶ。此地前に内浦を擁し、豆洲の大瀬崎、駿洲の三保ヶ崎、左右より突出して内海を包む、其状恰も一小湖を望むが如し、東には御料地の松柏幾百株となく生ひ茂り、第二の舞子の濱ををす、海濱は波靜かにして水亦清ければ、海水浴場として最も適當の場所ならんか、此地近來貴顯紳士の別荘多し、

我入道海水浴

牛臥山の北三町の海濱にあり、浴館は松風館なり、西北は田子の浦、千本濱を望み、遠く三保の松原を見る北は即ち富嶽朝暮の變態の狀極む可からず、其地近來開設の浴場數ヶ所ありと雖も、總て皆諸君に

紹介するの價值をなし、

興津海水浴

興津停車場より西南七八町清見寺前の海岸にあり、旅館は海水樓、觀瀾亭、身延樓、佐野屋、水口屋、千歳屋等其最も大なるものとす、海岸には家康公の御座石、疊岩を稱ふる種々の岩石横はり、其岩礁波穩かなる處を水浴場に宛つ此地南に三保の松原を望み、東を隔て、伊豆の諸山を見る西は江尻、清水港、瀧華寺、久能山、賤機山を觀るべく、北は富士、愛鷹の二峰雲表に聳ゆて朝靄暮烟風色の變化極りををし、名物として世に名高き興津鯛あり、

水戸大洗海水浴

上野より水戸に到り、三の丸杉山通河岸より、那珂川通ひの汽船に搭するか、或は亦俗に所謂立船なるものに乗し、其流を下りて港の

對岸なる祝町に上陸するか、或は車を雇ひて直ちに大洗に到るかの、其一を撰はざる可かず、天晴れ順風なりと思はゞ立船に乗るべし、僅々一時間に過ずして到着すべし、若強風なれば陸行するをよしとす、車賃大凡五十錢二時間にて達すべし、扱大洗は三町餘海中に斗出したる岬角にして、其沼岸には波濤激して嶄巖を打ち、古松鬱鬱繁茂して、風光頗る佳、海中大なる鮑を産す、之れ此地の名物なり、海水浴館としては魚來庵あり、金波樓あり、小林樓あり、杵屋あり、皆海に沿ひて建築せらる、欄に倚り海に望めは、一面渺たる蒼海原、白帆點々相往來す、眺望佳絶筆力の及ぶ所にあらず。

稻毛海水浴

總武鐵道本所停車場を發し、一時二分にして稻毛に達す、浴場は舊千葉街道の傍、檢見村大字稻毛よあり、旅館は海浴療養館と呼び

て、千葉加納屋の支店な、字大山の翠松枝を交へたる處に建つ客室數棟の設けあり亦温浴を備ふ、此地海面より高さ四五十尺、前面一條の國道を挟みて海に望む、背後には磯馴松幾百株となく生茂り、西に芙蓉の峰を仰ぎ、南に鹿野山、鋸山を望み、空氣清涼未だ浴を取らざるに、既に心身の爽かなるを覺ゆ、正に之れ東京附近の好浴場たり、

北條海水浴

京橋區越前堀なる汽船會社に到り、房洲行汽船に乗るべし、好天にして風靜ければ、四方の風景を眺めつゝ、心安すく航行し得べしと雖も、少しく風出て海荒れたる時には、小汽船のことなれば非常に動搖す、故に婦人病人等は天氣を見覺めて乗るべし、午前七時越中嶋を出帆し正午には館山に着すべし、北條は館山の町續にして、海水

清潔而も淺淺にして、危険の憂ひなければ婦人病人等には最も適當ある浴場ありと念ふ、旅館の最たるものは濱通りの本林屋なり、建築善美かりと云ふにはあらざるも、宿泊するに不便を感せず、殊に其宿料の他浴場に比して非常に低廉なるに於てをや、田圃道を経て市街に出づれば吉野庵を始めとし數軒の宿屋あり、郡立病院あり亦學士にして開業せる醫師もあり、總て物價の低廉にして便達其宜きを得れば學生の避暑場として尤も適當なる所なりとす、海岸に到れば樹木翳鬱たる夫婦嶋あり、或は横須賀浦賀通ひの汽船、烟を吐いて往來するあり、或は烟霞漂渺の間、豆洲の山脈を認むるを得べく、風光をさく、他の海水浴場に劣らず、元來房州の海岸は到る所、海水浴場に適せざにはあし、されば爰に遊ぶ者、北條を中心とあして、其近傍の浴場を巡遊する亦一興あるべし、

三崎海水浴

相州三浦郡三崎町にあり、靈岸島より汽船に乗りて行くべし、民家一千有餘段盛の地あり、俗歌島り「三浦三崎は女の夜ばい否やとかぶとたてにふる」蓋し其地一斑を知る足る、旅館として別に記すべき程のものなし、只松輪館なるものありて海水浴客の便にす、鮮魚多く宿料低廉あるを最も良しとす、眼前房洲鋸山の聳ふるあり、洲の崎の一角は劍ヶ崎と直角をなして淡々相對し、遠く軍艦汽船の往來すを見る、夜間は劍ヶ崎に聳つたる、旋廻燈臺の光を仰ぎ、或は沖遠く漁火點々たるを認む、亦一遊の價值あるべし

朝の海邊

(片瀬の濱にて) 露香

いかに眼の狂ひけるにや、今朝は四時にとおきぬ、揚枝口に啣えてはだしとかり朝露に濡りたる砂をば踏けて歩みぬ、殘月は江の島の

頭上、松の杖にかゝりて光り猶明らけく。大山雨降り足柄の山脈、殊に双子駒ヶ嶽熱海附近の山頂と、沖一面の海と空とは、紫紺のべー
ルを張りつめたる如く、たゞ富士山頂の雪のみ薄紅をぬりつけたる
がやうにと認められぬ、磯ちかき帆影、緑の海ようつりていや白く、
打寄する波の音も亦静かありき、

東の山際は黄金の色を噴きだして、月のいろは蒼白くあると均し
く、紫紺の衣ひさまくられて、山は緑りに海黒く、空は青くして、
砂しろくとなりゆきぬ、冷たかりし風は、ゆるく温かに吹き來り
て、朝彦のいろ白銀とあり、月は死灰色とかはりて、天の奥へと死
につくゆきぬ、扱もくも色彩極りあき海邊の景色かな！、

万里一葉の孤帆

海は碧に空蒼く、水天蒼茫、万里一葉の孤帆、生死を風に任して、世

界漫遊の途に就きぬ、

バイロン歌ふらく、

The saile were filled, and fair the light wind brew

As glad to wraft him from his native home;

And fast the white racks faded from his view,

And soon were last in circumbient foam.

* * * * *

(Byron Childe Harold)

ふるさと遠く離れ行く

我が船路祝さんと

風も静かに打ち吹きて

帆も亦風を朶みたり

見えし白堊の岩がねも

次第く〜に簿らぎて

逆巻く波の彼かたにぞ

沈みて見えすなりにけり、

日暮孤舟何處泊ニカガス 天涯一望斷ツ人腸ヲ
正に之れ青山万里の一孤舟!

But when the sun has sinking in the sea,
He seized his harp, which he at times could string,
And stripe, albeit with untaught melody,
When deemed he no strange ear was listening:
And how his fingers o'er it he did fling,
And tuned his farewell in the dim twilight,
While flew the vessel on her snowy wing,
And fleeting shores receded from his sight,
Thus to the elements he poured his last good Night,
(Byron)

日は早や海に沈みたり 時々ひける琴とりつ
憚る人もあちぬとて 其指つよく絲にあて
かれも習はぬ音調の 別れの曲の一ふしを
光りも薄き黄昏に 雪の翼を漲りて
かけ行く舟の眺めには 走れる岸の風景も
共に消えゆく其あとに 天地に向ひて告別の
哀れの曲を奏しけり、

暮雲千里ノ色 無シ處トシテ不レ傷レ心ヲ

況んや漂渺たる大海の一孤舟をや、雲か、波か、空か、海か、天地
は只蒼色の、肉眼に映するの外、微塵の影もなし、暫時くして前面、
渺たる蒼海原の極端、雲波相接するの所、稍々明るくならんとす
るや、一輪の明月、波に洗はれて漂々、見えつ隠れつ、表はれ出で

んとす、月と舟の間、一條の金線はひかれぬ、月走れるか、舟走れるか、雲ちく、山ちく、鳴ければ、行けどくとも、舟は猶動かざるが如し、既にして月天心に沖し、銀波舟に碎けて、水晶飛ぶが如く、微風徐ろに吹きて肌稍々寒し、毛布を纏ひて横臥すれば、月は蒼空をかけ、舟は碧海に走り、我は空想に走る、かくて曉方ちかくるまゝに、霧いと深く立ちこめて、咫尺の間も見わかぬべく、船は烟霧に包まれ行くさきとても分かぬべし、生死を天に任かして漂ふこと三四時、霧漸く霧はれて風南洋より吹き來るとき、極目千里、湮波漂渺の間、薄黒き陸の一端を認めぬ、之れ果して大陸の一端なるか、果た絶海の孤嶋あるか、舟は順風に眞帆あけて飛鳥の如くに之を目當に梶とりぬ、

泉州堺海水浴

去年は泉州堺の濱で友人依田君と海水浴で一夏送つたが、ちか／＼愉快であつて當時の有様が今でも目について居る、七月下旬のことであつた、大坂に所用があつたから同地に行つた所が、土地なれぬせいかしらぬが東京よりも倍暑いと思つた、夜などは只々濛としてとても眠られぬ、此有様で二三日も滞在したならば、逆上して死んでしまふと思つたから、翌日午前十一時三十分難波發の列車に乗つて瀛車の窓から、天下茶屋、佳吉神社、大和川を見て、十二時五分前に堺に着いた、所が始めてのであるから西も東も分らない、いづれ高いとは思つたが停車場の車夫を呼んで中學校迄行けと言つた、乗り行く途中で市街の構造を見ると、北國の濱邊の有様とよく似て東京附近濱邊の市街とは全く其趣を異にして居る、やがて町はづれの所に出ると向ふから年期あけの兵士のやうな服を着た Rustie gentlemen

が来た、これが五六年も遇はぬ友人依田君であつた、「ヤア」の一聲が千万無量の厚意を含むだあいつであつた、二人とも車に乗つて濱の茅海樓の玄關にひきつけた、まうかうなると車代の高い安いの論がない實以て取られ放題であつた、いくら取られたか今では考へ出せぬ、それからすぐと三階の見晴のよい座敷にと案内された、之では奮發しさい譯にはいかないから江戸ぎもだして(上方で言ふ言葉あり)茶代に一圓下女に五十錢や、らうと思つたが二十錢げそつて三十錢やつた、晝御膳に色々御馳走が出たらうちで最もうまかつたのは、大きな蛤の吸ひ物であつたが、此は堺特有の名物で東京ではとても其まねができぬ、夫れから湯にはいつて夕飯をして勘定はと聞いたら、五圓六十錢と言つた、胞の中では「アーしまつた」と思つたが顔色に出さかゝで、勘定書よ十圓札を載せて突きつけた、下女が下に行つたあ

とで互に顔見合せて溜息ついた、高いじやないかと悔んだが最早葬式の出たあとであるから仕方がない、うれから依田君の宅に行つて翌日海濱のある宿屋に下宿を取つた、あとで聞けば此近傍の料理屋兼宿屋と云ふものは、大坂の銀行員や紳商どもが、藝妓を連れて寝泊りしたり、或は花合戦する所だけか、去りとはぬあつたことをしでかしたこと！茅海樓についで川芳樓一力樓等あつて最も宏大壯麗なものであるが、一等下つて三樓と云ふのがあつたが、此れは平民付料理店と見えて庭には數十の下足はいつでも列んで居る、夜になれば此等の宿屋は無数の電燈を點するものなれば至て奇麗である、濱を大濱と云ひ海をちぬの海と云ふ、小説家ちぬの浦浪六君が故郷なりとか、海は遠浅で水澄み、濱は廣くして十有餘軒の掛茶屋が散在してをる、だが他の海水浴場とは大に其趣を異にして居る、ほかで

かい彼等は海水浴の爲に設けられてあるのでなく、所謂濱に遊びに来る者の爲に設けてあるのだから、人さへ見れば「御掛けをさへ」御休みをさへ」と無暗に勧めて居る、一寸散歩して見知らぬ顔であればすぐと飛び来て引張るべくこれ誠に厭味の所なので海水浴客と云ふ者があまりない之か此絶景ある堺の濱を殺して居る、其掛茶屋の背後の方に二三軒の別荘があるが、飼ひある鶯をば聲もほがらに巧に啼かせて居る、海から上つて沙の上に寐ころんで、景色を眺めて居ると一聲二聲耳を敵つて一層の興味を添へてくれる、それから海へはいつて立ちあがら足先の先で砂をほちくつて蛤をさがす、時によると非常に大いなのが十も十五も採れる、此れは他の海水浴で出来かい遊びで余程楽しみをさすることである、其の次は舟遊びある、川口には和船貸ボートがあつて、海のさきたる日などは五六町沖の燈臺をま

わつて、磯近く濱寺まで漕いで行く、濱寺は堺よりも遙かに幽静閑雅な所であつて、幾百万の松が奇麗な砂の上に生へて居る、其のあかに海濱院と云ふ料理屋兼帯の浴館がある、此地は近來開けた所で今ではあか／＼繁昌する、だが家族的海水浴をさすとか、或は亦學生相謀つて宿泊しやうと思ふ様な民家がある、南端には高石の神社があつて、東南廿余町の鳳村には大鳥の社がある、高師の濱の舊蹟であると云ふ、

若し海濱の景色に厭いたければ市中に散歩するがよい、市中には大坂の千日前、西京の京極、東京の浅草と云ふ様を所があつて余程にさやかちことである、其所には芝居も、寄席も、見世物も、料理屋も、夜店も一切ガワサイ何んでもある、そんな雑沓する所がいやだと云ふければ、彼の名高い妙國寺の蘇鐵を見に行くもよい、戎嶋經

王寺の芭蕉の句碑を見に行くもよい、亦彼の有名なる善長寺の松を見に行くもよい、朝未明に起きて濱に行くも魚の市が立つ、此は是非一度見る丈の価値がある、石油の空箱の上に振手(評價人)が乗つて無暗に躰をゆさぶつて、一生懸命に何んだか少しも譯の分らぬことを言つて居ると、其傍には日本字だか或は亦速記の字だか、語學者が見てもとても讀めない様かものを帳面につけて居る、之か書記兼會計であつて市の終つたあとで精密に計算かつくとは實以て驚き入る手腕である、買手は男も居れば女も居る、大坂から來る者もあれば料理屋の板前も居る、賣手は和歌山、淡路島沿岸の漁師で大小無敷の鯛を船底にいかしなから此所に持つて來る實に見事なものである、

家族的海水浴

我輩は最も性急なる者であつて何事でも一度思ひ立ては少しも我慢が出来内たちである、うこで何時でも前後の辨もかく漂然として獨りて飛び出すことも度々ある、今年も俄かに思ひ立て片瀬に來た、獨りてあるから泊屋に宿つて居るが、日々三度の食事の者が皆魚である、さしみ、鹽焼、てりやき、にざかな、やまけに吸物の材良も皆魚である、野菜物と言つたら胡瓜の漬物一切に、鹽辛らい澤庵漬が二切だ、夏の食物は肉類よりも蔬菜の方が胃の消化力を助るのに、毎日二度つゝの魚攻めであるから胃が焼けて氣持か悪るゝ、それに宿屋生涯は第一費用が許さぬ、所で或る百姓家の一間を月六圓で借りて家族を呼びよせた、持つて來たものは敷ぶとんに毛布蚊帳一張と茶碗にドンブリだ、其他運般よ不便なるものは幾分の損料を拂ひて家主に借ることとした、魚は魚師から買ふ、薪の半分は遊び旁

々濱から拾つて来る、四角な板を敷いてお膳の代用とする、顔は海で洗ふ、洗濯は片瀬川でする、野菜は百姓から直接に買ふ、足りぬ所は罐詰で間にあはず、

此等の野蠻的生活は亦非常に愉快である、我輩の如き貧的なる者にあらざるも、夏期一二ヶ月は此不自由なる生活をなし、紅塵万丈の都會を離れて、目新らしく耳新らしき片田舎の海邊に來り、身の保養をなし避暑の方を講ずる、人生僅か五十路の亦一快樂でない、未だ一家族を組織せざる學生なりとも、互に其親友と語り合ひ、一家族を組織して來るがよい、一週一回持廻りの會計を置き、一日交代の賄とり、各自思ひ々の食料を案出す、之れ非常なる經濟的避暑法あるのみならず、却て一家族の生活よりも優りて面白きことならん、のみならず後日社會に出で、立身出世したるときの一好話と

も亦、愉快此上にできるものないでないか、

海水浴の効用

海水浴は一名を神經強壯浴と言つても差支はない、彼の温泉浴の如きの如き、後で身体の倦怠を來すやうなことはない、醫者に聞けば之れは寒冷、鹽分、波濤等の合働刺激に由りて、皮膚の末梢神經の作用を興奮し、皮上の血管を収縮せしめて、血液を内部に送り、筋肉収縮し且つ皮膚の垢を洗ひ去る計りでなく、海水の温度と体温とは甚だしき差があるから海水の温度が忽ち体温を奮ひ、且つ波濤の變轉窮りない所から、血液の運行が盛になり、新陳代謝機を活潑からしむるのであると云つた、獨り海水に浴するばかりでもよい、海に入るのを厭がる小供も、鹽分多く濃厚にして、厭力強き海の空氣を呼吸するが故に、其氣厭力を以て全身躰を重定するやう躰の爲

に至極よいと言ふことだ、神經過敏、胃弱、肺病初期、感冒習癖、リコマチス等の人は勿論常に壯健の者と雖も日々生汁上に其身を勞し、劇務にある官吏會社員、憂鬱無聊の婦人等には最も適當なる保養である。

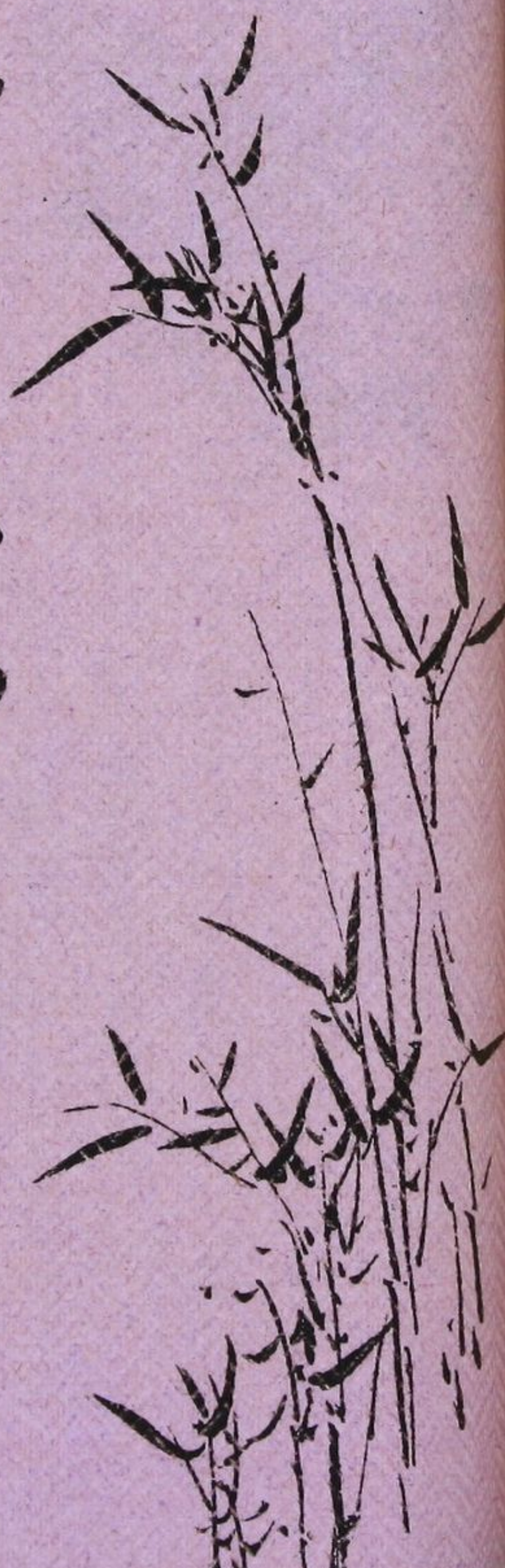
海水浴の通則

- (1) 海水浴を行ふに最も適當なる時期は、七月中旬より九月下旬まで、之れ空氣の温度と海水の温度に著るしき差かきに據る、
- (2) 入浴の時間は通例三四十分間にして、一日三回、満潮の時を最も良しとす、
- (3) 海中に入る時には、手拭を以て頭部を包み、両手の指先を水に濡らし、両耳を二三回しめすべし
- (4) 浪高ければ浪打ちかへす所にて、正面亦是側面に其波を受けて

闘ふ可し

- (5) 冷氣を覺へば砂の上にて温まるべし、浴を了れば乾きたる手拭にて身軀を摩擦すべし、直に湯入りて折角の鹽分を洗ひ落さすともよし、
- (6) 海浴中は食慾非常に増進し來るが故、無暗に其度を進む可からず通常三ぱいのものは四はいとせよ、
- (7) 夜は可成早く眠り、朝は成べく早く起ることにせよ、健康體のものは朝飯前と雖も入湯差支かすと云ふ
- (8) 三才以下の小供は不可あり、六才以上より入浴をなさしむべし若し厭へば強て入らしむ可からず
- (9) 婦人月經とにても差支なしと雖も眩暈頭痛する時は廢すべし
- (10) 婦人は腰部を海水に浸して、浴後は焼けたる砂の上に座し、其

綠陰泉響



腰部に砂をふりかく可し、之れ子宮病に最も効ありと云ふ

日暮片帆落_チ

渡頭生_{ニズ}暝煙_一

與_{レト}鷗分_{レテ}渚_ヲ泊_シ

邀_レ月共_ニ船眠_ル

燈影漁舟_ノ外

湍聲客枕_ノ邊

離懷正_ニ無_レ奈_{ケル}

况_ヤ復_ニ聽_ニ啼_ニ鶻_一

離々_{タル}野樹綠生_{レシ}煙_ヲ

灼々_{タル}山花爛_{トシ}欲_レ然_{シト}

酌_レ酒_ヲ人歸春渡寂_{タリ}

柳根間_ニ繫_ッ夕陽_ノ船

緑陰泉響

初夏野望

露 香 作

いつしか春もくれ竹の、 葉風涼しき夏たちて、
梅も櫻も一づらの、 青葉の林となりにつけり、

深き岸邊の岩がねに、 青柳糸をみだしつゝ、
葉末の露を吹き拂ふ、 眺め涼しきあさぼらけ、

花のしとねに引換へて、 今は緑の苔むしろ、
山にかゝれる白雲は、 散りにし花のかたみかや、

八重だつ雲の絶間より、
鳴くや杜鵑の一聲は、
深き恵みに浴せよと、
告げ來る神の聲ぞかし、

驟雨

連旬雨なく炎熱蒸すが如く、流汗淋漓、往來人絶へ沙石鑱けて流るが如し、犬は軒下三尺の陰を盗み、息氣深く、舌たれ、喘ぎつ、何時しかと眠り果てぬ、
うたゝ、晝寐の夢さむれば、肉とけ、骨ゆるみ、五尺にあまる此身亦打捨つるせきもあし、暫時ありて涼味を含める微風、何所ともかく吹き起るかの如く感じぬ、

椽側に立ち出で、空打眺むるに、忽ち、天の一隅に黒雲群り起り、霹靂一聲、閃く電光、虚空を辟き、疾風一陣砂を卷て來る、

斯くして三千世界の塵埃と俗氣とは、悉く洗ひ去られぬ、斯くして庭の草木も亦蘇りぬ、

緑樹青苔地に充つる庭園の一隅、穢ぬきとめぬ玉と亂れつ、落つる木葉の露點々、時に微風一陣葉末の露を拂つて吹き來る、正よ之れ消夏千万金の値なるかや、

雨歇_テ空山噪_ニ暮蟬_一

雨歇_テ南山積翠來_ル

喜ばしき夏の雨

此頃の照り添ひたる六月の空、人も草木もいたみたるに、露ばかりだに降れかすと、侍ちに侍ちたる甲斐もなく、炎熱彌々加はりて、井水皆涸れ、水田龜裂して、寒暖計は百度以上にどのぼりぬ、

忽ち見る、天涯の一隅、陰雲生し、電光閃々、虚空を射る三千里、
万雷轟々、今や天地破り裂けんばかりなるに、烈風一陣吹き起り、
沛然たる大雨、盆をかたむけて降り来る、

How beautiful is the rain !

After the dust and heat,

In the broad and fiery street,

* * * * *

And swift and wide,

With a muddy tide,

Like a river down the gutter roars

The rain, the welcome rain !

(Longfellow)

暫くして雷鳴り止み、雨収りて、空は蒼緑りに拭ひ洗はれぬ、熱し
たる街頭の砂礫も洗はれて、濁水溝に漲り、池の魚も多く逃れ出で
ぬ、何所ともかく吹き送れる微風、蓮の浮葉の玉を散らし、庭の木
立に蟬ひぐらしの聲喧びすし

さんざ時雨か

さんざ時雨か、

音もせずきて、

萱野の雨か、

ぬれかゝる、

之れ何人も能く知れる有名なる俗歌あり、抑も我國の俗歌あるもの
は、概ね野卑醜猥なる文字多くして、歌人文士が解釋を試みるだ

も屑しとせざる所あらんが、我輩は此俗歌が深遠優美の極所を刺したる一種のラブソングとして、再び得難き我文學の好文字として、讀者諸君に紹介の勞を取るものなり、今試みに其意を解釋せんか
「さんざ時雨か」、さんざはサツサの訛りにして雨の小なる聲を言ひ、

「萱野の雨か」、茅生ひ茂れる野原に時雨の降るのか、亦一説に、茅屋に時雨の降りかゝるのか

「音もせず来て」、茅野と言ふも、茅屋と言ふも共に、音もせず、こつそりと降り來るを形容したるもの

「濡れかゝる」、此一句ころ、此歌の精神にして、ラブの存する所、好味の埋伏する所たり

「濡れかゝる」とは「濡れて色よし雨の藤をどと均しく、共に戀情を含

有し、兩意に掛け合せしものにして、亦た歌に多くある例あり、俗間傳ふる所によれば、之れ伊達政宗が城攻めのとき、一の暗號として唱ひしものかと言ひ、或は亦彼が、勤參の都入せしとき、其街道筋をば唄はしめたる、追分節◎◎ありとも言ふ、知らず其何れか是なるかを

天時占候

(世事百談)

古へに云、朝霞不出門レ、暮霞走千里ニと言へり、朝霞は朝やけ、暮霞は夕やけあり、朝やけは雨降り、夕やけは晴るニ兆ありといふ
諺なり、* * * * *

已の時に晴るニ雨には傘をはなし難く、又未の時に晴るニ雨には簑笠を脱く、夜中に晴るニ雨は日あらすして亦雨降るものあり、明星

地を照らすも、明日雨ふる兆あり、朝に鳶かけば雨ふる、夕に鳴けば晴を主る、又朝夕ならで鳴くは風吹く兆なり、蟬蟀の群り飛ぶは風の吹く兆なり、また春く如くむらがり動くは、雨の兆なり、山を望むに近く見るは雨ふる、晴天には遠く見ゆるものなり

* * * * *

雨歇まんとする時、茅屋の上に烟透り昇るに、果して天氣あり、夏の日の早天に、鳥ちとにある蜘蛛の草に、白く霧なぞかゝりたる時は、必ず天晴るとなり、井の水の濁りたる時は、亦雨ふる、高さ木に風あて、木の葉うらを見する時は、翌日雨あり、大圃中をほり穿ちて、伏する時は、必ず霖雨あり、狐鳴くときは三日の中に雨ふるあり、朝霧の空より晴るときは天氣よし、地より晴れて空に収まるは雨

あり、

* * * * *

さみだれ

(鴨 長 明)

五月雨の晴間を空も、いつしか名残なくなりて、雲の峰へ立ち重
かり、* * * * *
梢の蟬の聲かしかましと、枕上うるさけれど、實にや里のかにへの
こぼくと鳴る、唐臼の音とはや、變りたり、桓根に咲ける夏草の
花よりも、猶さくやかある池といへど、濁にそまぬ蓮の花つけたる
ばかり、心も清まることあらじかし、

梅 雨

此雨水を衣に點しぬるあらんに、他の水と異にして、其けがれ脱すべからず、只梅の葉せんじたる湯もて洗ふたれば、たやすくぬけさりぬと、(風俗醉茶夜談時候門上寫本)

梅雨或は霪雨につくれり、此雨のうるはせる所は、皆霪を生しけるゆへとかや、(全上)

五月芒種のうち、みずのへの日にあいぬるを入梅の候とあし、六月小暑のうち、亦みずのへの日にあいぬるを、出梅の候とあせるなり又三月の雨を迎梅雨とあし、五月の雨を送梅雨ともなせりとぞ、今亦やまとうたの言の葉に、さみだれと詠せるものこそ、からの霪雨にて、其雨の降れる頃しも、栗の花落ぬる時なればとて、扱こそ風俗のならひに、墜栗雨つかりさめというめる、いとやさしく聞えたれども、ぬぼくのともがらのものいひ侍るに、舌こそみじかくりけん、つゐ

りといはずして、つゆといへるはささくるし、

○五月雨と云ふ事 さみだれは雨の乱れ降る心にて、サメミダレ雨乱の略語あるべし、春の雨をはるさめといひ、又古事記に、氷雨ヒサメ、万葉に、小雨コサメなどいへるにて知るべし(幽遠隨筆下卷)

○青葉の緑深くありゆく、木の下麥のはしりほの珍らかなりしも、いつしか色づき渡り、かりも果てぬなか雨打つとき、いとゞ心のおぼほしき老の寐ざめも、おのか時えて啼く鳥の聲に慰めつゝ、あかし暮らすに、からうじて今日は、雲間みえ、朝日うつればたち出でゝ、(六帖詠草)

五月雨は峰の松風谷の水

(連歌茶談)

* * * * *

○五月雨の頃は、明暮月日の影をも見ず、道行く人の通ひもなく、水たんくとして、野山をも海に見なし候、(茶談)

梅雨久

○五月雨の雨の長さは物みちに、しめりてさはりなす事に、たよりあしかり短かくて、ありあむものを昔より、長くぞふれる漢人の、ゆひたれ髪もながしとも、長くはあれどさみだれに、(瑠々室集)

放螢記

(雲遊文蔚)

發^レケハ囊^ヲ即^チ蜚^々點^々聚^散隨^レ風^ニ、忽^チ滿^ニ樹^梢ニ翻^テ着^ク遍^身ニ、舉^家或^ハ訝^ル金^人現^ルカト好^相與^ニ、漸^々乘^ニ微^風ニ颺^リ屏^垣ニ、昇^降ニ千^河水^奔流^ニ、一^犀楊^々トシテ復^タ似^レタリ爭^フニ先^テ、

* * * * *

螢

(秦 清 雄)

かぎりひの晝は玉藻にゐがくれて、

ありとも見えす澄む水の、

底はあさけどみあそこに、

影もみぬを黒染の、

夕べにちれば打靡く、

玉藻もさやにゆく河の、

水のへ照らし久方の、

天つ星ともいさりびの、

燃ゆとも見えてはしきやし、

あかぬ螢の水のむた、

ながらへ行くを夕づらの、

かゆきかくゆきぬば玉の、

よるもすがらに見らくしよしも、

夏虫の螢の光りあかりせば

夜の川べは行きぬかてまし

撲^レ螢^ヲ羅扇重^シ

(和漢聯句四十本)
十部兼政

車窓見螢

日既に没す、車海下り列車、大船附近、頭を車窓に出す、山の陰、雑木繁茂し、闇更に闇を加ふ、時に輕風に乗して飛び來る螢、ニッニッ、

或は高く、或は低く、或は遠く、或は近く、飄々冉々、細かに闇を縫ふて、生ひ茂る水邊、雜草の裡に隠る、俄かに大風の吹き來る音す、即ち神戸發急行列車あり、瞬間の幽寂忽ち没滌し去らる、

水邊見螢

長 廣

あやしぶまでにねひしげる、水草にすだき、たぎりゆく水になづあひ、吹く風に乱れ飛びちり、こちごちにかけらひ行きて、ま輝く螢の影は涼しくもあるか、

* * * * *

千早振宇治の河瀬をこまつるぎ、わか往き見れば上つ瀬に、白波たぎり下つ瀬に、さざれあみよる白浪の、玉と散りつゝさざれ浪、ま

かく群れ飛びさやくに。はてる螢をます鏡、見れどもあかず言に
いで、たどへもかねつかぐよぶはたる、

螢

杜 甫

幸ニ因_ニ腐_ニ艸_ニ出_ツ 敢_テ近_テ太_陽飛_ニ 未_レ足_レ臨_ニ書_卷ニ
時_ニ能_ク點_ス客_衣ニ 隨_テ風_ニ隔_テ幔_ヲ小 帶_テ雨_ヲ傍_レ林_ニ微_{ナリ}
十月清霜重_シ 飄零何處_ニカ歸_ル

韋 應 物

月暗_シ竹亭幽_{ナリ} 螢光拂_レ席_ヲ流_ル 還思_フ故園_ノ夜
更_ニ度_ル一年_ノ秋 自_ニ慚_ニ觀_ニ書_ノ典_ニ 何_ッ慚_ニ秉_ニ燭_ノ遊_ニ
府中徒_ニ冉冉 明發好_シ歸_ニ休_{セシ}

李 嘉 祐

映_シ水_ニ光難_ク定_リ 凌_レ虛_ナ體_自輕_シ 夜風吹_レ不_レ滅_マ

秋露洗_テ還_タ明_{ナリ} 向_レ燭_ニ仍_チ藏_レ焰_ヲ 投_レ書_ニ更_ニ有_リ情

猶_チ捋_ニ流_亂ノ影_ヲ 來_レ此_傍簷_楹ニ

僧 德 祥

念_フ爾_カ一_身微_ニ 秋來處_處飛_フ 放_レ光_ヲ唯_タ獨_照シ
引_レ類_ヲ欲_ニ相_輝ニト 白髮嫌_レ催_レ節_ヲ 青燈妬_レ入_レ帷_ニ
老僧無_ニ世_相 容_レ得_レ繞_ルヲ禪_衣ニ

徐 寅

月墜_テ西樓_ノ夜影_空シ 透_レ簾_ニ穿_テ幕_ヲ達_ニ房_櫺ニ
流光堪_レ在_ニ珠_璣ノ列_ニ 爲_レ火_ヲ不_レ生_ニ榆_柳ノ中_ニ
一_一點_通黃_卷ノ字 輕_輕化_出ス綠_蕪ノ叢
欲_レ知_ニ應_候何_ノ時_節ニ 六月初_ヲ迎_テ大_暑ノ風

謝 宗 可

微燐閃閃拂晴波
銀粟無煙棲碧蘚
秋空雨歇寒光墮
欲喚紗囊車武子

幾度黃昏誤舞蛾
玉蟲留影綴青莎
晚徑風閒冷燼多
爲渠還賦短警歌

朱之蕃

中宵露坐數飛螢

隱暎檣陰復廣庭

風動花林生野燒

池搖雲影度疎星

天街扇撲流光亂

書屋囊開夜色青

衆化未容隨草腐

非關慧質弄惺惺

虞世南

的歷流光小

飄颻羽翅輕

恐畏無情人識

獨自暗中明

李百藥

窗裏憐燈暗

階前畏月明

不辭逢露溼

祇爲重宵行

韋應物

時節變衰草

物色近新秋

度月影纔斂

繞竹光復流

郭震

秋風凜凜月依依

飛過高梧影裏時

處暗若教同衆類

世間爭得有知人

羅鄴

水殿清風玉戶開

飛光千點去還來

無風無月長門夜

偏到階前照綠苔

徘徊無燭冷無煙

秋徑莎庭來夜天

休下ヨ向テ書窗ニ來テ照ス字ヲ

近來紅蠟滿歌筵

吳 傲

悶シ來テ掩レ卷ヲ已ニ三更

風露涓涓月滿庭

閒ニ撲テ流ニ螢ヲ衝ケ暗樹ヲ

危梢點點墮寒星

* * * * *

ものゝふの八十字治川にみちさらふ

浪間のほたる影のさやけき

萍に火を打つ浪の螢かち

名 所

清瀧川(山城)

れとは川(同)

住の江(攝津)

かには江(同)

ゐな野(同)

すまの浦(同)

淺かの沼(陸奥)

伊勢の海

夕されは螢よりけにもゆれども

光みねはや人めつれかは

友 則

さ夜更けて我まつ人や今來ると

おどろくまでもてらす螢か

古 歌

おともせで思ひにもゆる螢こそ

啼く蟲よりも哀れかりけれ

貫 之

行螢雲のうへまでいぬへくは

秋風ふくとありにつけこせ

業 平

夜もすからもゆを螢をけさみれば

草の葉ことに露う置ける

建 守

夏の夜はともす螢のむねの火を

緒しも絶たる玉かとうみな 貫之

澤水に空ある星のうつるかど

みゆるは夜はの螢かりけり 良經

物思へは澤の螢もわか身より

わくかれ出る玉かどをみる 和泉式部

なく聲も聞ぬものゝかなしきは

しめむにもゆる螢かりけり 高遠

あはれにもみさをにもゆる螢哉

聲たてつへき此世と思ふに 俊頼

郭公

夕べ見てあしたに見れば夕べより、しどにかり行く夏山の、しげき

木の間に時鳥、來鳴き友よす青山に、

待郭公

ほととぎす來なく五月は初聲を、さく違へじと耳たて、空まもり
つゝ、月にまら、雨に忍ひて宵寐せば、よいにや啼かん朝居せば、朝
やなかと端居して、天嶺にむかい外に出て、天雲あふきいたづら
に、眺めのみして空心なる

(瑤々室集)

始聞郭公

う月たち夏の始めは郭公、啼く音ともしみまらつけて、聞く人ごと
に語りあひ、言ひつくあべに一さどに、一聲あけば七里も、聞ぬ渡
らむ一聲を、十里にきけばはた里も、告げて語らむしかあれば、一日
のうち八十聲に、なりて聞えむ百里に、つたへてきかん今朝の一聲、

月に時鳥

すゞみとる、袖の港の夜半の月、折知り顔の郭公、今一聲を松の風、
吹き行くまゝの友人も、歸るさ惜しき名残かゝ。
(謠曲)

聞ク子規_{一ナ}

百鳥有_ニ啼_ク時_一

子規聲不_レ歇_マ

春寒_ノ四鄰靜_{ナリ}

獨_リ叫_フ三更_ノ月

王 建

子規啼_テ不_レ歇_マ

到_{レテ}曉_ニ口應_{シレ}穿_ツ

況_ヤ是_レ不_レ眠_ラ夜

聲_聲在_{ニル}耳邊_ニ

杜 甫

峽裏_ノ雲安縣

江樓翼瓦齊_シ

兩邊山木合_シ

終日子規啼_ク

眇眇春風見_ヘ
客愁那_ッ聽_シ此_ヲ

蕭蕭夜色凄_{タリ}
故_ニ作_{ニス}傍_{レテ}人_ニ低_{コテ}

羊 士 諤

雨餘芳草淨_シ沙塵_一
惟有_ニ啼鵑似_{シタル}留_{レニ}客_ナ

水綠灘平_{ナリ}一帶_ノ春
槿花深_キ處更_ニ無_シ人

竇 常

楚塞餘春聽_ク漸_ク稀_{ナリ}

斷猿今夕讓_{レル}露_ス衣_ヲ

雲蘿老樹_一空山裏

髣髴千聲_ニ一度飛

熊 孺 登

江流如箭_ノ月如弓_ノ

行_ニ盡_ス三湘_ヲ數夜中

無_レ那_{モスル}子規知_{レテ}向_{レテ}蜀_ニ

一聲聲_ニ似_{レタリ}怨_{ニム}春風_ニ

元 稹

石磯ノ江水夜潺湲
燈暗ソ酒醒テ顛倒ニスレハ枕一ヲ

半夜江風引ク杜鵑一ヲ
五更斜月入ル空船一ニ

雍 陶

蜀客春城聞ク蜀鳥一ヲ
却テ知ルル夜夜愁相似タル

思歸聲ハ引ク未歸ノ心
爾正ニ啼ク時我正ニ吟ス

僧 無 悶

折柳亭邊手重テ携フ
杜鵑不レ解ニ離人ノ意ヲ

江煙澹澹草萋萋
更ニ向ニ落花枝上ニ啼ク

朱 子

幽林欲レ雨ント氣含レス凄ヲ
獨向ニ高齋ニ展レ衾ヲ臥セハ

春晚端居園徑迷フ
南山夜夜子規啼ク

楊 萬 里

仰テ見ル青天尺許ノ青
只驚ク白晝山竹裂ル

無レ波江水不レ勝ヘ平ナルニ
杜宇初ニ聞ク第一聲

葉 顛

老紅新緑駐ニ煙波一ヲ
又是一年春事了ル

無下シ奈ニ青皇促フスヲ駕ヲ何上トモ
杜鵑聲裏夕陽多シ

僧 善 住

織織タレ碧草與階齊シ
花院晝長ソ聽ク正ニ好ミ

濃緑陰中杜宇啼ク
帶レ聲ヲ飛ヒ過ク粉牆ノ西

山 路

橘 技 直

水無月の照日をいたみ山松に、聞する風の忍ばれて、わけ入る道は
草しげみ、木のくれ茂み洩さねば、空にのみしていたづらに、袖ふ

きかへす風もなし、

夏かげ深き遠山の

夏かげ深き遠山の、
下に流るゝ大川の、
綱ひさわたりくれゆけば、
影をならぶる遠近の、
只こゝもとに見るぞ樂しき、
まゆもほのかに匂ひたち、
川の上つ瀬下つ瀬に、
星よりげなる篝火の、
千舟百舟ゆきかうを、

水邊納涼

石ふみて渡らばいかに大井川

(遊京漫録)

音さくのみも夏はあはえず
螢とぶ岸のれぐさの夕霧を

袖にかけて夏はあらはむ

蓮の花

水陸艸木の花愛すべきもの甚だ多し、晋の陶淵明獨り菊を愛す、李唐より以來世人甚だ牡丹を愛す、予獨り蓮の泥より出て深らず、清漣に洗はれて妖ならず、中通り、外直く、蔓せず、技せず、香遠くして益々清く、亭々として淨く植え、達觀すべくして藝翫すべからざるを愛す、(周茂叔)

はちすは去年みしよりもましくて、今咲きうめしほぞなれど、露の

光りさやかに、吹き来る朝風の香ひに似るものもかし、
かくしつゝとめ來ても見ん朝ごとに

花さき云はる池のはちすば

(中嶋廣足)

蓮の美

雞鳴一聲天正に明けかんとする頃、東台鐘の聲は曉霧を破りて、花
都八百八町に響きあゑるのとき、忍の池財辨天のほとり一面紅白、
清漣に濯れて高く、旭日將に昇らんとするや、満池の荷花蕾を破り
何處ともなく吹く送る朝風に、香をこめし露の玉くだけて、青蛙驚
き飛びこむのさま、正に之れ俗塵を洗ひ去る、自然のたまものぞか
し。

函嶺紀行

畊 雨山人

八月廿日 午前八時四十三分大磯より瀧車に乗り、九時國府津に着
す、此間畑道にて別段しるすべき程の事もなし、國府津より電氣
鐵道に乗る、其所より八九町ゆけば酒匂川サガハなり、東京永代橋の三
倍もある長さ橋を架す、此川古は丸子川と呼ぶ、建久四年五月曾
我兄弟、父の仇工藤祐經を討んとて、丸子川を渡りけるが、十
郎手綱かひくりて申けるは、和殿わごの三ッ祐成五ッの歳より廿餘の今
迄、此川を一月に四五度つゝも涉りつらん、いかかるよかれば今
渡り果さんことの悲しさよとて、

十 郎

五月雨に淺瀬もしらぬ丸子川

あみよあらそふわが涙かな

五 郎

渡より深くぞたのむ丸子川

親のかたきにあふせと思へば

云々と曾我物語にえたり、又源平盛衰記を按するに、建久元年十月頼朝上京の時、梶原平三景時川中にて發句ありしを、頼朝其脇句をつけしとぞ、此川より一里許にして小田原驛あり、箱根山は近く西方に聳ゆ、其一に石垣山といへるあり、昔者（明應四年即ち三百九十三年前）北條早雲此山より小田原に乱入せしにて、豊公の北條を攻むる時（天正十八年即ち二百九十八年前）にも亦此山に陣せりといふ、如斯かゝる要害の處ゆるゑ、徳川氏の時には猥りに人の入るを禁せし由あり、小田原の市街は随分長けれども繁華の處は數町にすぎず

此地の名物ある提燈は、古へ新宿町に住る甚右衛門といへるもの、初て製造せしかりとぞ、享保（百七十二年以前）の頃より専ら諸國に通用せり、毎戸に之を鬻ひかぐといへども之を作るは甚左の親屬二戸に限れりといふ

湯本の旭橋に着せしは十時過かり、橋を渡り早川にそひて右の方へゆけば、溪流石に激して其響轟々たり、湯本より三町許ゆきて塔、澤の玉の湯に到り暫らく休息し、又溪流に沿ひて羊腸やうちやうたる道を登りゆく、漸く行くに従ひ漸く高くある故、水聲は遙數十丈の崖下にきこえ、左手はすぐ高き山なり、溪を隔ても亦高き山あり、此道は新たに造りしものなればとて行人一人につき金一錢五厘つゝを徴す、崖上の茶店に息む、西瓜を喫し又溪水にそひて登り行くこと一里餘にして堂嶋かたがしまに下る、温泉宿は皆不潔なり、此處に

平松氏の別荘あり、えらべの瀧を圍ひこみ景色甚だ佳なり、此瀧の傍より登りゆけば宮ノ下の奈良屋の側に出づ、奈良屋にて又暫らく休息し、底倉にて鰻飯を食ふ、此時午後一時四十分あり、底倉の下木賀へゆく處に太閣湯あり、むかし秀吉小田原征伐の時入浴せし處ありといふ、底倉より八町許ゆきて木賀を見物す、猶進んで宮城野にゆき蕎麥屋に一泊せばやと思ひしかど、かくては蘆ノ湯へ行くに迂路なりといふ人のありしかば、又底倉にかへりるこより岐路えだみちに入り、嶮じき坂路を経て半里ばかりゆき二平に出で、又嶮路を登りゆくこと一里にして小涌谷に至る、此時四時なり、此より蘆ノ湯行かんと思はゞ行かるれども、いろいろ旅路にもあらねば、先此邊へおみこしをすゆべしと思ひ、三河屋といへる温泉宿こわきたにに投宿せり、小涌谷には温泉宿二軒あるのみ、一軒を小松屋と

いふ、去れど三河屋の方家も廣し取扱もよしといふ事なれば此家に宿せり、此家は東に面し平家あり、二階あり三階あり室數は三十位あるべし、構造は美ならねど随分大ある家あり、東北は次第々々に低くなる平原にて、西南は次第々々に上りゆく平原あり、東南の方に高山あり、此家には西洋料理あり、玉突場あり、西洋人も七八人居たり、始め我輩の此家に到るや、此家の女房とればしく年の頃廿四五の婦人出で來りて、丁寧に挨拶して今日はどちらより御出なされたかと問ふ、ヤガテアチラへの聲と共に案内の室に通る、それから烟艸盆が出、坐蒲團が出、菓子が出、茶が出、浴衣が出、その次に主婦が出、宿法は上中下の中何れにすべきかを問ふ、余は並ばたて四十五錢のものを命じたり、夫から一浴を嘗みて、炎暑と塵垢とを洗ひ落し、縁端の柱によりて

休む、スルト向ふの山に、イッノ間にやら鼠色の雲が生じ、其あとから猫の如き雲が起り、忽ち大きくなりて虎の形となり、又變じて龍とあり、段々と三河屋の方へ向ひ來り、向ふは一ぱいの雲となりて山は全くみえず、之と共に糸の如き雨がふり來り、直にポツリポツリと音し、やがてザットなる「シャツ」の上へ單衣と浴衣を着ても猶冷かり、やがて晚餐を饗す、菜は鰻あわびの煮たるに小魚一尾をそへたり、去れど鰻はかたくて不消化ゆる更らに牛肉を命じぬ、夜八時頃寢に就く蒲團も夜具も甚だ清潔あり、初には蚊の居らざる様に覺ゆしが、少し経と耳のあたりへブーンと一聲二聲響きたり、そのまゝねればねらるれども、何もソ一遠慮するに及はず、早速下婢をよび蚊屋をつることを命ず、十分たち、二十分たち、一時間たても持來らず、斯くも承諾せし蚊屋をよこさ

ゝるは甚だ失敬なり、主人に申附くべしとおもひ、縁側に出れば隣室の前に一張の蚊屋あり、隣室の障子はしまり居たればよくは分らねど、主人は既にぬふりたるものゝ如し、因て余は其蚊屋をソット持來りて釣らんとせしに、三隅のつりてはありしが一方はあかりし故、此處へ袴の紐を結びつけ、袴をば側に在りし着物掛へさげしかばよき具合よ釣れたり、折角見附出せし蚊屋を奪取られては一大事とれもひ、表の障子をえめきりていつの間にも眠りたり、翌朝になりても苦情いふ人はなかりき、此蚊屋は全く下女が我室と間違へて隣室へ於きしり分りがたし、翌朝起出れば雨はやみたり、入浴して斷食を破る、菜は玉子焼と味噌汁なり、食終て我輩は結束し一圓紙幣を出し勘定をなさしむ、余は八時に同家を出で三町程上へ登りて、此地の湯本ある小地獄をみる、地中

より沸々と熱湯湧出れども地獄といふ程の慘狀さんじやうもあし、鎌倉に行ては瓜を極樂寺村に食ひ、箱根に來りては一夜を地獄に明かす亦奇といふべし、三河屋の前より南の方蘆ノ通に通ずる一路あり、余は此路を登りゆく途中に七曲とかいへる處あり、今迄經過せし中第一の嶮岨なり、小涌谷より蘆ノ湯まで一里餘あり、蘆ノ湯の西北に明礬山といふ高山あり、山上より見渡せば江島鎌倉を初として、相洋そうやう十七里一瞬いつぱんの間に在りといふ、蘆ノ湯の地は平坦にして畑あり、休裁全く他の六湯とは異なれり、六湯の風景は皆大同小異なり、蘆湯は硫黄を含むこと多量なるゆゑ臭氣甚し、梅毒病者の如きものにあらざれば入浴せずといふ、蘆ノ湯より又南へゆけば弓手ゆんでに會我兄弟及び虎女の石塔といへるあり、高各一丈ばかり、何時いつの頃建てしか随分ふるさものと如し、此處より少しくゆ

けば數丈ひくき處に一ツの池あり、精進池と名づく、(或は庄司、生死等に作る)此邊に弘法大師(千五十三年以前に死す)の作りきといふ廿五菩薩岩、多田滿仲墓、慶長古碑及び八百比丘尼墓等ある由ありしが余は之を見ざりき、滿仲墓といへるは全く滿仲死(八百九十年一以前)後三百年頃に建てし供養塔ありといふ、又此處の路傍には山崖へ高彫たかほりよせし大なる石地藏あり亦之れ弘法の作といふ、此處には水を飲み休息してゆけば、即ち元寶河原もとさいのかはらにて左に二子山あり、右に駒ヶ岳あり、其北には死出の山、血之池あり、駒岳は箱根第一の高山かりといふ、路にて一老樵らうしやうにあひ權現社へゆく道をとふ、彼詳に之を教へ且つ二子山の因縁、四十九箇所の名勝、五郎様のエライ事などを語る、言語頗る朴訥はくたくあり、あくて道を右に轉じ、坂を下りゆけば、元箱根村に出づ、猶右にゆけ

ば權現道あり、烏井の側湖水の邊に祠官の家あり、昔時は別當を
金剛王院箱根山東福寺と號し、權現社の直下に在りさといふ、余
が此處に來りしは午前十時なり、余は祠官の家を訪ひ、武相豆駿
圖を購ひ且藏する處の古器文書を見る如左

一赤木短刀

工藤祐經ヨリ宮玉丸ニ贈レル者

一徽塵丸大刀

長三尺三寸備前長圓作

仇討ノ時別當行實ヨリ十郎へ贖リシ者

最初木曾義仲ノ重寶也

長二尺七寸三條宗近作

一薄綠大刀

一名膝丸又名蜘蛛斬丸或名友斬丸

仇討ノ時行實ヨリ五郎へ贖リシ者最初源賴光之大刀也

以上三振トモ社藏會我兄弟太刀由來記及會我物語ニ詳ナリ

一秀吉之大刀

一佐々木高綱之轡

一嵯峨天皇御劔

安部國眞作

一越前國守源忠直大刀

長三尺一寸

一覺明之兜

明二年作尾州住義信

一人丸木像

頓阿作

一神代之石鏃

一石牙

一前世界之具

一古代香合

一政子之鏡

一政子之櫛

三枚

- 一 蓮糸
- 一 瑪瑙長簫
- 一 泡浮玉
- 一 鹿玉
- 一 牛玉
- 一 馬牙
- 一 足利義教文書
- 一 北條禁制狀
- 一 義輝書翰
- 一 道永書翰
- 一 織田信長書翰
- 一 道哲注進狀

義經之所有セシ者ナクト云フ

- 一 松田康長注進狀
- 一 秀平披露狀
- 一 北條氏康書翰
- 一 北條時宗書翰
- 一 秀吉書翰

以上

右の外猶許多あれど、今は鑒定かんていの爲め、神奈川縣廳へ差出せりと
いふ、

余は祠官の妻君に金十錢を贈りて謝儀とかし、此家を立出しは十
一時かまあり、鳥居の側らに高三尺周圍一丈二尺餘の大釜かま二口あり、
舊なかはふきうき方は半腐朽す、
一 釜之銘ニ曰、大筥根山東福寺湯釜一口、満山大衆別當法橋上人位

隆實、文永五年戊辰十一月十二日、(六百二十年前)

他釜之銘曰、奉鑄治大筥根山東福寺浴堂釜一口、奉為天長地久、御願圓滿、殊關東靜謐、武家安穩、別當法眼和尚位隆實、并滿山大衆、奉鑄治之狀如件、弘安六年癸未五月一日、大工豆州磯邊康廣、(六百零五年前)

余等は此古釜を見、夫より權現の社に詣ず、神社は湖水の東北隅に在り、漫々たる函湖くわんこに面し、老杉ろうさん高く聳えて晝猶暗く、磴とらりこけ離なめらか滑なめらかにして、自ら大古の色を呈す、祭神は天津彦火々出見尊、天津彦火瓊々杵尊、木華開耶比賣命の三神を奉祀し又大己貴命、少彥名命を並祀す、天平寶字元年(千百三十一年前)萬卷上人の勸請する所なり、一説には人皇五代孝昭天皇御宇(二千三百六十二年)より崇神天皇御宇(千九百八十四年前)に至る迄、筥根山

に三仙人出で奏聞を経て之を祀り、神功皇后の御宇(千六百八十八年以前)今の地に遷えしなりともいふ、代々帝王諸武將の崇信する所となり、明治七年聖上及び皇后も此に行幸し、玉ひきといふ

大江公資相摸國守たりし時、其妻乙侍從(稱相摸)當社に詣て、百首の詠歌を奉りし事兩度ありきと云ふ、

社殿は十年以來修繕を加へし由にて随分美なれども、苔むしたる石の玉がきは頽れ傾きていと哀なる有様あり、是より元來し道をあゆみて東の方へゆき、又湖水に沿ひて南へゆけば、塔嶋の離宮に出づ、猶大なる杉の並木を経て南行し、夫より左に曲り又右に行けば箱根驛なり、此驛は元和四年(二百七十年前)置かれし者にて、東京より二十四里ありといふ、權現社より此驛に至るの間

皆湖水の沿岸たるを以て景色甚た佳あり、快晴の時は富岳湖水に映じ、一層の美を呈する由あれども余は之を見るを得ざりき、
鏡なすあしのうなづらくもり来て

ふじの高嶺の影もとどめず

此驛の蔦屋にて午飯す、時に十二時なり、菜は刺身に玉子と椎茸と白髪昆布のつゆにて、價は甘錢あり、刺身は新しかりしかど羹の塩辛きには閉口せり、同家を立出でしは十二時四十五分なり、茲に奇とすべきは余が祠官の家に在りし時、小涌谷にて相知りし二名の婦人にあへり、夫より余が権現の社に行きし時、石階にて又彼等にあひしかば、少時佇みて談話す夫より、彼等は還りゆき余は登りゆく、かくて余が元箱根をすぐる時、彼等の茶店に息ふにあへり、余は彼等に先ちて驛に至り還り來れば又彼等に岳影樓

にあへり、余を以て東海散士となさば、彼等を紅蓮、幽蘭と云はざるをきを得んや、眞に是れ佳人之奇遇なりと、自ら才子を氣取りて

いかちれるはよしあればか箱根山

ふた度三たび君にあふらん

と減らず口を叩きて行けば年經たる大なる石の鳥居前に出づ、此處より坂路を右へ登りゆけば即ち東海道あり、東海道の官路往古は専ら足柄嶺を往返せしに、富士山焚燒し碎石路を塞ぎしを以て、桓武帝延暦二十一年（千八十六年以前）五月初めて當山中は新路を開き、官道を通せらる、明年五月此路を廢し、足柄の舊路に復せられしが、此路徑直なるが故に、便宜を以て足柄箱根の兩路互に往來せりとみねたり、此處より三枚橋に至る、三里の間大概各

種の自然石をしきつめたれば、行路の難いはん方なし、鳥居前より八町登りゆけば、其他は皆下り坂あり、鳥居より十町許來りしと思ふ處に甘酒小屋あり、余等は此處にやすみて茶を飲み、鮎を食ひ又下ること三町許にして坂路はますます峻嶮しゅんけんとなり、敷石は草鞋もて摩擦まさつせられたれば、滑にして轉倒すること二度、すべることは其數をしらず、戦々兢々せんくきやうくとして冷汗を流すに至る、坂路の最峻なる者を猿滑さるすべり、糧木かしのき、西海子坂さいかちさかといふ、畑村にて休み須雲川村に來れば此處に湯本細工を賣る家ありし故、みやげものとして玩弄器を購ふ、元湯本の早雲寺に、北條五代の墳、及び宗祇法師の墓あり、又往還の傍に名山崎といへる處に、矢立杉の蹟ありといふ、曾我兄弟富士野狩場に赴く時、表矢を射立てし事、及び兄弟死して後、其母虎女と共に箱根の僧坊に至りし路次、此杉の下

に立寄懐古の情を興し、

見るからにうさこそまされ足曳の

矢立の杉にのこる形見を

母

常よりも又ぬれそひし獄かな

あかぬ別のあどの涙に

虎

といふ歌を詠せし事曾我物語にみえたり、かゝる名跡なれば早雲寺と並びに之を訪はましく思ふ心なきにあらねど、時刻れくれしをもて之を見るに暇あらず、急ぎに急ぎて三枚橋を來りしは五時なりき、

過去の函嶺 (改元紀行)

廿九日 よべより雨こぼすが如く降りてをやみなし、今日は名に負

ふ箱根山越えんに、斯くては歩み苦しかるべし、夜明ぬ程は焼松の火も打消たるべしなど従者の互に云ひあへるもことほりなり、これ王尊が馬をいさふ所と思ひこれして、卯時の酒二つき斗り傾けて、従者にも傾けさせ出たつに、夜はほのくくと明渡り、雨もやまをやみぬ

右に大手あり、惣門を出で右にまがり左に折れて、山口にさしかゝる右に地藏堂あり、是より巖石を右にし谷川を左とす、之れ早川の流れなり、川のはどりに菜圃あり、黄花こがねを散らすが如し、西南に石橋山高く聳へ、伊豆の海遙に見はれて、風景云はん方なし、尙も山を右にし川を左にして行くに、踏む所石ならざるはかく、見る處山ならざるはあし、山崎峠をこえ三枚橋を渡るに、右に湯本に行く道あり、一むら竹の圍ひして何某の莊園にやと思ふに、門前に

高札ありて金湯山と云ふ額あり、朝鮮國雪峰の書にて、方丈の額も同じ筆也、早雲寺ちめりと輿より下りて入るに、京櫻咲き乱れたり

鐘樓の銘を探り見るに、文字磨滅して僅に元徳二年の四字見ゆ、ふところせしに蠟墨もてうつ、北條五代の墓は何處と僧に問ひ、書院の庭より入りて見るに、苔むしたれど文字鮮かに見ゆ、後の頃に營みたてし物あるべし、

齋の七十余城にも劣らざりし勢を思ふに涙もとまらず、台殿松杉入空翠と南郭が詩作りしもむべなりけらし、

書院の障子に龍虎の畫あり古法眼の筆ありと云ふ、寺を出で湯本の立場に息ふ、こゝに轆轤もて挽物にせし器數多、さゝやかなる玩ものなど店に連ねてめせくと進む、故郷のうまご

の家づとにせんと二つ三つ買ひて輿の内に藏む、谷川橋を渡り、し
あげ坂沓わり坂を越えて又土橋あり、此あたり左は山岸に添ひ右
は谷川にのぞめり、むかひの山高くして幾重とも知らず、川畑と云
ふ立場に息ふ、左に地藏堂あり、斯る處にあか佛とたのみ鉦打鳴らす
道心を見るにいと哀あり、すくも川にかゝれるすくも橋を渡れば、
山岸を右にし谷川を左にす、尙さがしきに登れば、女ころばしとか
や云へるあたりの左の岸に一の石有り、曾我五郎の割石とよふ、大
澤の石橋を過ぎ、尙右の方の山岸浴ひ、右の方の谷川に臨みつゝ行
くに、隆放翁か山重水枝疑無路、柳諳花明又一村と云へるごとき立
場あり、畑と云へる所あり、輿かく者ものも勞れ従者もやみぬれば、
暫く休らはんとするに、立つゞきたる酒家の内より女共の群れ出で、
百千鳥の轉る如く、これに息はせ給へ彼に上り給ひねなど口々に云

ふあり、蔦屋と云へる宿に立入りて、餉あさり酒呑む、欄干により
て見れば上に千童の山聳へ、下は不測のたにゝのぞむ、心なき雲は
岬を出で、友を求むる鳥は霧にむせぶ、今朝風祭のほとりより雨や
みしが、こゝよ至りて全く晴れ渡り、停午の日の影はなやかにさし
出るにぞ、疲もやみ心も勇みぬ、右の方に大なる石あり、角坂かしか
の木坂猿迂りてうしの口をどさがしきに嶮しきを重ねてやゝ平かな
る口か平と云ふ所にいたる、こゝに四阿立てゝ甘酒ひさぐ者あり、暫
く輿より下りて歩むに右に二子山近うして兀山なり、石のみ有りて
草木の類なし、左に見ゆる山を文庫山と云ふ、昔し文庫の蓋とりてう
しこに投げしかば、ふたご山とされるを輿舁どもの語るもおかし、
お玉坂といへるは罪ある女刑せられし故に斯く云ふとぞ、しろれと
云ふはもと城不見と書けり、昔都より使來りて此箱根山につきあや

み小田原の城見すに歸れり、其上使を迎に出し所を上使の口と云ふ、
 今てうしの口と云ふは訛れるなり、など輿かく者の云ふも夢の中に
 夢古ふ心地す、右の方に箱根權現に行く道有り、三町程と聞けば輿
 をさきなる出口に先たゝしめて、村の童を案内とし細き道をたどり
 行く、昨夕いづべの雨に道うるをひたれば履を着て歩む、謝公東山の履に
 も劣らさるべし、

左に蘆の湖たゝへて汀に大なる釜二つあり、山を右にし湖を左にし
 て行けば、向ひに東福寺あり、右の方に石坂高く見えて、權現の社
 銅瓦ふきなるべし、關こぬ間は先を急げば遙に伏拜みつゝも、も
 と來し道にかへりて、地藏堂の前にいづ、さいの河原とか云ひて、
 法師のかね打ち鳴らして念佛唱ふる聲けうとし、姫路の太守のみた
 ちにつかふる高須氏に行あひぬ、馬上相逢無紙筆と云へる、かくら

たの心なるべし尙暗き坂を登り、御關所守れる者の方へ、從者を以
 て云ひ遣はせしに、既に問屋の者より云ひねこしぬれば改めて云に
 及ばすと云ふにぞ、笠ぬぎ中ぬきの沓のきて關を過ぐに、長持の槍
 は既に先立て通りぬ、是より輿にのり湖を右にし石橋を渡り行く、
 左右に寺など見ゆ、宿のさま鄙びて湯本宿の立場にはたちも及ばず、
 左に紅藤庵と云ふ額見へしは寺にやあらむ、此あたり夏も蚊蠅あし
 と聞く、風越しの台を上り、はらか平に至る、霧深くして左右を見
 す、張公か五里の市も斯くやらん、こゝは伊豆相摸の國境にして二
 本の杉立てり、右は焼けたる山の如く、左は深き谷かとあやうく
 踏む所の石あらし、古木老杉梢を交へて物すぞく、衣の袖も冷かに
 打ちしめりたるに雨さへ降り出ぬ、大かれ木かれ木など云ふわた
 りより、輿の戸さし籠て蹲り居るに、輿昇く者も石につまづき息杖

立て、やう／＼に下りゆく、輿の裾ははら／＼と音するは小篠竹
 かり、之なん箱根竹とて、都人の煙管に磨き用ゆものなりとぞ、行
 き／＼てあづまやあり、前に石をたぐみて庭めきたり、紀の國の守
 の息はせ給へる立場かりとぞ（政右衛門が立場と云ふ）尙も小篠の中
 を分けつゝ下り山中と云ふ立場に至る、山上より此處まで一里十町
 ばかりへれると云ふ、右にしば切地藏あり、やゝ行て霧晴わたり四
 方の山々あざやかに見ゆ、富士見たいらと云へる所のよしきつる
 に、富士の峰曇りて見ぬぞ恨みなる、遠く河水の流れ行くは喜瀬
 川あるべし、南の方に幾重ともなく連れる山あひより、虹の立昇る
 けしき云はん方あり、左右に松の並木あり、上長坂を下れば篠原の
 立場に出づ、人家山中よりはつき／＼し、左の方より見はらしやと云
 ふ家名あり、げにも見はらしよき所なり、下長坂を下り行く、荷つ

けし馬の膝折りて倒れしあり、くろよりしか黄になんぬと云へる詩
 も思ひ出らる、三つ屋と云る立場を過て、右に覺源山松雲寺と云ふ
 法花寺あり、是より三島にて一里半有と云に力を得て、小しぐれ大
 しぐれをど云ふわたり越え、左に一の山七面堂あり、接待の茶を進
 むと云ふ、一の山の立場を越ゆれば坂を下る事急あり、白ころばし
 と云ふ立場あり塚原なり、今井坂を下りかはら前の橋を渡り三島の
 宿に着く、

現在の函根

(1)湯本 早川の西岸にあり、函嶺温泉場第一着の町ありとす、舊東
 海道は茲より左に岐れ、三枚橋を渡り、畑、川畑を経て、函根宿に
 到る、温泉巡遊の道筋は、左早川の岸に沿ひ、晚澤右に向て登り行

くものとす、泉質單純にして少量の鹽分を含むのみなれば、疾病の效驗多からじと云ふ信乎、温度は攝氏三十八度、華氏百度にして、湯坂山の麓、岩崖の間隙より噴出し來る、色透明にして恰も水晶の如し、浴館としては有名なる福住樓あり、白壁赤瓦層樓燦然たり、早川に枕し、湯坂山に倚る、所謂貴族的浴館にして、所詮學生の企て及ぶ所にあらじ、替后には小川屋ある平民的旅館あり、内湯の設けありて福住に比しては非常に簾なるも、長く滞在して避暑すべき所とは言ひ難し、即ち通り一遍の休息所たるのみ、近傍散策の地としては塔の澤あり、早川に沿ひ登ること五丁餘あり、亦湯坂山の麓に玉垂の瀧あり、一見の價值あるべし、

(2)塔の澤 早川は地の中央を貫き、S字形とあつて湯本に流れ落つ、水聲轟々岩石に激し、山間に響きあひ、大聲を發するに非らざれば

對談し難し、橋あり玉の緒橋と云ふ、四面山嶽重なり、風の通し至て惡し、塔ヶ峰の麓万綠叢林中、一點白壁の耶蘇舊教堂あり、塔の澤より凡そ十二町餘の所に瀧あり、高さ三丈餘常盤の瀧と云ふ、温泉浴館は新玉の湯(内山こう)玉の湯(木村又太郎)環翠樓(鈴木善左衛門)一の湯(小川鎌太郎)藤屋(安藤徳治)福住樓(長谷川まつ)の六軒にして各々内湯の設けあり、其内玉の湯最も美にして大なり、此地蠅多く蚊多く亦むし暑ければ、避暑の適地なりとは言ひ難し、

(3)宮の下 海面を秣くこと壹千百廿尺、早川より高さこと三百尺、其南岸に位し地形稍々平坦なる所、壹百有餘の人家建つ、浴館は富士屋(山口仙之助)奈良屋の二軒あり、共に宏大美麗なる建築にして、函嶺幾百浴館に冠たるものあり、富士屋は外客を專にし、奈良屋は本邦人を專務とす、奈良屋にも母家の裏手に西洋館を新築し、嘗て

横濱フェリス女學校にありし、全家の娘某浴客を待遇すと云ふ、客室大凡廿七、食堂あり、玉突場あり、運動場あり、總て鬱散の器具備はり宿泊料も亦他に比して高からずと云ふ、三面は山嶽連綿岐立すと雖も、南方纔に明きをるが故に、遠く相州の海面を認む、風景絶佳たり、郵便電信、爲換。小包等を開始し居るが故に最も便利なり、堂ヶ嶋へ五町、底倉へ三町、木賀へ十町、小涌谷へ十六町、蘆の湯へ一里廿六町ありとす、

(4)堂ヶ嶋 海面を積くこと七百九十尺、宮の下より五町餘、早川の南涯、溪間の底にあり、流を隔て、北には明神ヶ嶽あり、白絲の瀧其麓に懸り、遠望の風景を見欠くと雖も、緑樹陰重かりて、日光を遮り溪水炎熱を洗ひ流せば、三伏の候と雖も爽涼言はん方なしと云ふ、浴館は大和屋、江戸屋、近江屋の三軒あり、猶西に離れて安藤

りうある浴館あり、元の瀧の茶屋を引受けて改築せしものと云ふ、夢窓國師の舊跡あり、調の瀧あり、平松某氏の別荘あり、閑雅幽寂の地なりとす

(5)底倉 底倉は宮の下の西町續きなり、北は早川を隔て、明星ヶ嶽を望み、南は蛇骨野小地獄に連なり、西は蛇骨川の崖に接す、橋あり萬年橋と云ふ、浴館は梅屋牧太郎、仙石屋丈助、蔦屋さくくの三軒なり、蛇骨川上流僅かに二三尺の地を穿てば、白色にして蛇の骨に似たる化石を得るとありとて、何時しか之を蛇骨川とは云ふに至れり、橋を渡り木賀の舊道に出づれば、右に白鷺の瀧あり、其傍らに太閤風呂あり傳へ言ふ、昔し秀吉此の温泉の奇効あるを聞き、石風呂を設け朝夕之に浴し以て戦勞を慰めたりと、故に今猶太閤の石風呂と稱す、蘆の湯へ一里半あり、木賀に至る途中見晴の茶屋あり、南

は二の平の丘阜にして北は早川の懸崖あり、峰巒起伏、溪流蜿蜒々、木賀の浴館其間に點綴し、眺望の景色、近傍温泉場に見ざる佳境たり、

(6)木賀 木賀は海面を積くこと一千〇七十尺、底倉を離る三十町餘早川の西岸、早雲山二の平の東麓にあり、浴館として龜屋、松坂屋、仙石屋の三軒あり、宮城野に到る五町、二の平、小地獄を経て蘆の湯に至る一里半なり、

(7)小涌谷 温泉は宮の下より十五町、蘆の湯に至る途中、小地獄山の麓にあり、近來開けたる所にして所謂函根七湯の外なり、泉質は黄硫に鐵分を含み居れば、リウマチス亦は貧血性の者に特効ありと云ふ、浴館は開化亭及び三河屋の二軒のみ、別に記する所なし、

(8)蘆の湯 函根温泉七湯中の最高所にして、海面を積くこと二千七百六十餘尺、木賀より蘆の湯に到る道、登るに随つて險なり、蘆の

湯近く來りて七曲りと稱する坂あり、坂路を曲折すること七回、滿身汗にひたされ漸く上り語むれば、硫黄の匂ひ紛々鼻を貫く、即ち蘆の湯あり、北は宮城野、二の平、及び小地獄の平原にして、南は双子山、東は鷹巢山、火ともし山等、函根官道に連り、遙かに小田原の沿岸を見下し、遠く江の嶋碧空よ浮ふを認む、正に之れ一幅のバナラマ話畫に對するか如し、浴館は、松坂屋萬右衛門、紀伊國屋儀三郎二軒にして就中松坂屋最も宏壯客席凡る百餘室を備へ、和洋二様の割烹を調べて客を待つ、然れども座敷の裝飾は他の浴場に劣る數等なりとす、蘆の湯より函根に到るの道は、稍々平坦にして險ならず、里數は一里二町餘、途中曾我兄弟及び妓虎女の碑あり、多田滿仲の墓あり、宏大なる巖岩に刻みたる地藏あり、血の池あり、峰吹く風に波立つ萱の茂れる道を行くこと數町、俄然右に當りて綠

水一面の鏡を見る即ち函根湖なり、湖邊緑樹陰暗き所、塔ヶ島の離宮、洋館の屋根表はる、眺望頗る佳し、是より下ること數町にして、權現坂上なる函根官道に出づ、猶下り元箱根村をば下に見て湖邊に出で、離宮前を通りて函根宿に到る、

(9)元函根村 は權現坂の下、蘆湖の東涯にあり、人家大凡四十餘戸、茅擔陋屋頗る衰色を呈すと雖も、自然の風景亦愛玩すべきものありとせず、夏期よ到れば脚氣患者、或は學生の避暑に來るもの多し、民家にして一ヶ月賄付七圓より十圓迄あり、炎熱金を鎔す日と雖も、湖上より涼風吹き起りて、朝夕袷羽織を要すること度々ありと云ふ、食后散歩の地として函根宿あり函根權現あり、或は湖岸釣を垂るもよし、月に乘して舟に掉すもよし、或は山に上りて溪間の姫百合を手折るもよし、學生避暑地として函嶺の冠たるものとす、

(10)箱根權現 は元函根村より三町餘、石を段踐で陟る二町餘即ち本社に到る、往古は甚だ壯麗の社たりしも、今は頽敗して見る影もなし、鳥居前湖水沿岸よは古杉、枝水に入り蔦纏ひ苔蒸し、奇麗巨石落んとして纔に盤根に攫まるゝあり、水紺碧色にして底を見ず、其深さを測るときには九十尋ありと云ふ、湖尻ちみじりに至る陸路五十町、水路一里なり、

(11)函根宿 は湖水の東南にあり、戸數大凡二百有餘、往古は人馬絡繹織るが如き、繁華を極めたる、東海道中第一の要關たりしも、今は只舊關所に二三の巨石横りて、一株の松樹淋しくも霧に咽むて樹つのみ、其近傍の山には綠草生ひ茂りて、白き山百合の咲き乱れたるなど、轉々懷古の念に堪えざるあり、塔ヶ島は權現社前の深林と相對し、綠水を收ちて一灣形をなす、島の絶頂には壯麗なる離宮あり

り、離宮門前より元箱根に到る所恰も日光に見るが如き、古杉森々として日を洩さず、晝猶暗き陰路より、湖面鴨綠細波漾々たるを見る、近郊散策の地としては姥子温泉あり、仙石ヶ原あり、鞍掛山あり、駒ヶ嶽あり、若し夫れ風かく波靜かある日に、船に乗り湖水に泛べは、富嶽逆まに湖面に映し、恰も之れ「船は掉す波の上の富士を」と云ふが如き感あり、旅館は土生屋、石内本陣、山木屋、遠州屋、大村屋、其他民家寺院等皆避暑客人の用に充つ、郵便電信、爲換取組、小包荷物等開始しあれば、交通に不便を感ずることなし、亦毎日生牛一頭を屠り、且つ食パン製造所、上等の菓子屋、西洋洗濯等あれば避暑するには何等の不便を感せず、且つ費用の點に至ては、他の温泉浴場に比して猶半額にも充たざれば學生の避暑地としては最も適當なる所ありとす、産物としては所謂湯本細工あるものあり、往時

東海道の往來頻繁かりしときには、湯本の茶屋と云へる所にて買ひ求め、江戸往復の土産となせし故に、湯本細工ある名普く天下に知られたりと云ふ、現今は外客の此地に遊ぶもの多きより、其嗜好に移し緻密の寄木もて、テーブル、書棚、屏障等ついでを製す、宮の下及び函根宿に最も多し日本向の膳碗盆等は、大平臺の渡邊氏最も名ありと云ふ、

(12) 姥子温泉 は函根宿より水路一里にして湖尻に上り、仙石ヶ原を過ぎ、曠茫たる綠草の原野に、牛馬の自由に飛び歩み居るを見つゝ、溪水涓々綠叢裡間に響き、名も知れぬ夏草の咲き亂れたる草路を踐みて行くこと十餘町、即ち姥子温泉に到る、泉源は大地獄より直ちに、巖洞を通して噴出し居れば、他の温泉に比して温度最も高し、浴館は一戸として客舎四棟ありと雖も、陋惡にして貴客の滞在に適

せず、飲食物交通の不便甚だしければ、浴客の最なるものは單に近郊の農民村婦に過ぎず、此地海面を積くこと二千八百餘人、大地獄山の西二三町の所にあり、近傍地中には木の葉化して石とかりたるものあり、所謂木の葉石之れかり此所より宮城野を経て木賀に出づる道あり、亦大地獄を経て二の平村を過ぎ、底倉亦は宮の下に出づる道あり、共に一里二十餘町なりと雖も、道險にして普通一般の浴客には最も困難ならん、

(13) 乙女峠 は湖水西涯の山脈北に流れて金時山の山脈に連る山の凹くぼみなり仙石ヶ原より一里半、羊腸曲折の峻阪を攀ち、登ること半里、即ち峠の絶頂に到る、西は駿州の平原御殿場、其他遠近の村落點綴し、前面には芙蓉の兀として峙ち、其麓より絶頂全体の景を觀る頗る壯觀たり、

過去の富士登山 (富士日記拔萃)

二十四日(寛政二年七月)今日は空晴れ、高峰の雲も消えたれば、いざやと出て立つ、兼ては主人、しるべせんと云へりしが、此頃いとけなき子の、もがさ病めれば、すべなしとて、強力と云ふものを添へて、案内せしむ、

卯の刻に、家を立ちて、先大鳥居の内なる、淺間神社に詣づ、夫より登山門を上り、馬かへしと字せる、すゞ原まで、裾野三里が程、馬に乗りて、行きしが、其處よりは徒歩にてのぼる、高峰までを、十にわけて、一合二合と稱ふるは、大方一里二里と云へらむが如し、三合めに御寶權現と云ふあり、木花開耶姫を奉れるあり、其かたへの詞は、信立僧正をいはひたるあり、此處までは女も上るなりとて、

四合目、御座石の社は、盤長矩命、聊か登れば右に鳥居あり、小御嶽に詣る道あり、今は石尊權現と云へど、日本武尊と、經津主命とを、合せ祀れるものなる由なり、

かへるさに詣んとて、ひた上りに上るに、中宮と額打ちたる祠あり、大日靈尊を鎮め祭るあり、麓より、此のあたり迄は、木立深く、目かれぬ木草大かる中に、富士松と云ふもの、いと多く雪に晒れたるなるべし、唐めきて、立ちあらべる様、いとねかし、大たか一合目毎に、息ひて、汗れしのごひつゝ、黒き色したる茶を、あやしき器して飲みて登るよ、後より、潮の湧ぐが如くに、雲たち起りしが、見るが内に、高峰を指して登れり、

ますらをの武き心はれこせども

雲のあしには及ばざりけり

雲は馬頭より生ずとか、唐人の云ひたるも、さる事ながら、馬も通はぬ此山は、鳥だに見えわたらず、雲もかく遙かある麓のかたより、さうひ上るなど、かゝる類は、又あらじとぞ観ゆる、六七合目邊り、釜石、烏帽子岩と云ふ處々は、凡て焼けたりと覺しく、草も木もかく、只紫、或は黒色したる砂石の、角立ちたるのみあるを、兎角攀ち登りつゝ、未の時斗りに、八合目の石室につく、大方は此處を泊として、明日つとめて、頂には登ることゝ、聞きたれど、思ひの外日も高ければ、如何と、強力に問ふよ、うべ、今より宿らんは、無益あり、而覺さば、とくころかと云へば、暫し息ひて、又登るに、九合目より上のさがしきは、誠にたとへん方なし、例のますらをを心なり起してこゝしき岩角に攀ちつゝ、辛ふじて、上り果てゝ見るに、頂は思ひしよりも平にて、中を見下せば、右へ烟の立ちし趾と見え

て、くぼかあるが、底はすぼみて、幾千尋とも斗りがたし。鳴澤は何處と知らねど其音は、大きき川水の、谷に響く様にも聞ゐ、はた、松の村立に、秋風しらぶる様にも聞きなされたり、こは外もの方にて、石の崩れ落つる音ありと云へど、とことには、さる、とあらんとも思ひあされねば、兎に角に、此中くぼの業あらんかし、廻りは一里斗りありて、釋迦の割石、さいの川原を云ふ處々ありて、回り拜むあり、參り給ひかんやと、案内の人云へど、うちぎもゆかしからぬ上、此處にても、大方見渡さるれば、其處は周らず、右の方に原の如き處あるに、聊か下りて見る、おさん水を云ふ水あり、小き井あれど、如何なる日でも、涸れずとぞ、うべ今年の夏だに涸せぬは、あやしき水ありけり、今二つ同じ様なる井あれど、其處は水涸れて、雪いさゝか消え残りたり、思ふに、三水と、ひが

心得せし人の堀りそへしなるべし、其あたりの石も、焼けたらんと見ゆるが、多きが中に、紫赤白をどの交れるを、山みづに乞ひまつりて、家づとにもし、且後の忘れかたみにもせんとして、聊か拾ふ、かくて元の頂に登りたる頃は、日も西に傾き、分け登りし方は暮れたれば、山の形、遙かなる海面かけてうつろひたり、朝日には又西にうつろふとぞ、箱根足柄山なども、只此麓の如く、見下さるれば、まして、其外の山々は、只大地と一つに見えたり、又雪立登れば雨や降らんと急ぐに、麓より上れる雲は、聊かも恐しき事なし、此中くぼより雲も立ち、風も吹き出だせば、必ず、荒ると云ふ、烟はたえてあしやと問へば、今も時にふれて、立上るを、里人は見る事侍ると答ふ、暮れはてあば、彼の岩角いと恐しからむとて、宿りと定めし、八合目の石室に下りつきぬ、

此山のある様、五合目迄は、かりそめの板屋なるが、六合目より頂までは、大なる岩をたてにとりて、三方をも岩もて圍みたるが、二間に七間斗りなる中に、土の上に板を並べ、蓆をしき、すびつをかまへ、雪の氷りさるを桶の上に置きて、其したくりをもて、茶をも煮飯をも炊ぐあり、うちぎくは氷室めきて、清らかる様なれど、雪は黒き土の中より、堀り出しとまゝなれば、砂もまじり、あくもありて濁れるさま、たゞへ置きたる雨水よりも、今少しむづかし、元よりさる窟の内なれば、まことに、飢を助くるのみあり、六月朔日より、山を開き、七月廿五六日までにて、其後は、人もものぼらず、石室も其時かたむるが例なれど、今年暑き年なれば、かく人も侍りと主語れり、今宵の室に宿れる人、法師四人、行者一人、これから凡て十人斗りあり、出づみの御心をみ給へるけにや、聊か風もあし、

夜の更け行けば、霜月ばかりの様に冷かなるに、蚤と云ふ虫のいと多く、さらでも此の山の上に、かく居ぬる事よと、思ひつゞくれば、目もあはぬを、人はさも思ひたらぬにや、ごうぐといびき高くして、うまいせる様に、いとゞかすみて、さびしきこと只思ひやるべし、やゝ子の時も過ぎぬらんと思ふ頃、ゆばりせまほしければ、供の男を起して、室の戸を明けさせて、やをら出でく空を見るに、星の光きら／＼として、東の方は、月しろと覺えて、海のはてなるべし、横さまに棚引たる雲間より光はのめけば、手洗ひて出るを待つ法師だちも、宵にちぎり置きたれば、ねろどかすに、とく目を醒して、同じくうづくまり居て待つ、かの行者も出でく、何やらむいと高かに唱へて、珠數れしもみ居たるは、少しかしましき心地す、室の外三四尺斗りは平にて、下ははひ登りし山路なれば、いと危し、

とはかりありて、さし出てたり

はたちばかり重ね上げたる山の上に

二十日あまりの月を見るかち

旅ねしてさく夜思へば郭公

まちしや何の心なりけん

* * * * *

現今の富士登山

我國の名山大岳は、大概人跡の至らざる所なく、毎歲夏期に至れば、登山者踵を接し、絡繹として斷ることかく、或は一山にして、其數万を以て算するものあり、殊に富士山の如きは、所謂富士講かる講社ありて、毎年開山期に至れば、白衣を着せる道者、四面八方より

群集し、其汗くささ躰は、何れの宿屋にも、何れの列車内にも充滿し居るなり、

我輩は今登山の最も便利ある方法を講せんに、先づ東京出發の時刻は新橋發神戸直行の終列車即ち午後十時に乗込み、翌午前一時五十分、御殿場に着し二時間内に同所に於て万事の準備を了し、人力車に乗りて出立せば午前五時頃には一合目に着すべし、此間三里八町一直線を爲し傾斜急ならずして、自由に馬車人力車を通ず、行くに一里餘にして瀧川原と言へる地あり、佐藤與平治へる休息所あり、亦一里にして馬回しに到る、茲より雜木繁茂せる道を歩みて、爪先上りに進み行けば、又一里にして太郎坊と言へる一の祠の如きものと前に出づ、茲にても登山者の爲めに金剛杖、酒類、草鞋等を鬻ぐ、太郎坊より五六町過ぎ行けば只茫茫たる燒原にして見渡す限り一樹一

木なく、僅かに雜草の所々に砂石中より生出でたるを見るのみ、又十
二三町にして本山の一合目に至るべし、一合目より以上は一面の燒
原にして山頂より崩落したる焦石、鐵糞の赤き小砂利となり五六寸
も積りて歩むに踏むたへなく一步進むときには一步退くが如き心地
して、歩行稍や困難を覺ゆ、然れども道の勾配は三合目まで左程峻を
らず三合目以上に達せば初めて阪路にさし掛りたるが如き思ひを爲
す、一合目より絶頂の里程五里餘途中十町乃至二十町毎に休泊所あり、之を何合目の何室と稱ふ、四合目以上の休泊所よりは皆石を疊み
て暴風、雪なだれの吹寄せ來るとも崩れざるやうに築きたれども室
の廣さは僅かに五六坪を其の三方は皆石を積上げ入口の一方のみ口
を開けたれば、室内薄暗くして且つ不潔極まれり、此の石室には飯、
酒、鶏卵菓子類を嚙ぎ、夜は蒲團を貸して登山者を泊らすれど其蒲團

の如きは多くは不潔にして臭氣あり、水は雪を日にあて解かせしものにして一杯の價一錢、飯汁の類も皆此水にて煮たるものなれど、
六七合目以上は空氣稀薄とされるが故に火力十分ならず、其多くは
羊熟にて餘程空腹とからざれば咽喉を下し難し、故に登山者は豫じ
め、ビスケツト、牛肉罐詰、麵包、干餅、毛布の類を携ふると肝要なり
とす、道は登るに隨ひて砂利漸く大となり、六七合目以上には尺餘に
滿つる焦石横はりて足溜となる、勾配の急なる割には却て登り易し、
八合目の石室より頂さに向ひて進むと數町にして、方十町ばかりの
凹形を爲したる谷合の傍らに出づ、此地を大だるみと云ひ四時とも
に雪の絶ゆるとなし、大だるみを越ゆれば途上の岩石巨大となり、突
兀として左右に亂立す此處を胸突八町と呼び山中第一の難處なりと
す、此を過ぐれば左に駒ヶ嶽、右に賽の河原あり、其間に窪き道は

即ち頂上表道の入口あり、傍らに銀明水あり、其水を飲めば諸病を發せずと言傳へ、登山者は心ず之を一掬するを常とす、茲より南に折れて一の木梯を登れば銅馬堂あり聖德太子の休憩したる古跡ありと云ふ、堂の傍らに又梯子あり、之を登れば即ち本山の絶頂駒ヶ嶽に達す平地の盡る處國幣中社淺間神社の奥ノ宮あり、傍らに講中信徒の籠るべき二三の石室を存す、奥ノ宮も亦石を以て外部を築き内部は木材を以て作り、廣さ四坪餘にして極めて粗造なり、本社の方三尺の戸を開きて入れれば良香朝臣の富士山記の碑あり、其の後面數歩を行けば舊噴火坑の壁頭に出で俯して其下底を見るを得べし、噴火坑は圓形にして上に廣く下に狭く宛かも土中に楯盆を埋めたる様を爲し、底には千載盡の雪を滿たす、信徒は此坑を内院と稱し、即ち淺間神靈の在す處として岸頭より遙拜敬禮す、此の噴火坑

の周圍に於て外輪を一周する五十町、内輪を一周する三十町、俗に之を八千れう廻りといふ外輪の途上には三島嶽、劍ヶ峰、白山嶽、久須志嶽、豆山、成就嶽、淺間ヶ嶽等の尖峰連かり、之に駒ヶ嶽を加へて富士の八峰とす亦之を八葉の蓮華に比す、之れ即ち世に芙蓉峰の名ある所以なり、就中劍ヶ峰は絶頂第一の高峰にして其頂きの平地より高さ猶百尺、岩質堅剛以て劍の刃に代ふべしとて斯くは名けしのもなりと云ふ、猶下山の道は銀明水の傍らより胸突、大だるみを経て七合目に至り、茲より南に折れて走り道に就くべし走り道とは足に二重三重の草鞋を穿ち、杖を以て支へつゝ少砂利の上を迂り下るものにして、一步を出せば百歩を降り、二歩を出せば千歩を降り、飄々風に乗して飛ぶが如し、七合目より二合五夕に至る迄僅々一時間を要せずと云ふ、其の愉快なる形容するに比なし、斯の

如き順席に據り登山を了せば絶頂にて猶一時間休足するとも。歸途は前記の走り道ありて足の運び迅速ければ、八時半までには寛々御殿場に辿り着き、翌朝六時四分の汽車に乗り十時には樂々歸京し得べし、箱根宿より富士山に登らんとする者は宮の下より木賀、宮城野仙石原を経て乙女峠を越え御殿場に出づべし、大山よりは山道三里を歩みて松田停車場に出づるものとす

富嶽と學生

(露

香)

噫美なるかか芙蓉峰、汝が山巔に載ける白雲の、旭日は映じて燦發する其美は如何、万里拭へるが如き晴天に、斷雲一片爾が半腹に棚引きたる其恣如何、海は紅に、霞、溪を埋め、落暉西山春かんとして汝に反照したる其景如何、噫、大かりと云はんや、高なりと云はん、

壯なりと云はんや、蓋し皇國詩歌文人のミウズとせんか、爾が四時變態極りなきの容姿は、古來皇國民が美術の模範とあり、或は詩に賦し、歌に詠し、文に誦し、若くは繪畫の上に表はれ、其氣象を醇化し、其品性を高潔ならしめたるの功蓋し少からざるべし加之汝の名は滿天下に轟き、波濤万里の外客汝を接吻し來るにあらずや、況んや邦國幾万の順禮者をや夫れ斯の如き扶桑の靈山をして、獨り彼等白衣の道者に専用せしむること勿れ、獨り山神を拜し、自己の冥加を禱り、若くは其風光をのみ賞するの具たらしむること勿れ、宜しく皇國幾万の中學々生をして、學術研窮の目的を以て、毎歲開山の期に際し、教師自から先達の役目を躰し、勇壯活潑なる學生軍を引卒し、猛進突貫登山の道を講じ、以て其軀を練り、以て其精神を養ひ以て山岳跋涉の美風を

勃興せしめよ

富嶽絶頂の景

是日天朗にして雲なく、遠望極めて佳なり、左迤して而して行く、導者指して曰く、雄峻奇聳筆格の如き者は信の八嶽あり、偃蹇肩隨而して譎詭の状を角ふ者甲、之駒嶽也、翠嶠削男、簣を覆するが如き者、稜峭孤立、文筆の如き者は信濃の御嶽と越中の劔峰と也、秀拔して而して玲瓏たる者、賀之白山也、其餘髻の如く螺の如く、蠃埵の如く厦屋の如く高下起伏萬重の波濤の如く、魚の水に鬪する如く、鷺の山を負ふ如く、攢簇沓蹙して指名す可からず、而して皆富嶽之兒孫、膝下を環する者、之れに加ふるは涵湖點綴し、水色沉碧、亦一種之觀也、陟降轉回、僂偻して而して行く、一巒突出し、疣を

附くる如き者を、寶永山と爲す、路徐く夷あり、而して左は絶壑、右は陷窪、宛も馬鬣の上を行く如し、足を敬てゝ而して過ぐ、則ち巉巖嶄峭、中間に楷梯して路を通ず、攀ちて而して躋るに、石を疊んで井を爲す、井水瑩徹、掬飲するに凜冽たり、名づけて金銀水と曰ふ、愈よ右すれば則ち大石礪礪、巨石其上に蹲し、嶮立四五丈、岌乎として墮んと欲す、其隙人を通ずる處、僅に尺、躬々容れざるが若し、蝸附して而して往き、龜伏して而して出づ、即ち豁然開明、南方の諸山、雲堆中に胚胎し、其断裂せる處、或は頂を露はし、或は腰を見はし、特に三穗の松林、港に接して而して斜に出で、象の鼻の如く、其洲觜と薩陞山趾と交衽し、浮黛浮蒼翠、縹緲として畫圖の如し、此の際銅佛を列置し、跏趺相望み、頗ぶる目を礙ぐ、足を較し、甚だ厭ふ可し、廻て來路に復す、天風漸く起り、冷々とし

て髪を吹き、眼界天下を小とするの意有り、(天保十年七月中院松島垣先生
登山記事抜萃)

漸く九合目に至るに比び、東方地位既に白し、進んで而して登る、
地纔に坦なり、剛力云、此れ是れ絶頂、曉靄蔽囑せり、危座して而
して俟つ可し焉と、余又古語を援て曰く、此山也、天に邇く都に近
しとは實に然り、然りと雖ども、猶ほ未だ霄を摩するに及はず、請
ふ一層峻挺せし者に踞せんと、剛者止む、少焉にして、東洋紅波を湧
し、飛沫空を塗り、世界皆赤く、蝦夷唐太、勃海朝鮮支那の如き、
皆赤之れを襟帯の間に收め、俯して瞰れば箱根は筐の如く、妙義は
棋の如く、筑波は葉の如く、而して關左の名山皆を脚蹴す可し焉、
是に於て意況恍然、大虚に座し、一地球を小とする之想有り、而るに

世之英雄豪傑、朝爭暮奪、蝸牛角上に於てする者、燭り何の心ぞ哉

(菅竹洲先生單步登嶽記抜萃)

佐野瀑園

富士登山を終りて、猶余暇ある者は、事の序に佐野瀑園に赴く可し、
瀑園は佐野停車場を離る北方十二町餘、園内に五條の瀑布あり、雪
解の瀧、富士見瀧、月見瀧、銚子の瀧、挾衣の瀧等とす旅館は五瀧
館と云ひ、萱葺^{かやふき}の屋根にして冬暖たく、夏涼し、五六年前に洋館を
建築し亦外國客の便を謀れり、園内は瀧の落水溢れ、緑水漾々たる
所、鯉、鮒、其雜魚を放ちあれば釣を好む者には亦一しほの慰みお
り、又月夜舟に掉して涼を納るにも佳し、亦爰を去る廿餘町の富士
裾野には、二町餘の原野を圍ひ、遊客特別遊獵地に撰定し居るとの

ことあれば、冬日遊臘期に至らば兎、小鳥の類を獵する亦自由ありと云ふ、館の近傍には佐の八景なるものあり、然れども何所の八景も文字に寫したる程の妙味あるなし、即ち左に之を録す

景の島秋月

屏風岩の鴛鴦

千福の青田

榮橋の流螢

桃園の櫻花

平松の夜雨

定輪寺の晚鐘

古城の暮雪

* * * * *

日光山の紀行

日光を見なければ結構とは言へぬ、物の結構は日光を見てから言ふことだと、未だ田舎に居つて餓鬼大將をして居るときから、両親に言聞されて居つた、東京へ來てから最早幾年とたつたか、日光を見あかつたから、結構とは言へない身分であつたが、幸に同行を勤

めるものがあつて昨年八月下旬、日は忘れたが、彌々明朝上野發午前五時の瀧車に乗りて出立のことゝ評議が確定された。同行者五人内三人は神保町の古本屋、残り二人は書生上りの、ノラクラ者、何れも勝り劣りのなひ道業者であつた、五人のうちにて年長者は壽泉堂主人曰井佐太郎君とて行年四十三四、妻君は綿密家であつて色々注意をされた、先づ日光は雷が鳴る、俄かに雨が降る、暑いと思へひ寒くなる、寒いと思へは暑くなる、暑中にも霰が降るがやうに言はれたものだから、御亭主殿も万端用意されたものと見へて、翌朝第一番に我輩を起されたときの扮装いでたちを見ると、風呂敷包を西行背負にして、白股引に草鞋がけ、傘を杖について立つた居つた、二三分間には不殘我輩の家に揃ふ筈であつたが、有明堂の主人が來ないから聞かせにやると、午後の瀧車にて必ず行くから一足先きに出て

呉れるとのとあつたから、残念ながら四人にて出立した、旅行の憲法は人力、籠、馬などには断して乗らぬとのことあつたから、上野迄も鐵道馬車には乗らぬいで、御茶の水橋を渡り本郷を抜け上野に着いて五時の瀛車に間にあつた、東海道の列車と違かつて、山や海の景色かちいから別に、外をも見ぬいで、日光とは如何なる所かと、心の中に色々描いて居つた、宇都宮にて乗換へて日光よ着いたのは午前十時三十分であつた、停車場を出るとすぐ両側に各旅店の休憩所があるが、其所には寄らぬいで幾千年も経たりと思へる杉並木の街道をば、右に曲り爪先上りの往還を上つて行くと両側には旅店、料理屋及名物の挽物細工、獸皮、羊羹、繪圖、寫真類を鬻げる家が澤山ある、旅館の名高いものは日光ホテル、新井ホテル（以上外國人向）小西屋喜一郎、神山徳平、會津屋喜平、古橋保平、紙屋半

平、油屋長三郎、大野屋重藏、釜屋喜三郎等であるが其中小西屋は紳士向、神山は上等商人其他は平民的のである、そこで旅客は是等の宿屋に就て其行くべき處を定め或は中禪寺、湯本行の駕籠人力車を雇ひ或は裏見、霧降の瀧に赴べき案内者を雇ふなど皆其周旋を此等の宿屋に托するさうであるが我等は斯の如き上等客筋でもないから、ズン／＼と進行して大谷川の橋迄来て、橋の上を評議所と定めて會議を開いた、或者は直ちに東照宮を拜觀しやうと言ふ、或者は今夜は中禪寺に一泊して歸りかけにしやうと云ふ二説があつたが、後者は勝利を占めたもんだからドシ／＼歩き始めて、含満ヶ淵かんまんに來た、巖石天矯、或は底とあり、或は厓となり、或は特起し、突出して瑰寄百態して居るものに、水が激して虎が吼へて居るやうな聲かして居る、水は紺青の色をして其深きことは幾尋であるか知れぬほど

である、厩淵うけがちには僧の空海が業を修めたとか云ふ古跡があつて、むかふ岸には梵字を刻りつけた澤山の石が列らんで居る、即ち空海が筆を擲ちて現はしたのだと云ふが、余りあてにゐるはあしでもあるまい、二里も来たかと思ふ所に馬返しといふ村がある、爰に休んで中食をして、草鞋をゆめ直し勇を鼓して阪路にさしかゝる、登ると五六町屢々危うき橋を渡り、深澤と云ふ茶屋に來り、爰を過ぎ行けば路は益々峻はしく、劔ヶ峰と云ふ所に着きたるときには滿身汗一はいにて、あか／＼一通りの暑さでなかつた、我輩は夏洋服にて上衣を脱ぎシャツ一枚となつて、何にも手に持つて居るものがあつたから餘程樂であつたが、臼井なやじの親父さんは背後の風呂敷包には裕雨合羽、シャツ其他辨慶の七つ道具を背負つて居るものだから、始終あどにあつて遅れて餘程大義である様に思はれた、我輩は此を見て

夏の山路によ決して餘計のものを持つ可からざることを悟つた、之に引きかえ飯島と云ふ男は、背が抵いが餘程足が達者である、草鞋をはかきいで駒下駄で登り通した、座頭ころがしと云ふえらい阪の近路を上かつて漸く大平おほひらに出る、此所より路は平垣であつて六七町も行くと、左に小經みちがあるから其を辿り行くと、溪間たにまに落つる水の音が轟々と、恰も遠鳴の雷の如くに響いて居る、之か即ち華嚴けいげんの瀧である、中禪湖水の落ち來りて此の瀧となり、更に大谷川の水源となるのである、瀧の全身四十餘丈、其幅八尺嶄巖絶壁から跳つて墜ちて居る其聲は山嶽を震動させて天地も揺り墜さんばかり實に天下の壯觀である、瀧の正面絶壁の中腹には掛け茶屋あつて其所から瀧を望む様にあつて居るが、不幸にして霧が谷を埋めるときには水烟朦朧たるを見るのみにて、其形を認むることが出来まいときもあ

るが我等の到りたる日は好天氣であつて少しも其等の故障物かなかつた、亦瀧の近傍には岩雀とな云ふ鳥か居ると云つたが、我輩の眼には一羽をも認むることが出来なかつた、瀧の名は佛名より來りたるものであると云ふ、此瀧を見物して十町も行つたときに中禪寺の湖水が見へる、樹木空を覆ひ茂りたる下り道を過ぎて、鳶屋と云ふ宿屋に着き、裏坐敷の二階にて一面湖水を見晴す所に案内された茶代や下女の祝義をやるべき額の議論最中にお湯がよろしいとの下女の報告が來たから、一番さきに湯へ行つた、そこで茶代や下女の祝義も烟けむとあつた、四人とも共に湯から上つて別莊のある近傍を散歩し、宿に歸つて鱒の洗い、鰻の蒲焼、鯉こくの膳立に對ひて晩酌を催せんと座りかけると、東京から四人連の客かないかと尋ねて來た人があります、あち方かたのとではありまんかと帳場の番頭が來た

から、若しや有明堂の主人ではないかと一同馳け出て見ると果して同人であつたから大悦で二階へあげた、それから飲む、食ふ、話す、歌ふ、跳る、隣室から小言とがでる、談判が持ち上かる、大騒ぎとなる、夜が更ける、布団をまくる、枕を奪ふ、眠むうとする妨害する、婦人の客が隣に居る、襖間を蹴る、どうどう夜が明けた、其から朝飯をすまし暑くなるといふ中に湯元に行うときまつた、所が犬餉君が俄かに腹が痛くなつてとても行くことができぬと言つた、氣へ出て一人が病氣にでもあると折角の愉快が丸で消へてしまふ、氣の毒千万のことであるが同人を宿に残して四人で湯元へと出かけた宿を出て湖水の沿岸に沿ふて行くこと數町、男躰山の麓樹木鬱鬱たる間を過ぎて、千手ヶ原に出で、湖水と別れて右に入り、地獄門と云ふ恐ろしい川を渡り、地藏堂の茶屋から、川の流について左に

曲ると、龍頭の瀧に出る、其所から二三町も行くと、見渡す限り草
 茫々たる野原であつて、(藥草雜花彌望繡錯細徑綫の如く、鳴蟲人に
 近きて蛩音を畏れず)とでも形容すべき所で、其名は確しか赤沼ヶ
 原とか言つた様に思つた、原を通り過ぎて左に折れ、山林の中に入
 ると亦湖水がある、大さは中禪寺の湖水の恰度半分位、湖水が溢れ
 て大き瀧となつて居る即ち湯瀧である、其瀧の長さは十五六丈もあ
 るだらう、湯湖の沿岸には老樹鬱蒼として覆ひ茂り、巨石怪巖、全
 身蘚を被て、幽邃閑雅を極て居る、右の湖邊に沿ふて進めば即ち湯
 本温泉である、人家大凡五六十戸もあらうか孰れも舊曆四月中旬に
 店を開き八月中旬に店を閉ちて日光町に歸ると云ふことである、此
 地は海面を積くこと四千尺餘もゐると云ふから、舊曆九月以后はど
 ても寒くて居られまいと云ふことである、後は白根山温泉岳嶽を

背負ひ、前は一面藍を流せるとも云ふ可き青き湖水で、寒暖計は
 日中七十五六度を往來し、温泉の湯には総て十ヶ所、河原湯、綴
 子湯、中湯、御所湯、笹の湯、荒湯、鶴湯、瀧湯、姥湯、蓼湯、温
 泉宿は吉見屋、山田屋、板屋、渡邊、清水屋、釜屋、佐野屋、南間、
 米屋の十軒、其中で山田屋と吉見屋が一番廣ひ、亦内湯もゐるが、
 外は大抵往來の傍に板圍をして男女混合の浴場である、我輩の連中
 は朝は五時半より出て八時過ぎに着いて、何の宿屋に行うのしらんと
 迷つたが、山田屋へと入つた、表二階の座敷へと案内されて、茶を
 飲み菓子一つ食ふと、皆ゴロ／＼倒れて眠つた、其筈昨夜は少し
 も眠ないで三里餘の山路を歩いて行たものだから躰の疲れは非常で
 あつた、十時過ぎに湯に入つたあとで、浴衣を着てブラ／＼浴場見
 物と出かけ、二三回も入れ込みの湯にはいつた者もあつた、れ晝飯

後晝寐をして五時過ぎ湯本を出て。火どもし頃に中禪寺の宿屋に歸つて來たが、往き道よりも歸り道の方が餘程近い様に思つた、其夜は病人も亦くあるし我等もいゝ心持に晩酌をすまし、前夜に引かへて終夜れと亦しく皆々熟醉して翌朝四時頃起きて爰を出立した、出立前に茶代云々の議論が起つたが、我輩は今出立間際に差しかゝり茶代を出すか如き愚論には讚成しかかつた、外の四人は早くも出立の仕度をして、逃げ出す様に出て行つて我輩を一番あとに残して居いた、我輩は掃木で塵こみを掃く様な仕打をされたが、議論する譯にも行かぬから表に出て見ると、他の四人の姿は早や見えぬから急いで行くと、五六町さきの樹の陰に待つて何事か話をして居つた、酷でないか我輩一人を残して遁け出すとは、所が困つたことか出來た僕が一番先きに馳け出したのだが、汗染みたシャツに三四圓もは

いつて居る蝦蟇口を入れて、風呂敷で包むで置いたのを草鞋をはくときに店先さよ忘れて來た、そこで今取りに行くのがキマリが悪るし閉口し奉つて居る所だ、天罪は畏ろしい我輩を一人残して置くもんだらうら、すぐと君にさういふ事件が湧きでる、三圓位は茶代と思つて行くがいゝじやないかと言へば、飛んでもないと頭をかきながら取りに行く、其人の心中れしはかられて氣の毒であつたが、之れ亦旅の一興味であつた、それから裏見の瀧を見て日光町に歸り、小西屋に一晩泊まつて翌日東照宮を拜觀し始めて結構なる言葉の應用を知り、夜瀛車に乗つて東京に歸つた

過去の日光街道

十三、間雨間霽、鷄鳴に發す、前夜宿 于箱壁 籃橋伊軋、忽ち睡り忽ち覺め、

東も亦漸く白し、堤に循ふて而して行く、堤外は即ち利根川あり、時に帆檣を見る、栗橋驛に抵れば、關津有り、是れを武總の界と爲す、關南ある伊坂村に、靜女の墓有り、老杉輪囷、大さ七抱、高さ九仞可り、枝條旁午鬱蟠し、中身科空あり、試みに其根を鋸して之れを嗅ぐに、氣烈し、蓋し六百年外の物。既にして杭渡す、中田驛たり、驛北に光了寺、即ち靜女香華の處、舞衣一領、議身刀一口、馬鎧一雙を藏す、舞衣は紺色の絹にして、肩背に日月七星、蓬萊の雲鶴を繡す、傳へて後鳥羽帝の賜ふ所と爲す、然否を審にせず、刀は銹澁甚だしく、鎧劔は全木をもて之れを爲る、材楓に類す、蓋し武藏鎧と稱する者、傳へて以て源豫州の物と爲す、疑ふ可し、寺は舊、伊坂村に在り、後此に徙す、驛東、迂路して大山村に入る、香取祠有り、古櫻大さ六抱、舊幹顛仆し、藁已に抱可り、

傳へて平將門の第四子傳眞の手植と云す、古河驛東に、鮭延寺、備人熊澤蕃山の墓有り、繚らすに石欄を以てし、碑面に熊澤息游軒伯繼之墓と題す、側に一碑有り、息游軒妻矢部氏之墓と題す、共に筆法勁雋なり、驛の北を總野の界と爲す、間田驛に宿す、薄暮雨點じ、夜露れ、月、朦朧たり、

十四、曉に發し、小山驛に抵る、驛北に小山判官の故據有りと聞き、土人を賃して導を爲さしむ、隴畝の間を穿てば、邱樹の鬱然たるを見る、前陔に後峻く、敗溝、水無く、殘壘に老松茂密、之れを望むに馬鬣の如し、内城最も高く、頂に鴨脚樹有り、高さ七仞に餘る。余近づき觀んと欲するに、荆棘、蹤無_ミす、導者挺を執て、左右披拂して而して前む、余二生と之れに躡して遂に登り、更に其大を試みんと欲す、導者阻むて曰く、樹身の枋空ある處、蛇蝎の

窟と爲る、邇づく可からずと、乃ち賚らす所の火繩を聯結し、逼つて而して之れを圍むに、長さ二丈餘を得たり、邱北は斷崖崢嶸、迅流其下を過ぐ、思川と曰ふ、源は鶴鴛山に發す、西南に流れ、栗橋に至りて利根川に入る、邱東は稍平なり、傳へて廢園となる、巨石有り、榛莽の間に臥す、凡そ七、皆奇狀を異にす、其中に扁然平正ある者有り、袤五尺、廣二尺、厚さ一尺に餘り、質極めて堅緻、青鐵色にして紫斑一點の蘚苔を受けず、碑材に中つ可し、聞く、城、天正二年七月七日を以て陷る、故に土人、今に至るも星夕に讌を擧げずと云ふ、宇都宮驛に抵りて宿す、土素之郷たり、其父邀ひ請し妻と子女とを見る、饌頗ふる豊かり、又藩人松下周輔來候し、話すること半夜、亦旅中の一適也、是日陰翳、晩に雨ふる、

十五、陰、路岐して二となる、東は奥州、北は日光、東鯨驛に抵る、山三面を圍み、雲冉冉として岫を出づ、余佇立して之れを久看し、乃ち謂ふ、雨山は皆な雲、山見る可からず、晴山は雲無く、山、態を成さず、但だ雲烟流動、倏ち顯はれ倏ち隠れ、始めて活景と爲る耳と、大澤驛に抵る、聞く、北に入ること三里、絹川となす籠巖なる者有りと、因て迂路して往て觀る、平原を經る者二、大谷川を涉り、又一原を經、大渡驛に出で、絹川を得たり、兩岸は磐石疊出し、高さ者は厦屋の如く、平ある者は牀第の如く、隆起する者は象背の如く、中陷する者は舢艫の如く、縱横亂整、各其態を逞ふす、是れを籠巖と爲す、溪水其れが爲めに盤束し、奔放して龍蛇の勢を成し、衝激して雪を須く、溪北に三螺髻を見る、月山と爲し、釋迦峰と爲し、鷄嶽と爲し、溪西に紅葉爛然たる者

を關迦擲山と爲し、景佳なり、乃ち縮遠鏡を出して之れを望み、徘徊、刻を移して今市驛に出づ、薄暮日光山に至り、法王の殿廡に寓す、是夕月朗に、溪聲淙然たり、

(佐藤一齊先生日光山記節録)

日光山紀勝

日光之北、山は越に連あり、東は奥に接し、重繞幟嶮、窮極有るこ
と靡し、而して明湖大瀑多く、之れに加ふるに巖石嶮絶にして、涓流
細泉も亦皆を觀る可く、實に天下之名區たり焉、舊誌を按ずるに、
天平神護之際、僧勝道、始めて停錫し焉、榛莽を剪て堂宇を構ふ、當
時纔に創建、後ち爭亂相踵ぎ、未だ甚だしくは顯はれず、降りて元
和に及び、釋慈眼、舊趾を仍て之れを恢にす、號して中興と爲す、

而して適ま列祖之壽函を此に徙し、天造地設之勝に因り、而して天
下土木之功を竭す、是に於て善美盡さざる無く、而して古刹山祠も
亦咸か其餘光を蒙らざる莫き也と、盛なりと謂つ可し矣、蓋し聞く
古者此山、毎歲春秋二次、必ず洪飈を起せり、故に二荒と名ぞく、
弘仁中、釋空海此に登り、易ふるに今の字を以てす、蓋し邦音相近
ければ也、爾後絶て風害無しと、是れ怪誕信するに足らずと雖とも、
然れども列祖神武を以て、禍亂を蕩平し、民の塗炭を免るゝと猶ほ
雲霧を披て而して白日を見る如く、率土照さざるなく、而して神魄
遂に此山に歸す、其れ孰か仰望して而して拜觀せんと欲せ弗ん、其
名を得る豈に偶然ならん哉、予、都門に寓すると三步、嘗て一たび
登らんと欲して、而して未だ果さざる也、辛丑之秋、殘熱蒸鬱、委
頓して業を廢す、忽ち日光之遊を想ひ、之れを同窓の中耕齋に訂す、

耕齋は浪華の人、性、山水を好む、躍然として共に往んと請ふ、乃ち七夕の後朝を以て發す、日たる旬有六日にして而して還る、都より山麓に至るまでは復た記するに足る者あり、而して闕宮之壯麗、及び山中の諸勝は、摘んで而して之れを記し、餘勇、遂に筑波霞浦に及んで、亦之れを記し、分て十二篇と爲し、以て他日の臆念に供ぬ、且つ未だ遊ばざる者に告ぐ

馬回溪

七月十三日、日光山麓に抵りて、逆旅に投じ、主人に商るに闕宮を拜觀するの事を以てす、主人曰く、中元の前後三日、例、廟門に入るを許さず、十七日を待つに非れば、不可なりと、是に於て先づ山中の諸勝を探らんと欲し、翌朝輕裝し、行くと二里許り、黃茅數茨畦多く大麻を種ゆ、是れを馬回之邑と爲す、險其名に稱ふ、銅華表

有り、巍然として溪濱に建つ、怪石譎詭、奇醜百出、水其間に錯流す、水流れんと欲し、而して石の逆打する所となり、湍險激怒し、雷吼龍踊す、而して兩岸之山、刻削對峙し、岩石倚疊、拆裂して崩れんと欲す、溪上兩木を架し、柴を其上に布き、以て橋と爲す、水勢奔逸、橋兀々として搖く、俯して之れを窺ふに、水紺青色を爲す、或は碎けて雪の如し、橋を過ぐる者二、地藏堂有り、徑、廡下を通ず、此れより廿六七町、危峻極めて甚し、詰曲して而して登るに、每曲踞息して汗を拭ふ、山を下る者も遇ふ毎に、輒ち前路の遠近を問ふ、忽ち棧道を得、右に二瀑の對懸するを見る、小なる者を方等瀑と爲し、大なる者を般若瀑と爲す、合流して棧下に至り、淙々として聲有り、指顧之際、棧之危きを覺へず、遂に不動堂に至る、是れを絶頂と爲す、是に於て馬回之險始めて盡く矣

華巖瀑

不動堂を過れば、則ち路坦夷にして砥の如し、岐有り、榜して華巖
 瀑と曰ふ、榜に循ふて而して左す、林木疎冷、石松○に寄り、長さ
 或は四五尺、樹之古知る可し、忽ち瀑聲轟く如きを聞く、魂飛び足
 躍り、進んで山背に至る、對岸之山、巨瀑懸る焉、而して長さ僅に
 瀑身三之一を見る、深艸中に一徑を得、纔に通行す可し、急に擔を
 擲ち、石角を擇んで趾を投し、却歩して而して下る、後人之足、正
 に余が頭上に在り、山腹に至て路窮まる、乃ち胸腹地に貼し、手樹根
 を抜き、頸を延して之れを眺、始めて瀑之全身を観る、直下五十丈
 可り、聲勢地を震ひ、破碎鬱優、雪之崩るゝ如く、絮之漂ふ如し、
 瀑之両崖は、皴巖壁立、積蘚之れに被り、綠潤濯ふ如く、瀑底は石
 出でて水怒り、而して榛莽遮蔽し、其委流を窮むる能はず、余嘗て

中禪寺

聞く、瀑邊毎に雲垂れ烟接し、罕に其全を観る矣と、此日晴豁復片
 雲寸烟無く、白日映徹して、輝光煥發し、以て其全觀を盡すことを
 得、留賞、唇を移して而して去る、四邊に楓樹多し、葉皆七出、霜
 紅想ふ可し、山端に隨ふて而して行くに、離樹交蔭、水其下を行き、
 緩流清淺、極めて幽致有り、是れ華巖之源にして而して補陀洛湖之
 尾也、水に沿ふて中禪寺に抵る

中禪之寺たるや、男躰山を負ひて、而して補陀洛湖に面す、其山た
 る極めて高し、蓋し宇都宮より、日光山麓に到るまで、足指皆仰ぐ、
 中禪又山麓より高さこと幾百尺、而して男躰更に特立して天を摩
 す、山頂に祠を置く、是れを日光の奥院と爲す、寺より頂に至るまで
 三里餘あり、寺の背に磴有り、垣を施して攀躋を禁ず、特に許して

七夕を以て登ると云ふ、湖、東西三里、南北一里、島有り、上野島と曰ふ、水、澄澈して底を見る、而して寸魚を生せず、余險を攀ちて勝を貪りしを以て、中禪に抵るに比び、日落ちて疲れ甚し、因て寺僧に請ふて其湖亭に宿す、亭は湖に架して而して立ち、彌望淪漪、寺崎歌濱之勝を烟雲縹緲の間に望み、飄拂變幻、首露尾隱、鳥聲虧々、全境間寂、人界に非るかど覺ゆ、晩間冷甚だしく、被を擁して而して睡る、覺むれば則ち大月天に在り、窓紙書の如く、湖光益す清遠かり、嗚呼檐を層嵐疊緑之裡に弛め、而して併せて湖月之勝を領す、實に人世屢ば逢ふ可からざる者、宜しく耽視して厭のざるべし、而して疲憊之餘り、一睡して遂に曉に徹す、

湯 本

藩醫、田榕庵、嘗て余に語りて曰く、日光に躋りて而して湯本に抵

らざれば、未だ其勝を盡せりと爲さるる也と、中禪、山麓を距る既に三里、湯本は更に中禪之西三里に在り、而して遠さを加ふ、十五日、補陀洛湖に沿ふと里許り、溪を渡る者二、漸く湖と別る、又行くと一里、夷曠濶闊、是を赤沼原と爲す、藥艸離花、彌望繡錯、細徑綫の如く、鳴蟲人に近づきて蛩音を畏れず、原を過ぎて左折し、山林中に入る、忽ち湖を獲たり、大さ補陀洛湖に半し、而して硫黄の氣蒸す如し、蓋し地に温泉多く、滙つて此大湖と爲る也、湖溢れて巨瀑と爲る、俯して之れを窺ふに、榛莽四塞、底見る可からず、蓋し亦十四五丈ある可し、湖上は老樹鬱蒼として、仰で日華を見ず、巨石怪巖、虎踞豹蹲、全身蘚を被むり、陳葉堆積して、墳壤趾没し、此に至て幽遠極まる矣、湖首は即ち湯本温泉、領ふる治験有り、湯槽凡そ十二、板を以て之れを造り、每槽方九尺、屋して而し

て之れを、庇腥臭鼻を衝き、亭を構ひて客を留むる者九戸、主人曰く浴佛日を以て來り、重陽に至りて而して去る、冬自ら春に徂く、沍寒にして居る可からずと、余浴を試みんと欲せしに、主人曰ふ、一浴之後、衣巾復た用ゆ可からずと、乃ち止め、主人に質すに龍頭に至るの路を以てして而して去る

龍頭瀑

龍頭瀑は、湯本と中禪との間に在り、右迂して支徑に入ると五六町、榛蔓蕪穢、行き易からず、板屋に烟を生ず、就て之れを窺へば、唯だ老樵一人在り焉、因て瀑之所在を叩く、老樵答ふるに知らざるを以てし、且つ曰ふ、此地概して龍頭と名づく、山下は水石湍險、蓋し所謂龍頭之瀑ある者は是れ歟と、嗚呼老樵、親しく其地に居り、漠然其勝爲るを知らず、吾儕、山水を跋渉し、幽を探り奇を求むる者と、

何ぞ其れ霄壤あるや、直ちに水聲を趁ふて而して前む、荆棘鈎牽し、動もすれば血を見、林木老杉にして、援けば輒ち折る、刀を脱し、笠を卸し、巾を以て帕首し、偃木に蒲伏し、即ち瀑上に至る、巨巖溪を專にし、頂濶くして脚長く、上流清淺なり、是に至て輒ち陥る、巖に坎多し、水躍つて而して入り、激して而して出で、輾轉突怒す、亦一の勝觀也、然れども是れ特に溪流の奇なる者にして、其實、瀑と名づく可からず、但だ其奇狀異態、諸勝中、指を屈するに堪へたる者なり、此に櫻樹多し、是れ華巖之楓と、皆瀑邊に少く可からざる者、而して一時併賞すると能はず、況んや此行秋猶淺く、楓も亦未だ染まらず、憾む可き已、遂に馬回之險に下り、華表外の茅茨に宿す、山泉庭に通じ、終夜潺々として聲有り、冷甚し、

荒澤瀑

既に奥僻之秘を究め、遂に荒澤及び寂光含滿を探らんと欲し、老媪に問ふに其路を以てす、媪、山端の一老松を指して曰く、是れ荒澤に抵るの路也と、乃ち林を穿ちて而して入る、馬糞牛跡、動もすれば、將に滾躓せんとし、拔步甚だ謹む、胡枝黃茅、雜錯して人を沒す、既にして而して溪聲を聞き、謂へらく、是れ荒澤の委流、瀑を距る必ず遠からずと、岐に臨んで左に就きしに、漸くに溪聲を失ふ、余曰く、瀑を探ぐる、宜しく溪に沿ふて而して遡る可し、今ま溪を距る既に遠し、恐らくば瀑に至るの路に非ず矣、耕齋曰く、然りと、還つて右路に就けば、一溪、前に横たはり、柴を編みて橋と爲す、踏めば則ち趾を濕らす、榜して荒澤瀑と曰ふ、之れが爲めに心降る、路艸、露を被むり、襟裾皆濡ふ、前んで瀑之右に出づ、此瀑、背を觀るを以て顯はる、故に又裏見瀑と瀑ふ、巨巖高聳、瀑其頂より落つ、

巖腹空虚にして洞を爲す、余下り觀んと欲す、泉滴清冽、足指墜んと欲す、石を踏みて蛇行し、遂に巖腹瀑背に至る、玉簾中に坐する如く、偉觀頓に倍す、下は不測に臨み、危甚ふして而して奇も亦極まり矣、愛撫之れを久ふして乃ち去り、遂に溪水と別れ、行くと半里強、鯨邑に至る、

七 瀑

鯨邑を環つて而して其背に出づれば、四山重繞、萬翠交も滴たり、聞として人籟なく、松檜排列し、磴道盤廻、梵磬之聲、山谷皆應ず小刹有り、呼んで寂光と曰ふ、常念佛老衲居る焉、因て七瀑及び一瀑、何地にあると問ふ、曰く、七瀑は近く堂背に在れとも、一瀑は則ち此を距る頗ぶる遠く、而して榛棘叢生、行く可からずと、予之れが爲めに瞠然、乃ち堂背より磴を攀づ、攀ち窮まつて復た下れば、

右に瀑を仰ぐ、瀑は七層たり、名を得る所以也、每層長短齊しからず、全身は修織約して二十丈、樹瀑上に蔭し、瀑其間より下る、一大白龍、雲を蹴て而して降るが如く、境清祁寒、久しく居る可からず、相誘ふて而して去る、

含 滿 潭

含滿潭は、大谷川を隔て、原街之後に在り、橋を渡りて川に沿ひ、行くと二百武餘、梵宮蕭洒、是れを慈雲寺と爲す、潭は其寺境に屬し、寺を過ぐれば則ち潭あり、巖石天矯、底と爲り、厓と爲り、或は特起して突出し、瑰奇百態、水勢激觸して怒吼之聲有り、其色紺青深さ測る可からず、石の低缺ある處に至り、輒ち傾瀉し支ふる能はず、銀河を倒す如し、而して又平湛淵渟、流るゝ能はざる如く、遂に下りて潭に入る、余耕齋と石上に對踞し、大喝して快と呼ぶも、

惟だ唇の開くを見て、其聲を聞かず、潭に臨んで護摩壇有り、四柱にして壁無し、云ふ、僧空海、業を修めし處と、對岸之石に、一大梵字を鐫たり、亦空海、筆を擲ちて現はせし所と、荒誕據るに足らず、含滿或は憾綸と呼ぶ、其說既に一齋翁の記中に詳しければ、今復た贅せず、山西之勝は是に盡く矣、

霧 降 瀑

日暎す、山麓の逆旅に歸る、未だ鞋を脱するに及ばず、一人胥議し、更に霧降之瀑を探らんと欲す、是に於て圖を案じ路を檢するに、凡る二里餘可り、乃ち稻荷川を渡り、律院を歴て小倉に至る、一亭東向す、法王遊憩之處と爲す、眺望疎豁、最も春曙を以て著はる、是れより徑細きと綫の如く、秋影幽麗、澗水奔注し、四顧皆な山、徑漸々にして而して登り、終に絶巔に至る、溪を隔て、瀑を得、魂定ま

り、神安んじ、宿憊頓に癒ゆ、乃ち踞して息ひ煙を喫す、左は則ち層阜複巒、累積蜿蜒し、而して東南は山缺け、宏敞荒遠、峙つ者流るゝ者、夷なる者隆き者、歴々眉睫之間に萃まる、實に望外之觀也、乃ち蛇行して山を下る、傍ら溪谷に望み、樹木交加し、墜露聲有り、一滴、頂に沾せしに、遍身寒厥、潤石倚疊、之れを踐めば則ち轉ず、跣歩戒めずんば、輒ち魚腹に葬らる、遂に瀑底に至る、仰いで之れを視れば頂甚だしくは廣からず、巖凡そ五層、每層の幅員倍蓰し、趾殆んど十四五丈、高さ亦三十丈可り、水、巖に貼して而し下る、綱目を張る如く、滿巖皆を水迸散激射し、飛沫霧の如し、其名誣ひざる也、余以爲らく華巖は正にして而して壯なる者也、荒澤は變にして而して奇ある者也、奇にして而して壯なる者は霧陰也、而して其壯と奇と、亦各異狀殊態、故に日光の諸瀑、愈よ看て而して愈よ

厭かざる也、是に於て日光山之勝既に盡く、昏黑逆旅に歸る、

閼 宮

十七日、晨起盥嗽閼宮を拜せんと欲し、出でて大谷川に臨む、橋其上に架す、朱髹金鉸、支ふるに石柱を以てす、堅好比無し、欄を繚らして往來を禁じ、更に其傍に橋し、人馬皆な焉れに由る、磴道老杉之間に通じ、右は則ち法王の宮殿、左は則ち幕府の館趾、十中央に石華表有り、高さ二丈七尺六寸五分、徑三尺五寸、筑前侯長政の献創なり、扁して東照大權現と曰ふ、後水尾帝の宸翰なり、入て而して左す、五層の浮圖有り、高さ十七間二尺、金碧を鏤刻し、其精を極めたり、酒井侯忠勝の献創あり、是に於て麻衣裳を着け、跣して而して石階を攀づ、仁王門有り、左右の外面に巨丈夫對立し、内面には二犬蹲踞す、榎栴は龍虎竹菊を刻す、門の東西、外屏、各

三十間、此れより以内、瓊壁にて道を爲る、神庫三棟、分ちて上中下と爲す、曲折相接す、方木を積みて、之れを爲る、甚だ偉麗なり、花木鳥獸を刻す、就中上庫の梁間ある牝牡黑白の二象、凜々として生きたる如し、神廡、馬、常には居らず、廡の西に額盤、凹みたる全石にて之れを爲り、水、石底より湧く、銅屋石柱、製頗ぶる奇、肥前侯勝茂の献置なり、額盤の前に銅華表、高さ二丈、葵章五を鍍す、又石級を攀づれば、右に朝鮮貢する所の洪鐘を置き、左に和蘭貢する所の燈臺を置く、并に奇古、皆を屋して而して之れを庇ふ、又更に左右、鐘鼓の二樓有り、頂狭く趾豊よ、壯麗を窮極せり、又石階を、攀づるに樓門を得たり、扁して陽明門と曰ふ、亦後水尾帝の御書あり、扶欄の間、人物禽獸草木花草を刻せり、悉く具はら弗る莫し、左右に衣冠を着け弓矢を挟む者有り、之れを隨身と謂ふ、

而して内面又青赤の風雷二神之像を置き、檐角の四隅に金鈴を掛く、口徑盈咫、其精緻巧麗なる、蓋し日力を窮むるに非ざれば細視す可からずと、故に又日暮門と曰ふ、遂に前んで唐門に至る、兩楹には升降の二龍、及び梅竹を鐫り、填むるに他木を以てす、楹上は横さまに十哲七賢、及び鳳凰狻猊を列刻す、凡る門扇は皆全板にて之れを爲る、而して此れは特に梅竹牡丹を刻し、頂格は金質、二龍を墨描す、狩野探幽か畫く所あり、筆蹟超妙にして生色有り、門之東西内屏にて閩宮を圍む、屏上には花木禽鳥を刻し、下には波浪鱗魚を刻し、中間は則ち菱孔空櫺、屏外は廊廡環繞す、乃ち門に入て蕭拜す、蓋し聞く唐門の内は貴顯と雖とも、法、常入するを許さず、而して我儕陪臺、私に入て拜するを得、其賜たる大かり矣、而して神威咫尺、金碧煌耀、瞻儻目眩、仰視すると能はず、是を以て其嚴傑

華麗、得て記す可からず、其他護摩神樂の二堂、及び輿庫輪藏、皆な鉅麗、一々に詳記す可からず、諺に曰く日光に躋らざれ者、未だ輿に天下輪煥之美を語るに足らずと、信なる哉言也、凡そ闕宮所用の異材珍木、多くは蕃舶の齎らす所、而して天下之巧匠良工を鳩め以て造營彫鏤之精を極む、悉く神に入らざる無し、殿廡門屏、屋皆な銅瓦、陛欄柱楹、朱髹に非れば則ち烏漆、澤々として鑑す可く、釘鉸皆な漆するに金銀を以てし、五彩奇靡、堅緻精巧、畫も摸する能はず、口も言ふ能はず、嗟乎列祖、奕世紹述、治化實に覃し、我儕吟咏放浪、以て歲月を卒ふる者、果して誰之恩からん哉、今一たび其廟門に入るを得たり、其れ隻辭の以て贊述する無くして可からん哉、是を以て敢て自ら僭逾を忘れ、而して僅に其概略を記すると此の如し、(大村相陽先生稿)

掃よせ集

幽遠隨筆

○酒買ふ錢を酒手といふは酒代さかてなり、代の字舊事記日本紀などに「て」と讀めり、

○物に驚くを「さもつぶす」といふ、清少納言松島の記に「こころぎもつぶるゝやうに」と云ふ、喪膽と書く

○若き人々のうちむれ徘徊するをゾメクと云ふ万葉に
ますらはは友の驂あまきになくさむる
心ぞあらむ我ぞくるしき

○女かをと「なぶる」と云ふ、日本紀通證曰遠來狎觸之義男女相戯キヨライ
曰「奈夫留」云々

○世俗物を捨つるを「ほかす」といふ古き言葉あり、
れちくぼ物語に「いかに寒からんとのたまへば、」北の方、常に着せ
奉れど、ほかし及ふにや云々、

○うじくするといふ俗言は虫々うじくすることあり、虫の動くやうにと
いふ之虫をうじとよむ、

○「しどけなき」といふ事は書物などかき寫してのみ四度び校合せざ
れば見落しどもあるにより物事綿密をらざるを「しどけなし」とい
ふ之しどけなきとは文字に四度校なしとかくよし

○物を「ちやうど」よしと云いは長^〇度よしと書べしとぞたけのりよ
しといふ

○俚語に昨夜を「よんべ」といふ万葉に

あまさはり常する君は久くの

よんべの雨にこりずけんかも

○近く寄れちといふを「こちこち」と云ふこちは近くなり

遠近おちこちといふにて知るべし

○「かしましき」を「やかましき」と云ふ長明四季物語に御社のうちの
ほどり。かしましきにと云々

○蓮を「はらす」といふと故なきにあらす蓮の實のぬけ出でたるあと
蜂の巢に能く似たる故はちすといふ

○今俗間に深窓に養ひかしく娘を箱入むすめと云ふは竹取物語に
竹取の翁かくや姫を竹の中に得てうつくしきこと限りなしいとれさ
かければ箱に入れて養ふと云々今の世に箱入娘と云ふ是

○いろはの中のつ文字は川也かたかなのツとかけるも此畧なるべし
万葉第十八家持歌にあがまつ君がといふを「安我末川君我と書けり

續日本記第十五尾張の連濱主表の中にのせたる歌にも「たてまつるといふを多天萬川流とかけりと云々

○或人云世俗キヤツメと云ふは桀紂メといふ之桀紂の無道をさして人を罵るとばせと按ずるに此説あまり甚だしき説ありサヤツと云ふことは枕草紙に早苗とる女の里謠をいへる所に「郭公よたれよかやつよと云々此かやつ則キヤツといふとばへかどキと通いにしへの俚語あり

○世俗の兒語に魚をト、といふ是韃韃の語也

○俗に亡命を「カケオチ」と云に欠落の字を用るは古昔敗軍の士を落武者落人と云たるによれるなるべし此落の字は史記鄭當時傳に兩人中_{コロ}廢_ン家貧_ニ賓客益落_ツ、註_ニ落_ハ猶_ニ散落_一 (撈海一得)

○洒を盛る「てうし」は注子の轉せるかり拾遺記に元和の間謂_ニ之_ヲ注

子_一即ち今の銳子あり

(全 上)

○神様に「かしわで」と云ふ、按に魏志の東夷傳に曰く、倭人見_ニ大人_一所_レ敬_{スル}但_タ搏_レ手_ヲ以_テ當_ニ跪_ニ然_ラは神様の「かしわで」は上古より日本の習ひなれば深き譯のあるべき筈を、搏_○と拍_○とは字音相通す (全 本)

○人に答ふるに「あい」と云ふ、阿唯の字あり、老子道德經に曰く、唯_○之_○與_○阿_○相_○去_○幾_○何_○、註に唯と阿と遲速少しく異ると、集韻に阿は慢_○く應_○ふるの聲と云ひ、唯は論語曾子の答に唯と云ふ、曲禮に先生召_バ無_レ諾_ト唯_ト而起_ト、 (全 本)

○兒女の遊戲に「目かし」と云ふ事あり、是れ唐より來る、致虛雜俎云_フ、明皇_ト與_ニ玉直_一、恒_ニ於_ニ皎_ニ月下_一、以_テ錦_ノ帕_ヲ裏_レ目、在_ニ方丈_ノ内_ニ相_レ捉_レ戲_ル、謂_ニ之_ヲ捉_レ迷_レ藏_ト即ち我國の「めかくし」あり、

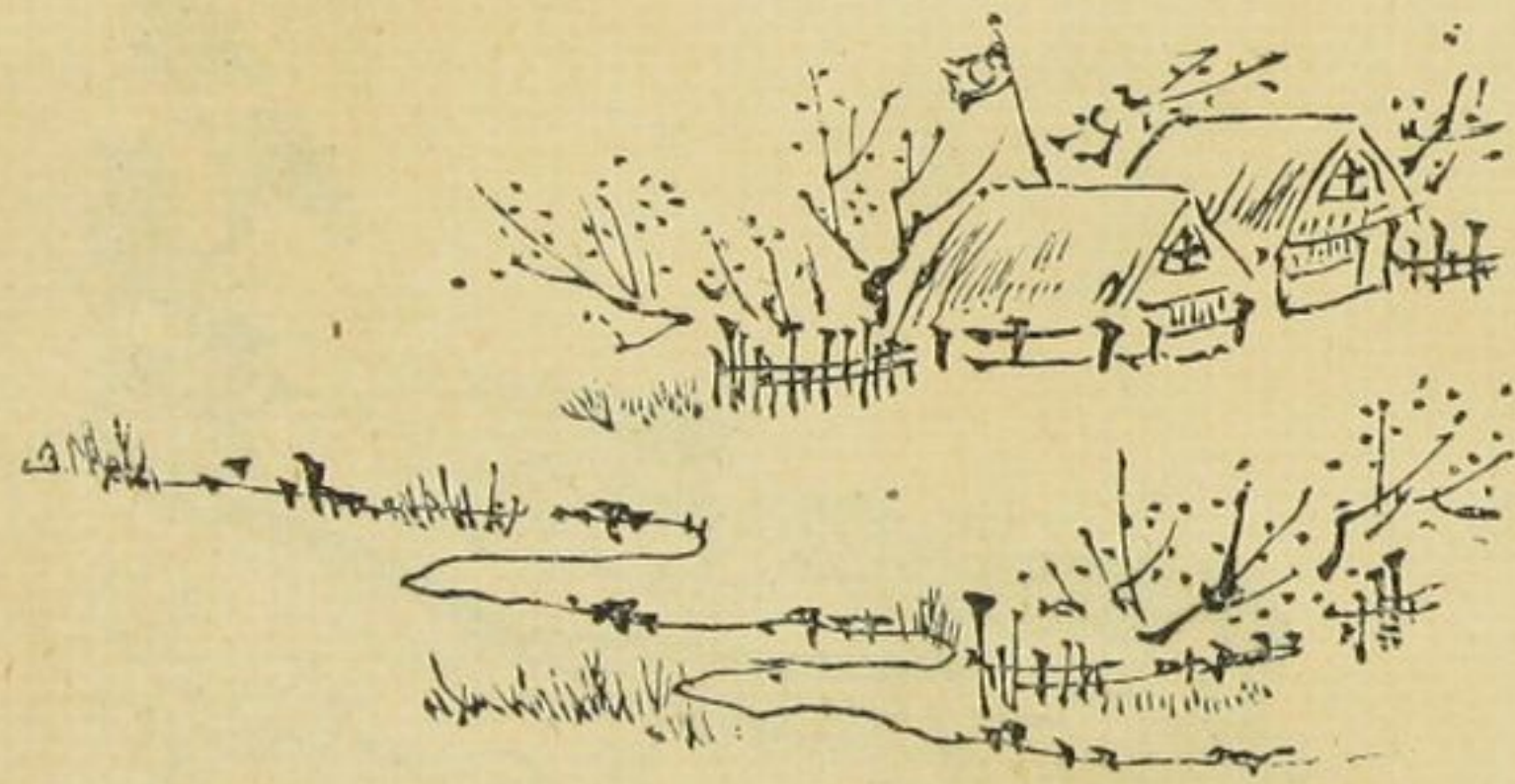
○婦人の名を呼ぶに阿の字を冠す、お花、お政、お竹の如し、之れ
數百年前より始まることなり、太平記に高師秋堂乙菊亭殿より
し女を奪ひしことあり、其名を阿才と云ふ、亦清にても女を呼ぶに
阿の字を付くと云ふ、日知錄に 隨獨狐后謂雲昭訓爲阿雲今
閩卷之婦亦以阿ヒツサク挈ニ其性ヲ也と

○水涯船を繫く所を「かし」と云ふ、「詳柯」の字なり倭名抄に詳柯を
「かし」と訓して康韻の所ナ以テ繫レ舟ヲ也と白石の東雅に「かし」と云
ふ訓不詳今は河岸の字を用ふとあり、

○俗に「うる程金を持つ」と云ふ、五雜俎に五代の袁正辞積テ錢ヲ
盈レ室ニ室中常有聲如牛人以爲妖勸其散積以テ禳ヘ之、

○今人母親を呼て「かゝさま」と云ふ、是「家家」の字なり、通鑑陳
の宣帝紀に曰く、北齊の後主泣啓ス太后曰ク有レ縁復見ヘ家家ニ

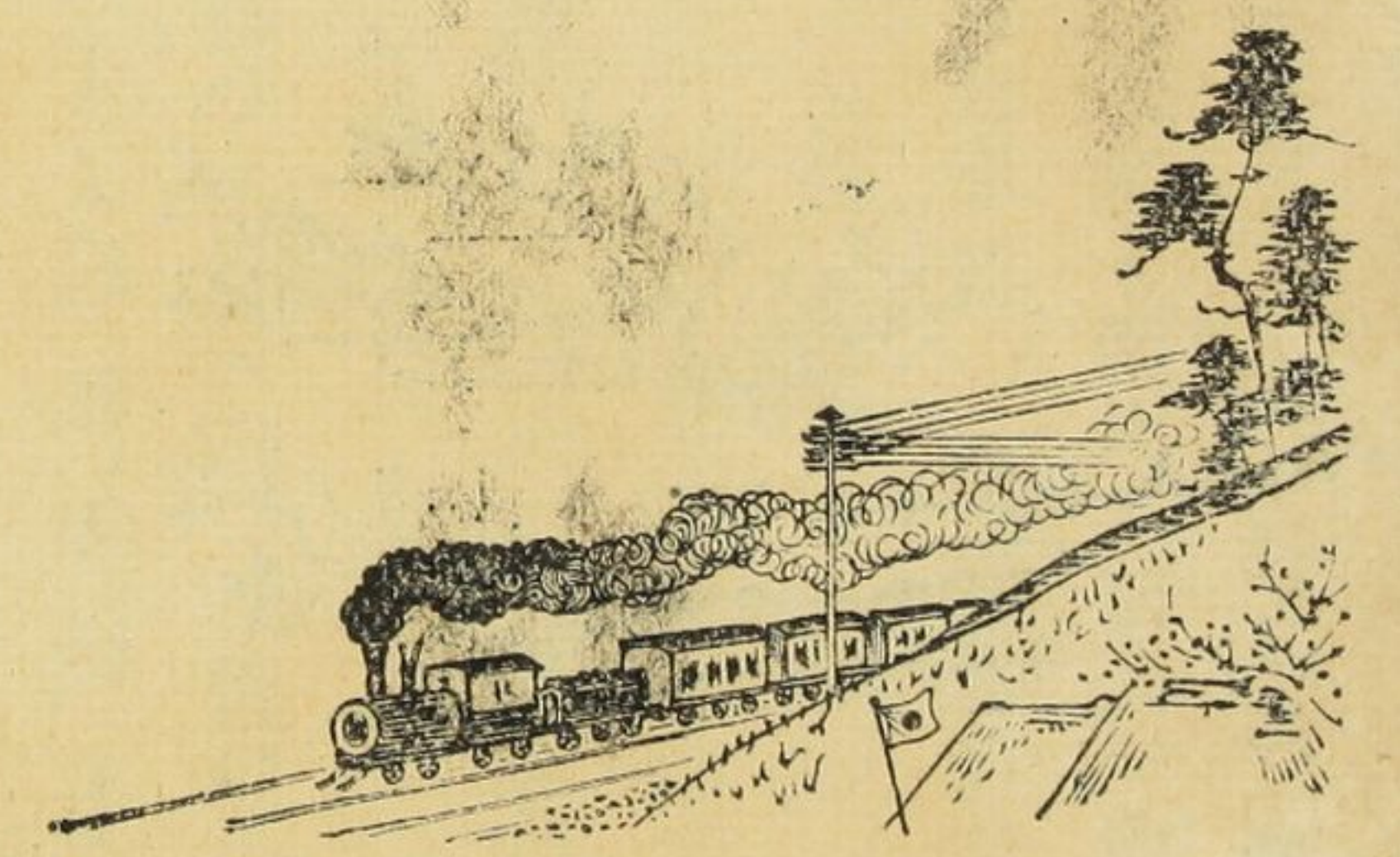
無レ縁永別レといつ頃より言ひあしたるにや詳ならず、其子母親
を呼て「かゝさま」と云ふより父も妻を呼て「かゝ」と云ふ、



英詩
譯釋
蝶
醉
蜂
狂



綠
陰
泉
響
終



蝶 醉 蜂 狂

BLOSSOMS.

惜 花

Robert Herrick

ロムルトヘリック作

蝶 醉 蜂 狂

(1) FAIR pledges of a fruitful tree,

Why do you fall so fast?

Your date is not so past,

But you may stay yet here a while,

To blusk and gently smile,

And go at last.

- (2) What! were ye born to be
 An hour or half's delight,
 And so to bid good-night?
 'Tis pity nature brought ye forth
 Merely to show your worth,
 And lose you quite.
- (3) But you are lovely leaves, where we
 May read how soon things have
 Their end, though ne'er so brave
 And after they have shown their pride,
 Like you a while, they glide
 Into the grave.

- (1) Fair pledges of a fruitful tree!——結實纍々たらんとする樹の好
 保證! 蓋し花葩の多きは果實の繁からんとする前兆なり、故に云ふ、
 もつとも花に二種あり、食ふべき果のなる樹の花を blossom と名け、
 食はれざる果のなる樹の花を flowers と名く、"Once in the year...
the leaves come out, and the blossoms on the fruit-trees and flowers,
 and the grass and the corn spring up" などいふが如し、此には
 Blossoms と題するを以て特に果樹の花を指すなり、櫻桃の如きも
 此の傳にてヤハリ blossoms なり、例へば櫻花を cherry-blossoms と
 言ふが如し、
 Why do you fall so fast?——爾は何とて然か速かに落ち去るぞや、
 是れ落花を惜む也、
 Your date is not so past.——爾の齡は未だ然か邁まざる也、爾は尙

甚だ若し、

But you may stay yet while.——尙暫く此土に留まりて可なり、But は輕き翻對を表す、

To blush and gently smile.——是れ花を以て嬋娟たる二八の嬌態冶容に譬へたる者とす、尙暫らく麗顔に紅を潮して羞ぢ、(blush) 嫣然として微笑を丹唇に洩して (gently-smile) 可なり、「可憐妍艶正當時」須らく今少し長かるべし、

And go at last.——而して終(つひ)に逝けよ、残り惜きことの極なれども復奈何ともすべからざれば也、

(2) What!.....good-night?——吁嗟! 爾は僅々一時間若くは半時間間の快樂たるべく、而して忽ちに別を告ぐべく、(to bid good-night) 生れたりしや、唐人の所謂

明日來應盡 林間宿不歸

は正に是れ此惜花の情の極めて切なるを實際に現出せる者ならざらんや、

'Tis pity.....lose you quite.——天地が單に爾の貴き (worth) を示す爲め、而して爾を全く失ひ去るべく、愁ひに生み出したるこそ却つて恨みなれ、

(3) But you are lovely leaves, where we May read, etc.——花に對して無常を觀ず、正に是れ僧貫休が一篇の哀詩、

蜂醉蝶癡一簇香、 繡葩紅帶墮殘芳、

因嗟好德人難得、 公子王孫盡斷腸、

Leaves. 花葩も亦葉なり、葉の變態なり、——never so brave は如何に大いに倔強なる者にてても也、never は never の略、

Have shown their pride. — 其榮名を耀し了りて、

Like you a while. — 汝の如く霎時にして、

Glide into the grave. — 墓に這入る耳、何等の傷心事ぞや、噫、

看多記得傷心事、 金谷樓前委地時、

TO THE CUCKOO.

蜀魂に與ふ

ウーオズウオース作
露 香 述

蜀魂と云ひ、時鳥と云ひ、杜宇と云ひ、死出の田長と云ふ、皆是れ
杜鵑の異名にして、總て其名の依て基する所あり、今試に其一二を
解かん、……………杜宇と云ひ、蜀魂と云ふは、蜀の望帝杜宇の靈化した

るもの、即ち

蜀魂千年尙怨誰、 聲々啼血染花枝、

滿山明月東風夜、 正是愁人不寐時、

時鳥と云ふは其能く時を知りて來るに因るか、支那及び西洋にては、
全く春告ぐる鳥となすと雖も、我國にては全然之に反して夏の鳥と
なす、

ほとゝぎす來啼く五月は初聲をき、遠へほど耳たて、空ま
もりつゝ月に待ち、雨に忍びて宵寐せば、よいにや啼かん朝
居せば、朝やなかと端居して、天嶺にむかひ外に出で、天
雲あふさいたづらに眺めのみして云々、 (瑣々室集)

* * * * *

夕べ見てあしたに見れば夕べより、しゞになり行く夏山のし

げき木の間に時鳥、來鳴き友よぶ春山に、云々、

詩人 Michael Bruce 歌ふて曰く、

Hail, beauteous stranger of the grove!

Thou messenger of spring!

* * * * *

Delightful visitant! with thee I hail
the time of flowers.

* * * * *

死出の田長とて不吉の異名ありと雖も其の能く詩歌に入り畫題に上る亦不思議なり、西洋にては其の能く連呼するを悦び我國にては其の稀に聽くを喜ぶ、蓋し之を愛づるの點に至りては即ち一なり、

O blithe new-comer! I have heard.

I hear thee and rejoice.

O Cuckoo! Shall I call thee bird,

Or but a wandering voice?

ア、快活なる新客よ、我れ聽けり、

我れ爾(の啼く音)聽きて悦べり、

ア、杜鵑、我れ爾を鳥と呼ばんか、

果た亦單にさ迷ふ聲とのみ云はんか、

New-comer! 新客とは愉快なる春と共に來るものなれば爾云、

A wandering voice. 郭公は一つ處に長く啼き居る鳥にあらず飛び去り飛び來りて居所更に分ならず、其の啼く音を探り行かば何處へか飛び去りて影かたちもなし、されば鳥にはあらずして只單に迷ふ聲

とのみ謂はんか、何ぞ我を迷はしむるの甚だしきやと、噫是れ何等の好思想ぞ！さればミカエル、ブルースも歌ふて曰く、

Hail, beauteous stranger of the grove!.....

「一聲は月が啼たかほぞ、さす」

While I am lying on the grass

Thy loud note smites my ear;

It seems to fill the whole air's space;

At once far off and near.

我れ草の邊に打ち臥せるとき、

聲高き其啼き音は我が耳をば打てり、

一時に遠く亦近く、

空一ぱいに響きあひつゝ、

杜鵑の啼聲は頗る高調にして往々人をして驚かしむ、

杜鵑思ひもよらぬ一聲は

寐ぬ我さへも驚ろかれぬる、

只驚白晝山竹裂、杜宇初聞第一聲、

Though babbling only to the vale

Of sunshine and of flowers,

Thou bringest unto me a tale

Of visionary hours.

日の照る溪間、花のまに、

只譯けもなく啼きつれど、

夢みる昔しの話をば、

我に告げ來るものぞかし、

煙霞の裡、緑紅の間、嘈々咕々、空しく春野を叫破すと雖も、而も爾は夢みる青年の時をば我に報じ來るぞよと、蓋し杜鵑は春告ぐる鳥なれば吾人をして人生の春を想起せしむ、

Thrice welcome, darling of the spring!

Even yet thou art to me

No bird! but an invisible thing,

A voice, a mystery.

春の寵兒とて、我は爾を歓迎す!

さるにても爾は猶鳥にはあらずして、

眼に見えざる神物よな、

只々聲のみ、不思議なる聲のみ、

Thrice welcome とは強ち其度数を限りたるにはあらずして其歓迎の

情深さを示せるのみ、
如何に考へ如何に思ひ直しても、爾は鳥なりとは思へぬぞよ、其聲を聞きて其物を見ず、其物を尋ねて其者を得ず、噫不思議なる聲なるかな、

The same whom in my school-boy days

I listened to; that cry

Which made me look a thousand ways

In bush, and tree, and sky.

吾が尙ほ學童たりし日に耳そばだてしと同じ者、其啼音は嘗て緑叢、樹間、蒼空上百方探し見たれを更に見當らざりし者、

To seek thee did I often rove

Through woods and on the green;

And thou wert still a hope, a love;
Still longed for, never seen!

繁れる森、緑なす芝生と、数々汝を探して我は迷へり、嗚呼汝はいつも望まらるゝ者のみ、戀らるゝ者のみ、いつも慕はれつゝ、絶て見えざりし、

And I can listen to thee yet;
Can lie upon the plain
And listen, till I do beget
That golden time again.

然れど猶(懲りずして)なが啼音に我は耳傾く、野原に打ち臥して扱聽き續けん、再び青年の時を想ひ起さんまで、 that golden time 青年の時代を云ふ、再び昔に回りて楽しき青年の夢境と化し去る迄、

O blessed bird! the earth we pace
Again appears to be
An unsubstantial, fairy place;
That is fit home for thee!

噫幸福なる鳥! 我が歩める此地は、空幻虚靈の仙境と化し去るとき、其夢境こそ爾に適はしき住家なるらし、爾の如き幽霊めきたる、即ち蜀の帝杜宇の靈鬼たる爾蜀魂にはかゝる所ぞ能くも適したるよと、正に之れ一結千鈞、

TO A SKY-LARK.

Wordsworth.

雲雀に與ふ

露香解釋

- (1) Ethereal Minstrel! pilgrim of the Sky!
 (2) Dost thou despise the earth where cares abound?
 (3) Or, while the wings aspire, are heart and eye
 Both with thy nest upon the dewy ground?
 (4) Thy nest which thou canst drop into at will,
 Those quivering composed, that music still!
 (5) Leave to the nightingale her shady wood;
 (6) A privacy of glorious light is thine;
 (7) Whence thou dost pour upon the world a flood

- of harmony, with instinct more divine;
 (8) Type of the wise who soar, but never roam;
 True to the kindred points of heaven and home!

雲雀に與ふ

ウオーズワース作
關 露香解釋

- (1) 蒼穹の奏樂者、碧空の順禮者!

註 Rydal 山上詩人ウオーズワース絶叫して曰く、爾は蒼穹の奏
 樂者なるかよ!と蓋し雲雀はと高く天に冲して囀づる鳥は
 あらざるべし、

「かすみはてたるみそらより、聲はさやかにおちくなりし、」

Thomson が春を詠じたる一句に

* * * * he mounted sings

Amid the dawning clouds, * * * *

* * * * * * * * * *

彼は東天告ぐる雲の裡に上りてぞ啼く、

Shakspeare, Rom. H. S. に

* * * * * Now hear the lark

'The herald of morn; whose notes do beat

The vaulty heavens, * * * *

爾が啼く音は天の戸を敲くと、某詩人歌ふて曰く

Mount, child of morning! mount to sing. Shakspeare 之

に和して謂ふ、

* * * * * * * * * *

And wakes the morning from whose silver breath

The sun ariseth in his majesty,

白銀の咽喉吹きならしつ朝を呼び起せば紅暎嚴然として醒

むと、詩人は更に語を轉じて叫ぶらく、爾は碧空を順禮し

廻ると!

Webb 氏註して曰く、Pilgrim of the sky 又は lone traveller

in the sky なりと、詩人 Hogg 歌ふて謂けらく

Where, on thy dewny wing

Where art thou journeying?

* * * * * * * * * *

爾が露けき翼もて何處に、いづこに爾は旅しつゝあるや、

* * * * * * * * * *

爾が可愛きひなは爾をさがし居るに！

Where art thou wandering? * * * *

「みそらにばかりあこがる、ひばりや花をいとうなるらむ」

(2)

何故に爾は注意に充てる地をば輕視するや、

註 雲雀の性たるや、其巢其ひなを愛する切なり、然れば之が注意を要すること多けるに、何故に之を輕じて蒼空に漂泊しなすかと、蓋し其句は Shelly が sky-lark の

Better than all measures of delightful sound,

Better than all treasures that in books are found,

Thy skill to poet were, the Scornor of the ground.

の一節より脱化し來る、蓋し Shelly が之れを作したるは 1820 年にして Wordsworth がものしたるは 1827 年なればなり、亦

Horace が carm III. ii. 24, of Vertue:

“Spernit humen fugiente penna,”

“She scorns the ground with fugitive wing,”

彼女は逃ぐる翼もて地を賤しむと、

綠叢裡に其巢を營み其ひなを育つと雖も、爰には啼かして天に冲して嘯づるが故に爾云ものと見ゆ、

“Thy lay is in heaven, thy love is on earth.”

(3)

或は亦兩翼かくるまに爾が心も眼も露けき地上の巢にあるか？

註 雲雀は其兩翼を羽敲き嘯づりつゝ雲に入り、其の翼の働き止むと同時に其啼く音も止み、一直線に其巢を目かけて降り來るを常とすれば爾が天に對ひて突入する時にも爾の心は猶其子を念ひ爾の眼は猶其巢を見得るや、若し之を念は

何故に巢の近くに啼かざるか、何故に空に漂泊しつゝあるや、と詩人筆を弄して雲雀をいじむる所妙なりと云はんや、(下の句を参照し見よ)

“The kingfisher cares only for its nest, the bird of paradise only being on the wings; whereas the lark unites both characteristics,” * * * * *

Halcyon the Greek name for the king-fisher, was fabled to lay its eggs in nests that floated on the sea for fourteen days * * * * * during which time the weather was always calm and the sea smooth. Hence Halcyon days means days of peace and tranquillity.

(4)

爾が震へる翼をおさめ、爾が音楽を静めなば、爾が巢に自由におちくなり、

註 Those quivering の次に wings being を略し亦 that music の次に being を省きたるものと知るべし、composed は folded に同じ、

第二句にあつては詩人は雲雀をなじりてなが巢を営める此地をいやしみて、何故に清空にばかりあこがるゝや、

と問ひたるが此句に於て之を解きて曰く、爾が念ふいつにても其翼をだにたゝみなば、其啼く音は静まりて、(at will)自由自在に爾が巢に落ち來たるよと、

(5)

陰暗き森は鶯に任しおけよ、
註 爰に所謂 nightingale とは全然、我國の鶯とは同一なるもの

にあらざれども譯字なければ假りに鶯とは言ひ置くなり、
Mrs Hemans 作 To the Nightingale, IV の句に、

At that calm hour, so still, so pale.

Awakes the lonely nightingale,

And the from a hermitage of shade,

Fills with her voice the forest glade,

斯くも静けく、斯くも蒼白き、其穩なる時、(夕暮を指す)
淋げなる鶯は醒めつゝやがて木陰のかくれがより、其聲
もちて森のかげちを充さんと、

(6)

朝日輝くみそらこそ爾がかくれがなるぞよ、

註 鶯は薄暗きたそがれ時にこぐらも森陰に啼きつれど、爾は

全く之に反して “mount, child of morning”¹ 或は “The

messenger of morning” など歌はれて朝日に向ひ雲に突き

入れば爾が隠れ家は即ち glorious light なる所ならんかと、

是れ恰も Shelly 歌へる

“Like a poet hidden in the light of thought,”

思想の光線裡に隠れたる詩人の如しと、噫何んぞ夫れ鶯を
賤めて雲雀を頌むるの斯く大いなるかや、

(7)

其の所より爾は多く神性を帯びて、音調の洪水を此世に注ぎ下
さん、

whence は前句の A privacy of glorious light をうく、more は
Nightingale に比して云ふなり、

鶯(外國の)も雲雀の如く其巢に忠實なる者なれども天に冲して
啼かざるなり、故に雲雀の如き divine instinct を具せざるなり

Shelly

が句に

What thou art, we know not,——what is most like thee?——

From rainbow—clouds there flow not drops so bright to see,

As from thy presence showers a rain of melody!

そも爾は何物なるか、我等知るを得じ、

然らば何物にか爾は能く似たるや?

見れば斯もまばゆき霓雲より雨滴は溢れ降らずと、

爾は其所に現はれて「燦爛たる光線裡に」、

降らず啼く音の一雨は過ぎ行く野路の村雨なり、

(8) 扱も爾は天と地の相互の點に忠にして斷じて思ひ迷はず、

天に冲する賢者の好模範なるよ!

註 爾は斷じて漂ひ迷はざるなり、其の登らんと目指さしたる

蒼空には一直線にかけ上るなり之れ賢者の type なりと云

ふ、縦令爾は碧空に現はるとも其の巢を忘れず、天に在つ

て地を思ひ、地にあつて天に志さず、之れ恰も磁針の南北

を指示して動かざるに均しと、宜なり詩人 Talk を詠じて

世人を教ふ、肉にあつて靈を念ひ、靈にあつて肉を忘れず、

其 relative points に忠實にして迷はざる蓋し夫れ雲雀の如

くなれかしと云ふ。

鼠に興ふ

ボ
ル
ン
ズ

TO A MOUSE.

[There was still, living in Kilmarnoek in 1841, a sometime farm-servant of Burns at Mossiel, by name John Blane, who remembered, when a boy fifty-six years previously, *i. e.* in 1785, running in pursuit of a mouse across a field armed with a pattle or ploughshare scraper. His master, who was ploughing there at the time, he recollected well, called to him upon the instant to let the poor creature alone; Throughout the rest of the day Burns appeared to him more than usually thoughtful, and after nightfall, Blane recalled to mind his employer rousing him from his slumbers—the two of them sleeping in the same garret chamber—to repeat to him this poem about the mouse. Of all the Poet's effusions, it is perhaps the one marked by touches of his very tenderest sensibility. One of the happiest of these has risen

蝶
醉
蜂
狂

almost to the height of a proverb—"The best-laid schemes o' mice and men gang aft a-gely." Garlyle, in reading verses like those which follow, exclaims in rapt admiration, "How his heart flows out in sympathy over universal nature!"]

I.

WEE, sleekit, cowerin', tim'rous beastie,

Oh, what a panic's in thy breast!

Thou needna start awa' sae hasty.

Wi' bick'ring brattle!

I wad be laith to rin and chase thee,

Wi' murd'ring pattle!

II.

I'm truly sorry man's dominion

Has broken nature's social union,

And justifies that ill opinion

蝶
醉
蜂
狂

Which mak's thee starle

At me, thy poor earth-born companion,

And fellow mortal!

III.

I doubt na, whyles, but thou may thieve;

What then? poor beastie, thou manna live

A daimen icker in a thrave

s' a sma' request:

I'll get a blessin' wi' the lave,

And never miss't!

IV.

Thy wee bit housie, too, in ruin!

Its silly wa's the win's are strewin'!

And naething now to big a new ane

O' foggage green!

And bleak December's winds ensuin',

Baith snell and keen!

V.

Thou saw the fields laid bare and waste,

And weary winter comin' fast,

And cozie here, beneath the blast,

Thou thought to dwell,

Till' crash! the cruel coulter past

Out through thy cell.

VI.

That wee bit heap o' leaves and stibble

Has cost thee mony a weary nibble!

Now thou's turned out for a' trouble,

But house or hauld,
To thole the winter's sleety dribble,

And cranreuch cauld!

VII.

But, Mousie, thou art no thy lane
In proving foresight may be vain!
The best-laid schemes o' mice and men

Gang aft a gley,

And lea'e us nought but grief and pain

For promised joy.

VIII.

Still thou art blest, compared wi' me!
The present only toucheth thee:

But, och! I backward cast my e'e

On prospects drear!

And forward, though I canna see,

I guess and fear.

〔上詩の散文譯及註解〕

高橋 五郎

犁を以て小鼠の巢を掘かへして詠める歌

(1)

小き、猾こき、怯弱なる、臆病なる獸子よ、
吁嗟汝が小胸中には何たる恐懼を懐くぞよ、
汝は然かく慌て、飛去るを要せず

急ぎ走りて、

余はかけりて汝を逐ふを快しとせず

殺伐なる犁を以て!

(註) 是れ半ばは蘇國の方言を以て書きたる者とす、故に蘇話
だけは英譯するを要す、

Wec.....beastie = Little, sly, covering, timorous beass. 此

中 berstie は beast の diminutive にして、即ち little beast の謂
なり、此 diminutive たるや、單に其獸の小なるを示すのみなら
ず、又之を親しうするの意味を有す、

A panic's = a panie is. Brestie は diminutive of breast.

Needna = need not; awa = away; sae = so; hasty は hastily にて、
即ち形容詞を以て副詞に代用したる者、 Wi'bickering brattle =
with hasty run.

I wad.....thee = I would be loath to run and chase thee

Wi? は with なり、 patle は一種の鋤犁なり、 An? = and.

(2) 我は眞に哀む人間の統治が萬物の交親を破り了りたることを、
汝が我を見て逃ぐる恐怖も無理ならず、嗚呼此の地生なる汝が
伴侶を、嗚呼汝と同じ儔なる此無常の我が身を（汝が斯く恐る
るも決して無理ならず）、

註 makes = makes; Justify は之を無理ならざらしむるを謂ふ、

驢鼠に對して己れの身を斯く thy poor earth-born companion
と言ひ、 fellow mortal 云云、嗚呼何等の同情、何等の感慨、

(3) 我は汝が時として竊むあるを決して疑がはず、然らば如何ん憫
然なる小獸よ、嗟汝も食ふて活きざるを得ず！食はねば死するを奈
何せんや、一堆の麥束に於ける二三の穂は寔に小さき求なる哉、残
りのものは却つて爲に祝福をこそ得るなれ、何ぞ復疑んや、

(註) Na = not; whyles = at times; mairn = must; daimen-icker =

an ear of corn met with now and then; thrave = shock of corn
(wheat); 's = is; sma = small; blessin' = blessing; lave = the rest,
remainder.

(4) 汝が小さく陋しき家も亦壊れ了りぬ、其脆き四壁は四方の風に
吹き飛され去りぬ、而して今は新しき家を建つべし青草も無い哉！
凄まじき師走の風は厳しくも又鋭くも續て吹き起りぬる哉！

(註) Weet bit housie = little small cot, or little bit [of a] house.
Wa's = walls; win's = winds; naething = nothing; big = build; o' =
of; foggage = grass; ensuin' = ensuing; baith = both; snell = bitter.

(5) 汝は田野の裸になり且荒れたるを見、悲しき冬の速かに來るを
見るや、茲に風をば避けて温かに住はんと思ひなるを、遂に無殘
や情しらぬ鋏の刃は汝の蝸廬を覆へし畢んぬ、

(註) comin' = coming; cozie = cozily, snugly.

(6) 木の葉や麥藁の夫の小さき巢も汝には幾多の骨折をかけたる者
ぞよ！然るに汝今は其骨折も水泡にて掘出されつ、家も住居もあら
ばこそ、冬の氷雨「ヒサメ、ミヅレ」と寒む霜に苦しむんぬす、

(註) mony = many; but = without; hauld = home; thole = suffer;
cranreuch cauld = cold frost!

(7) されど小鼠よ、先見も豫備も如何に屢く空しきかを證するは汝
獨りに非じかし！騾鼠の良計も人間の長策も屢く失敗する者ぞ、殘
る者としては只望の空きをかこつ悲哀と苦痛の涙のみ、

(註) thou art no thy kame = thou art not alone; Gang aft agley =
often go wrong; lea'e = leave.

(8) 然はあれども我に比ぶれば汝は尙も幸福なる者ぞ、汝は惟現在

を感ずる而已、されど吁嗟我は過ぎにし方を顧みもし、怖ろしき往
く先きをも亦望む、固より先きは見えねども、察しては慄くぞ憫れ
なる、

(註) *eye* = eyes ; = *canna* = cannot.

Still thou art blest (happy), compared with me とは實に無限の
感慨、凡そ涙ある者は誰か其臉に涕泗の滂沱たるを覚えざらんや、
斯の天才をして然か泣然と鼯鼠を羨ましめたるは、嗚呼誰の罪ぞや、
果して誰の罪ぞや、

TO THE NIGHTINGALE.

鶯に與ふ

Mrs. Hemans. 作

關 露 香 譯

I. WHEN twilight's gray and pensive hour,
Brings the low breeze and shuts the flower,

And bids solitary star
Shine in pale beauty from afar :

II. When gathering shades the landscapes veil,
And peasants seek their village dale,

And mists from river-wave arise,
And dew in every blossom lies :

- III. When evening's primrose opes to shed
Soft fragrance round her grassy bed;
When glow-worms in the wood-walk light
Their lamp to cheer the traveller's sight:
- IV. At that calm hour, so still, so pale,
Awakes the lonely nightingale,
And from a hermitage of shade,
Fills with her voice the forest glade.
- V. And sweeter far than melting voice,
Than all which through the day rejoice;
And still shall bard and wanderer love
The twilight music of the grove.

鶯に與ふ [同上の譯評] 關 露 香

一 蒼然として百憂生じ來る日の暮に低き微風は吹き起り、花は閉ぢつ、獨り寥しき星の遠くより蒼白く美はしく輝き出る時、

(1) 夕暮の景を叙す、曰く暮色靄然として何時ともなく掩ひ來り、漸々暮れゆく空は灰色となりて何となく物悲しきこゝちすと、

暮雲千里色、無處不傷心、

時に微風颯然として地上に吹き起り、百花は茲に閉ぢ、寥々たる夕星遙かに蒼白の美を呈して輝き出づ、

二 彌重なり來る暗影は野山を包み、村びとは片山里の家路を覓めつ、夕霧は河波より立ち登り、

花毎に露ぞおさしく其とぎに、

(2) 恰も暗影の重なり來るが如く野も山も皆其の色に包まれか
かるとき百姓は其日の業を終りつ家路をさして歸るとき、漣よ
する小河の水に夕霧の立ち昇りて花毎に露をおきしくときに
と、今や將に暮れなんとする片山里の夕景を叙す、正に是れ

暮色入蒼茫、 烟波生綠浦、

の想ならんか、若し我國の詩人をして此光景に與からしめば必
ずや寒村遠寺の鐘聲を敷衍し來りて、

牛ひき歸る里の子が、 あと吹き送る夕風に、

遠寺の鐘は哀れにも、 諸行無常を告げ渡る、

あなたの空を眺むれば、 見えつ隠れつ夕星の、

影は白みて美しく、 はや暮れそむる山の色、

などとも言はんか、

二 夕暮の連馨草吹き始めて幽香馥郁草のまどねに廻りつ、森陰に
這ふ甲蟲の旅人の眼を悦ばさんと其火を點じ來るとき、

(3) 第一節にあつては薄暮の景を説き第二節にあつては夕暮の
景を叙し、此節にあつては野も山も村落も皆夜色に包まれて丹
鳥の灯を點じて旅人を悦ばしむるの光景を叙ふ、Glow-worm は
通例螢と譯すれども實は螢に非ずして甲蟲の一種類なりとす、

Glow-worm 又は The wingless female of a kind of beetle, emitting a shining green light to attract the male なり、(Dr. Annandale's The Concise English Dictionary.)

IV 斯く静けく、斯くも蒼白く、其穩かなる時獨り淋しげなる鶯は
眼さめつ、やがて森陰の隱遁所より其啼く音をば漏らし來るに其聲
林間に響き渡り四邊に充ち満つと云ふ、

(4) 前三節は此節に於ける *at that calm hour* を説かん爲めの序なり、夫れ斯の如き幽寂静雅の時に當りて森陰に隠れたる黄鳥の眼を醒まして歌ひ出づる其音は非常に高調なるもの也とぞ、*Nightingale* 又は *night-singer* の意にして異名を *Philomela* 亦是 *Philomel* と云ふ、時に又 *Attic warbler* と稱す、*Athens* の王 *Pandion* の女 *Philomel* の化身したるものなりと傳ふ、
 < 柔婉なる美音よりも遙かに快よく晝の中に樂みたる諸の物に遠く勝れり、寔に詩人も旅人も林間の黄昏樂(即ち鶯の嬌聲)を永なへに愛すらん、

THE SPRING JOURNEY.

春の旅路

- (1) O green was the corn as I rode on my way,
 And bright were the dews on the blossoms of may,
 And dark was the sycamore's shade to behold,
 And the oak's tender leaf was of emerald and gold.
- (2) The thrush from his holly, the lark from his cloud,
 Their chorus of rapture sang Jobial and loud!
 From the soft vernal sky to the soft grassy ground,
 There was beauty above me, beneath and around.
- (3) The mild southern breeze brought a shower from the hill,
 And yet, thought it left me all dripping and chill,
 I felt a new pleasure as onward I sped,

- To gage where the rainbow gleaned broad over head.
 (4) O such be Life's journey, and such be our skill,
 To lose in the blessing the sense of the ill;
 Through sunshine and shower may our progress be even,
 And our tears add a charm to the prospect of heaven!

春の旅路

ビシヨブヘルバル作
 露 香 意 譯

- (1) 乗り行く駒のみちのべは、
 頃は五月の花盛り、
 見れば無果花(葉)しげく、
 檜の若芽のたはやかく、
 緑うち敷く麥畑、
 置く露とても輝きぬ、
 過ぎ行く日影いと暗し、
 黄金や珠と見紛ぬ、

- (2) ヒラギのヒヨ鳥實をちらし、
 悦び溢るあいのてを、
 霞む春べの御空より、
 上にも下にも何處にも、
 ゆるく吹き來る南風に、
 過ぎ行くあとの我身こそ、
 さわれ馳け行く前途をば、
 頭上にひろく輝ける、
 人の旅路もかくあらん、
 苦しき念ひ襲ふとも、
 日向や雨を過ぎ行きて、
 扱は涙も一しはの、
 雲の裏より降る雲雀、
 聲も高らかに歌ふなり、
 烟る緑の野原まで、
 美は溢れ出づいまこゝに、
 一村雨を載せて來ぬ、
 まづくたりつゝ肌さむし、
 我は一しは樂みぬ、
 其所にぞ虹をみとむれば、
 人のてなみもかくあらん、
 恵みの裡に埋めすてゝ、
 我等が行くて平げむ、
 天の榮に興添へん!

WHAT IS LOVE.

戀とは何ぞや

露 香 述

戀は何んである？ 戀に上下の差別なしと謂ふ、上は王侯貴人より、下は田夫野人に至る迄、之を味ふの *Test* は蓋し一樣なればなり、

Holy 曰く

“Love converts the hut into a palace of Gold.”

戀は茅屋をして金殿玉樓とならしむ、

“Love's voice doth sing as sweetly in a beggar as a king.”

Decker.

戀の聲は帝王の如く乞食にも亦美はしく歌はれむ、

何處にても戀の棲む所春となり、戀の去る所秋となる、錦綉繡帷の裡に衣食すとも、戀てふもの、身に染まざりせば、彼が生活の半面は事實に於て死したるものなり、息かよひ、血めぐり、肉温かなるも、彼が心界は *deadly cold* たるなり、荒村破屋、身に檻樓を纏ふとも、戀なるものともならば彼が生活の線路にあつては *vivid person* たるなり、ブルータスの劍、Love を刺し能ふまじ、ソロモンの智、Love を制し能ふまじ、クリサスの富 Love を購ひ能ふまじ、

“Love can neither be bought nor sold; its only price is love.”

戀は賣買共になし難し、其値は單に Love たるのみ、

Longfellow 亦謂ふ

“Love gives itself and is not bought.”

Southey 吾人に告げて云ふ

“Love is indestructible, Its holy flame forever burneth,

From heaven it came, to heaven it returneth.”

戀は不可滅なるもの、其の聖き火焰は長なへに燃えん、

天より出で、天に歸するまで、

然り戀は斷じて滅し能はざるなり、隠さんとして隠し能はざるなり、
諺に謂ふ、

“Love and poverty are hard to hide.”

包みかねたる戀と貧、

“Love will creep where it can not go.”

戀は歩み能はざる處には匍ひて行く、

神經激甚なるバイロン歎じて謂けらく、

“Thou wilt find its way

Through paths where wolves would bear to prey.

豺狼もさ迷ひ恐れん道にても

猶爾は道を求めてぞ行かん、

されば Love にあるものは恐れあるなし、Love は恐怖を制し之れを御して馳す、人は死を恐る、若し人に死を恐るゝの恐れなかりせば世には恐怖なるものあらざるなり、戀の祭壇には死の供物あり、されば何人も戀を祭らんと欲せば常に死の供物を備へざる可からざるや論なし、戀は既に死に勝つ、亦何の恐る可きことやある、

「戀は曲物なり」と云ふ、男、女を戀ひ、女、男を戀ふ、蓋し老若の區別なし、故に戀は Mysterious なりと云ふ、Age も戀にかゝはらば、戀は常に renewing しつゝあるなり、Pascal 謂く

“Love has no age, as it is always renewing itself.”

Thomas à Kempis 更に語氣を強めて云ふ

“Love is eternally awake, never tired with labour, nor op-

pressed with affliction, nor discouraged by fear.”
 戀は永遠に醒めつ、断じて働さに倦まず、困苦に屈せず、亦
 恐怖に失望せず、

諺にも云へる如く「戀は働さを輕ふす」と見よ如何なることにても戀
 人の爲に盡す work は常に快味を覺へ、場所を撰はず、時を厭はず、
 愉快のうちに成し遂ぐるにあらずや、Italian proverbs に

“Love knows nothing of labour.”

戀は労働の何ものたるをも知らじ、

Lovers are never tired of each other;

They always speak themselves. — La Kocke.

戀人は断じて互に倦まざるべし

彼等は常に彼等自身を語り居るなり

“Love is blind.” 「戀は盲目なり」と云ふ、詩人 Samuel Coleridge
 一婦人に告げて云ふ

“I have heard of reasons manifold

Why love must needs be blind,

But this the best of all I hold——

His eyes are in his mind.”

然り戀は盲人なり、鋭き明きめくらなり、己れの欲せざる所のみ
 見えざるの盲人なり、其の手は美はしき薔薇の花にのみ觸れて巧に
 其刺を避くるの盲人なり、而も他人の見ることを能はざる所をも忽ち
 catch する盲人なり、諺に云ふ

“Love has the large mantle.”

戀は大なる上衣を有す

と然り戀は其の戀人の缺點を覆ふべき大なる上衣を持てり、大詩人 Spenser 之を解ひて謂ふ、

For lover's eyes more sharply sighted be
Than other men's and in dear love's delight
See more than any other eyes can see.

戀は人を變化せしむ、殊に青年男女に於て最も甚し、蓋し變化に於て美は發生するもの、美の發生すると共に、Love は誘引せらるべきもの、詩人 Dryden 謂へり、

"I am not what I was; since yesterday."
我は昨日より最早我がありしものにあらじ、

如何なる快活なる青年にても、一度戀の襲撃をうけては、恰も花の雨に惱むが如くに凋む、之れ彼は人生の第一期より第二期に進入し

來ればなり、Addison 歌ふらく

"'Tis second life, it grows in to the soul,
Worms ev'ry vein' and beats in ev'ry pulse."
そは第二の生命なり、一度心に發せば
各血管を温め、各脈管を打つ、

然り彼は忽ち心界の帝王となつて支配す、而も如何なる法律をも設けず自在に支配す、"Love rulse without law" Otway が作 Orphan に

"Love reigns a very tyrant in my heart,
Attended on his thrown by all his guards,
Of furious wishes, fears and nice suspicions."

如何に名譽心に富む者と雖も、如何に世の富貴に驕る者と雖も、彼

に反抗し能はずして忽ち其前に平伏す、否な平伏するにあらすて全く奴隸と化し畢る、嗚呼如何に其の yoke の重きことぞや、

“Fantastic tyrant of the anorous heart,

How hard thy yoke! how cruel is thy dart!”

戀ふる心の古怪なる暴君よ、

如何に爾の軛の苦しこと、如何に爾の箭矢の酷なること、

Byron 歎じて曰く

“Alas! what eles is love but sorrow?”

噫戀は悲哀の外何者か?

然り戀は哀悲なるものに相違なし、然れども之れ總て世の悲哀なるもの、中にて最も sweet たるものなり、故に Dryden も斯く念ひて言へり、

“Pain of love be sweeter far,

Than all other pleasure are.”

戀に悩むは總て他の快樂よりも

遙かに sweet たるものなり、

Love は心を痛めるもの之れ其の性なり見よ Love の樹木は涙を以て培養し始めて其花の美なるを見る恰も密雨儉かに濕て春草緑深きが如けん、英國の詩人 Scott は其名作「湖上の佳人」HY の「に歌ひて曰く、

The rose is fairest when 'tis budding new,

And hope is brightest when it dawns from fears;

The rose is sweetest washed with morning dew,

And love is loviest when embalmed in tears.

薔薇正に蕾を破らんとする時ぞ殊に美なり、
 希望正に恐怖を脱せんとする時ぞ殊に輝くなり、
 薔薇は朝露に洗はれて猶麗はし、
 戀は涙に包まれて猶愛らし、

蓋し Love を培養するに於ては Doubt は禁物なり、「疑念は戀の錆なり」如何なる名刀なりと雖も一度も疑念の錆を生せば忽ち其銳を失す故に戀の宮殿にあつては寸毫の疑心入るを禁せり、完全無缺なる Love は恰も水晶の如く透明なるもの、決して一點の塵だも容れず、疑心生せば戀は最早破壊したるものと知るべし、破鏡再び元に歸らずとか云ふ、一度破れたる戀は斷じて First Love の如く sweet たるものにあらざるべし、

明治三十三年七月二十日印刷
 明治三十三年七月廿四日發行

定價 貳拾五錢

不許複製

著者 關 貢 米
 發行者 東京市神田區裏神保町六番地 高岡安太郎
 印刷者 東京市京橋區築地三丁目拾五番地 淺野榮作
 印刷所 東京市京橋區築地三丁目拾五番地 帝國印刷株式會社

發賣元

東京市神田區裏神保町六番地 高岡書店
 東京市牛込區神樂町三丁目六番地 盛文堂書店

特約店

東京 東京堂 ● 上田屋 ● 岡崎屋 ● 大 吉岡平助
 神田

薔薇正に蕾を破らんとする時ぞ殊に美なり、
希望正に恐怖を脱せんとする時ぞ殊に輝くなり、

